

NO.30  
SUMMER  
1970

# 英語展望

ELEC BULLETIN

## 国際展望

「世界市民像」「国際的な説得力のために」  
「日本の英語教育管見」「世界に開く日本の窓」  
故市河三喜先生を偲ぶ

斎藤勇・福原麟太郎・石坂泰三・石橋幸太郎・中島文雄  
亀井高孝・朱牟田夏雄・上野景福・Albert S. Hornby

座談会「言語行動の比較研究」  
中島・服部・前田・国広・中根・国弘  
「今日のイスラエルと聖書」  
新英文法講座「Objective Complementの種類(2)」  
「Mother Gooseの世界(その4)」  
「アメリカ旅行見聞録」

# 英語展望

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc.

NO. 30  
SUMMER  
1970



## 【国際展望】

世界市民像	高橋 源次	2
日本の英語教育管見	小川 和夫	4
世界に開く日本の窓	貝瀬 千章	6
国際的な説得力のために	國弘 正雄	8

## 【特 集】

故市河三喜先生を偲ぶ…斎藤 勇・福原麟太郎・石坂泰三	15
石橋幸太郎・中島文雄・亀井高孝	
朱牟田夏雄・上野景福・A.S. Hornby	

## 【座 談 会】

言語行動の比較研究	中島文雄・服部四郎・前田陽一	26
	國廣哲彌・中根千枝・國弘正雄	

今日のイスラエルと聖書	清水 譲	38
Objective Complement の種類 (2)	中島文雄	43
Mother Goose の世界—雑感的序説(その4)——	平野敬一	49
アメリカ旅行見聞録	國廣哲彌	54

## 【新刊書評】

<i>Applied Linguistics and the Teaching of English</i> …小川芳男	63	
「変形文法」	梶田 優	66
展望通信		71

## 世界市民像

TAKAHASHI, Genji  
高橋源次

これは市河三喜博士 (ELEC 理事) 著 *Collected Writings of Sanki Ichikawa*<sup>1)</sup> の英語教育に関する論説を中心にして、世界市民像を考察し、その基盤となっている Humanity と Nature の関係、換言すれば、世界、自然、人間のつながりを Communication の観点からながめた一つの試論である。

市河先生の、わが国の英語教育に対する基本的見解が、“The Necessity of English”<sup>2)</sup> の結語、“Now we, as citizens of the world, are to make it a tool, a tool indispensable for the rebuilding of our fatherland.” によく現われている。従って先生の英語教育論は、communication tool としての英語の機能を強調するものである。ここにいわゆる citizens of the world とは、どういう意味に用いられているのであろうか。「世界市民」は Bacon や Goldsmith, 古くは Socrates にもある。みな理想的人間像としての世界市民である。

世界市民は個人を世界の一員と考える。国を忘れていないのではない。国を思えばこそ世界である。個人と国と世界が三位一体の理念に立つ。個人が世界の文脈でとらえられ、いわば人類的個人である。

Citizens of the world は children of Nature である。Human nature と Nature とは同心円の関係にある。彼らは自然の声を聴く。Supernatural で supernatural communication ができる。それは、世界伝達の practical なのに対して、creative で religious な伝達といつてもよい。“A still small voice”<sup>3)</sup> に聴く。

世界市民はわれわれの「存在」を意味するのではない。まさにるべき姿である。「当為」の理念であり、期待される理想的市民像である。

世界市民は英語を international communication のために学ぶ。英語の世界語性をすなおに認めるからである。

市河先生の「世界市民」は以上のように要約できるが、今少しく述べよう。

英語は、国語としては勿論のこと、第二国語として、または外国語として、広く全世界に用いられている。まさに world language である。人類文化への贈物という

意味で gift to civilization である。そうした文明觀と世界市民觀が直結する。<sup>4)</sup>

世界市民は、個人個人が one community に属するという「世界は一つ」の考えに立つ。政治の厳密な意味における市民でないことは申すまでもない。いわば world body の member であり、organ であるという聖書的意味に考えてもよい。<sup>5)</sup> 或いは文学的に、Tennyson の “the Parliament of Man, the Federation of the world” に見えるように、世界連合体に属するものと解することもよい。<sup>6)</sup>

世界市民としての日本人は、世界語としての英語の伝達力を必須条件とする。特に日本人の場合、表現力、発表力を重視すべきである。そのためには speaking と writing の教育が必要である。日本の未来は英語の習熟に依存する。<sup>7)</sup> とはその意味においてである。

Expression の能力は戦前戦後変わりなく先生の強調されていたことである。Communication tool としての英語を重視するとき、当然の帰結というべきである。<sup>8)</sup> この点日本人は甚だ弱い。文学の方では、悲しい哉、仏に負けているし、語学の面では独とか北欧諸国に一籌を輸すというべきである。特に、“the art of writing English” に劣っている。

日本人の表現力は、今日では、この見解の述べられた40年前に比べて、遙かに改善されていると考えられよう。しかし、現在、海外に発表される日本の英學は極めて貧困である。理工方面が比較的盛んで世界の文脈で直ちに

1) 語学教育研究所編 開拓社 1966 初版総頁数249.

2) pp. 235-237

3) *I Kings* 19. 12. NEB では “a low murmuring sound.”

4) pp. 106, 232-233, 235, 237, etc.

5) *Romans* 12. 4-5, *I Cor.* 12. 26, etc.

6) “Locksley Hall”, l. 127.

7) p. 237

8) p. 219(1930), 237(1948)

評価されるのに対して、英学の方は著しく貧寒である。翻訳、紹介に没頭していくは、肝心かなめの英学が、一方通行の見本になってしまう。

この点において見習うべき、5人の先輩が挙げられている。神田乃武<sup>9)</sup>、新渡辺稻造<sup>10)</sup>、内村鑑三<sup>11)</sup>、菊池大麓<sup>12)</sup>、桜井錠二<sup>13)</sup>は、各秀れた英語力を以て眞の世界市民といえる。<sup>14)</sup> これらの先人達を世界市民たらしめたには、秀れた英語力と共に、英米文化の教養があった。彼らは識見、人格において眞の國際人であった。その“broad vision”と“internationally-minded personalities”は English competence と1つのものとなっていた。<sup>15)</sup>

以上のような世界観が、市河先生において自然観と一致している。Humanist と naturalist とが先生において渾然と融合しあっている。<sup>16)</sup> William Blake の “Auguries of Innocence” が、先生愛誦の詩句であったと知って、宜なる哉と思う。<sup>17)</sup>

“To see a world in a grain of sand,  
And a heaven in a wild flower;  
Hold infinity in the palm of your hand,  
And eternity in an hour.”

一粒砂の内に世界を観、一草花に天国を見る、掌に無边际をもち、一点鐘の間に永劫をとらえる、という Blake のこの神秘的な自然観が、先生のものでもあったのであろう。“Love and observe Nature!”<sup>18)</sup> の叫びが黙示するものはそれにちがいない。前置詞 for の用法の研究に引用されている Tennyson の、“A little flower—but if I could understand/What you are, root and all, and all in all,/I should know what God and man is.”<sup>19)</sup> に通ずるものと見られる。先生はまた、Wordsworth と共に自然に対する愛の酬われることを信じておられた。<sup>20)</sup>

Blake が “Songs of Experience” の中で歌っているように、聖なる言葉、“The Holy Word”，との対話をなしうる詩人的心情がそのまま先生のものであつたろう。こうした poetic dialogue の理解があればこそ、わが国詩歌の英訳に尽くされたのである。書中随所に英詩が引用されているのも、その辺に理由がある。語学者が人間性 humanity を失なつてはならないともいっておられる。自然に親しむことも、文学の鑑賞も、その人生観から出ているのであろう。最近のエッセイ “Philology and Humanity” (1962) はその間の消息をものがたるものといえる。

現代は、A. Camus によれば、“the century of fear”<sup>21)</sup> である。P.F. Drucker は “the age of discontinuity”<sup>22)</sup>

と呼んでいる。断絶は時間的には歴史の連續性をばみ、generation gap を深める。人間不在の科学がもたらすものである。文明が今日の如く技術に傾斜し人間を疎外した時代は曾てなかった。いわゆる “the technetronic age”<sup>23)</sup> の虜とならぬように心がけるべきである。

高度に発達した近代科学の所産としての現代文明の肯定的一特性は、知識の表層性にあるといえる。ものの深層構造に徹することをせずに、要約・摘要に馴染ませてしまう傾向である。Hermann Hesse が “the age of the digest”<sup>24)</sup> と称しているゆえんである。要約はものの深奥に目をつぶらせる。徹底の敵である。知識であれ何であれ、要約と徹底とが調和されておらねばならぬ。Antinomy というか、ambivalence というか、二者が結合されるところにのみ、ものを、細大洩らさず、親疎を区別せず、遠望深慮のうちに、洞察達観しうる世界がある。

以上の観点からして、現代は未曾有の危機をはらんでいる。まさに “this world hour”<sup>25)</sup> である。

世界市民の image も、「要約」的に皮層に理解されなければならない。Blake の詩句<sup>26)</sup>

“Every thing that lives  
Lives not alone, nor for itself”

は、万物共存、万国連帯の理を示すものと考えるべきである。その意味において、前述した Tennyson の詩を再読三思して、市河先生の世界観に思いをいたすべきである。先生において神秘主義が敬虔な信仰にまで高められている。世界市民像はここにいたって初めて完璧に達すといえるであろう。

(ELEC 英語研修所長)

- 9) 1857-1923.  
10) 1862-1933.  
11) 1861-1930.  
12) 1855-1917.  
13) 1858-1939.  
14) p. 97  
15) p. 103  
16) p. 114  
17) 先生のご葬儀のあと頂いた挨拶の葉書に原詩と鈴木豹軒の漢訳とが印刷されていて、「故人愛誦の詩句」となっている。  
18) p. 239  
19) “Flower in the Crannied Wall.”  
20) p. 238  
“...Nature never did betray/The heart that loved her.” — *Tintern Abbey*, l. 124. p. 114.  
21) “Neither Victims Nor Executioners”, in *The Human Dialogue* ed. by Matson & Montague, Free Press, N.Y., 1968, pp. 300-305.  
22) *The Age of Discontinuity*, Harper & Row, 1961.  
23) Z. Brzezinski, “The Technetronic Age”, in *Dialogue*, vol. 2, No. 4, 1969.  
24) *Magister Ludi*.  
25) M. Buber, “Hope for This Hour” in Matson & Montague, *op. cit.*  
26) *The Book of Thel*, II.

## 日本の英語教育管見

OGAWA, Kazuo  
小川和夫

日本人の英語、ないしは日本の英語教育ということについて、私の経験から考えていることを二三記すことにする。

私が学校を卒業してから30何年間かかかった放送局という勤め場所は、外務省などの特殊な役所はべつとして、普通の役所や会社にくらべて、日常の仕事の上で外国语がおそらく段違いに必要とされているところであった。まず世界の主な通信社から24時間中、ほとんど切れ目なしにニュースがテレタイプで流れこんできていた、それを瞬間に選択し日本語のニュースに仕立てあげる係もいるし、世界ほとんどあらゆる国の短波放送を受信して、そこから必要なニュースを拾いあげる専門家もいる。海外には24の総支局があって、そこに駐在している特派員は、英語なりフランス語、ドイツ語なり、あるいは中国語スペイン語なりを駆使して取材にあたっている。逆に日本からは毎日延37時間の海外向け短波放送が実施されており、これには23の違った国語がつかわれている。放送文化研究所というところでは世界における放送に関する情報を細大もらさず蒐集し編集している。ざっとこんな具合で、私自身の経験からいっても、命令が出ればその日にもスーツケースひとつにポータブルのタイプライターと16ミリのカメラをひっさげて飛行機にとびこみ、知らない国に降りたって、とたんに取材にとりかかるというようなことは珍しいことでも何でもなくて、朝起きれば朝飯を食うぐらいに当たり前のことであった。

だから（私はべつとして）NHKでは流暢に外国语をしゃべれる人間には、内幸町の放送会館の廊下を歩けば10メートルに1人ぐらいの割合でぶつかるのであって、そういう人間は稀少価値でもなんでもないのである。しかし、これは「とにかく流暢に話せる」という程度なのであり、イギリス人とかわりがないように英語がしゃべれ、電話をかけるとフランス人に間違えられるほどフランス語が身についている者となると、寥々たるものであって、私の知っているかぎりでは英語で1人、フランス語で1人しかいない（むろんNHKはひろいのであるから他にも私の知らないそのような人がいるにはちがいないのだが）。その1人はカナダの英語地域で生まれた二世であり、もう1人は外交官の息子さんでマルセーユで

育ったのであった。

こういうことがあるから、私はイギリス人同様に英語を話したり書いたりすることは、英語国に生まれ育ったのではないかぎり、到底できない相談であり、はじめからあきらめた方がいいと思う。しかし「とにかく流暢に」あるいは「まがりなりにも」英語を話せるということは、前に述べたとおり、そのような人間が群をなしている職場が現実にあるのだから、これは実現しうることなのである。

ところで私がヨーロッパに4年間ほど特派員として滞在していて痛切に感じたのは、このような「とにかく流暢に」とか「曲がりなりに流暢に」というのでなく「なんとかいくらかでも英語で用が足せる」日本人が驚くほど少ないということであった。ヨーロッパに飛んでくるくらいであるから、昨日まで丹波の山奥で炭を焼いていたわけではないので、みんな何のなにがしというサムライないしは女史ばかりであり、そのサムライや女史がおいでになるので、私ども放送新聞関係の特派員ばかりでなく、大使館員や各商社の駐在員なども、本来の業務よりも接待のために費す時間が多くなっているというのが実際なのである。これはおそらく日本だけの特殊な現象だといってよからう。ほかの國の人間なら外国に行っていても自分で用を弁ずるだろうし、その自信のないものは出かけてゆかないに相違ない。私どものあいだで使われていた符帳に From airport to airport というのがあって、「空港に着いてから空港を飛びたつまで」面倒をみなければならないお客様の意味である。一日名所を御案内して夜ホテルのベッドに寝かせつけ、さてカウンターに、明朝の朝飯は、ベーコンエッグズとトースト、ティーを何時に何号室に運んでもらいたいとのまなければ、そのお客様は飯も食えぬのである。そしてそういう「視察」を終わって帰国後「ヨーロッパにおける教育制度何とか」というリポートを提出した大学教授も事実あったのである。

私はなにも日本人がみんな或る程度まで英語を話し書き読む能力を持つことが必要だと主張しているのではない。そんなことは毛頭考えていない。しかし日本語のほかに英語（これはフランス語でもホッティントット語で

もいいのだが）といつに不可思議なことばを語る人間が地上にいて、そういう不可思議なことばを操る以上、同じ人類であってもその種の人間はいくらか日本人と違っている。気持や、その気持を生む風俗習慣がちがっているということを意識するために、英語をいくらかでも学ぶ必要はあると思う。考え方の違う人間がこの地球の上に存在するのであるから、おたがいに歩みよりをしなければなるまい。ということはお説教で教えるのでは駄目であって、ことばの違いから身にしみて悟らなければ有効ではなかろう。のために中学の1年か、2年までは、英語を必修科目にする必要があると思う。むずかしく言えば視野をひろげるためである。

中学の3年（ぱあいによっては2年でもよい）や高校では英語は選択科目でよい。しかし選択科目でよいというのは、いいかげんでよいということではないのであって、中学1、2年の必修のさいにも、その後選択科目になってからも、教える以上は現在よりもはるかに集中的に intensive に学習させなければならぬと考える。私の中学時代（もちろん旧制であるが）には英語の授業が1日に2回の日もあったように記憶する。だから週に7時間か8時間はあったろう。現在はそれよりもずっと少ないようである。それでは英語の授業の効果はははだしく削がれてしまうのであって、これは昔通りに、あるいは昔より以上に授業時間をふやさなければいけない。文部省や中央教育審議会は英語授業の効果について、はたしてマジメに考えているのであろうか。

英語が選択科目でいいというのは、語学の能力をまったく欠いている生徒、あるいは語学にまったく関心を持たぬ生徒が相当いて、そういう生徒にむりに外国語習得を強制しても何にもならぬからである。私は旧制高校の文科時代、微分積分というものに怯じけをふるった。幸いに数学の先生がイタリア語の大家でもあって、中途でサインコサインをやめて *lo ho un libro* を教えてくれた。試験もイタリア語であった（そのような濶遠な時代であったのだ）。私がたとえ1年間高等数学を強制的に注入されても、その結果首をくくりたくなるだけで何の収穫もなかったであろうように、英語と聞くと身の毛がよだつような学生には無理に教えても無益である。英語を学んでもよいと考え、英語に若干の興味を持ち、そして将来は英語が多少なりとも必要な職業につこうとしている学生には、その興味と関心をたかめる方法はいくらでもあるだろう。英語教育の技術は昔より格段に進歩しているはずである。

大学に入ってからは、法学部や経済学部や工学部や、つまり英文科以外の学生の英語の力をもっと伸ばし強化しなければいけない。こういう学部を出た人々が英語を

必要とする度合いはますます大きくなるのであって、大学の英語教育はその要請に応じなければならない。いつたい中学から大学まで10年間も英語を勉強し、それで海外に出かけてきて朝飯も自分で注文できぬというのは、おかしな話ではないか。もっとも大学に入ってから英語を覚えようとしてもそれはおそすぎるのあって、中学の3年間でだいたい勝負はきまってしまうと思われる。中学の3年間で英語の基礎を身につけなければ、それでもう一生英語はまず覚えられないといってよからう。この時期に猛烈な訓練を課することが肝要だ。中学校英語教育無用論ならばそれはそれで、私は賛成できないけれども、筋はたっているのだ。しかし英語教育が必要だとするならば、いまの中途半端なやりかたではだめである。私の中学時代には前にも述べたように、英語の授業が現在よりもずっと多くあり、そのほかに3年まで音楽もあったし、漢文というものもあった。いま英語の授業時間数を減らさなければやりくりがつかぬという理屈は私にはのみこめないのである。

Intensive というのは授業時間を増すことだけではなくて、質的にもきびしく学習させるということでもなければならない。English without tears などというのはウソの皮である。私が今日いくらかでも英語が操れるとすれば、それは中学の1年生のときに、高等師範を卒業してすぐ赴任してこられた大塚高信先生の秋霜烈日のごときお仕込みを受けたおかげである。ついでに書いておくと、私の中学（東京府立一中、現在の日比谷高校）ではリーダーの巻3まで、つまり3年生までは、全部テキストを暗記させられたのであって、それが後年どのくらい役にたったか知れない。日常会話などというものは、リーダーの巻3までたいてい間にあうのである。もうひとつついでに書くと、昨年病氣で半年ほど入院した折、テレビの英語会話講座をきいてその巧みな指導や工夫に非常に感心したけれども、難癖をつければ、気のきいた言いまわしを教えすぎる。日本人は外国に行って、へんな外人に見られる必要はないのである。

あと大学の英文科をどうするかという厄介な問題もある。だんだん英文学ばかりを教えない英語科にかえてゆく必要があろう。それからまた英文学界という特殊な異常な社会がある。それをいまとりあげる紙幅がないが、乱暴な結論だけ述べると、英文学会の大会を10年ほど休会し、各大学の紀要というのも10年ほど発刊停止になると、日本の英文学界は正常な状態（禿木、秋骨や漱石の時代）に復するかもしれない。

（成蹊大学教授）

# 世界に開く日本の窓

—国際放送あれこれ—

KAISE,  
貝瀬千章  
Chiaki

「国際放送の英語番組を担当しています」というと、まずたいていの人は宇宙中継のテレビ番組、アポロであるとか、日米首脳会談であるとかの担当であると解釈するらしい。しかし、「短波を使った海外向けラジオ放送です」というと、一瞬多くの人がなんだというような軽べつの表情をみせる。そこでですかさず、「いや日本の実情を海外に伝えるもので世界中の人々に聞かれています」というと、またこれはこれはというふうにこちらを見直す——これが私たちの仕事に対する世間一般的の見方であるといってよい。

将来はともかく、現在国際放送は各国とも、もっぱら短波を用いたラジオ放送で、英語その他の外国語によって自国の実情、意見をPRしている。そのほとんどが国営放送であるが、日本ではNHKが1935年から行なっており、“Radio Japan”的コールサインは海外聴取者に評判がよいようである。

日本のありのままの姿を英語で正しく他国の人々に伝えるということは、よく考えてみれば至難のわざである。日本はまだまだ外国人にとっては未知の国である。近年日本のめざましい経済発展のおかげで、「第3の大国日本」あるいは「21世紀は日本の世紀」といった感勢のいいキャッチフレーズで日本を評価し、日本を紹介する人も出てきたが、一方では依然として日本のexoticあるいはmysticな面にしか興味を示さない人々も多い。

直接間接に visitors から聞いた話や海外 listeners からの手紙などにも、「日本に雪は降るか」「日本に電話やエレベーターはあるか」といったわれわれの努力を無にするような absurd questions が見受けられる。さきごろニュースをにぎわした飛行機乗っ取り事件の際も英國BBC放送は解説のアタマに「なにわぶし」を流したし、またある外紙は、チョンマゲだかカツラだかをかぶってキモノを着たサムライが刀をふりかざしておどしているcaricatureをのせた。

ことほど左様に日本が veiled country だとすると、われわれの仕事はまさに前途渺茫たるものがあるが、さて英語という外国語の制約のもとにどこまで日本の姿を overseas listeners にわかってもらえるか。Seeing is believing というが Listening is believing は果たして可能

だろうか。

われわれの英語番組には news もあれば information programs も music programs も interviews もある。このうち、news に外電を用いたり、外国人に番組に登場してもらうほかはほとんどが日本語記事からの翻訳ないし英文化である。したがって英語に強いだけでなく、日本の社会情勢、文化万般に通じていなければならず、この意味で native speakers of English よりも all-roundな知識をもった日本人の方が適役である。

放送の仕事も時間に追われること新聞社と変わりはないが、every hour on the hour にニュースが出ることを考えるとさらに time-pressed といえよう。短時間にものを書きまとめるとなると、いきおいときに思いがけぬエラー (bloopers or boners) もでてくる。Live broadcasting の多い domestic radio & TV services には当然 bloopers の類がよくあるようで、現にアメリカではこの種のものをかり集めて “Radio & TV Bloopers” と称する書物さえ出版されている。その中の一例をお目にかけるとこういう調子である。あるクイズ番組で quiz-master が Taj Mahal を出題、回答者が分からずに give up したところ、“I'm sorry, but you should know that Taj Mahal, located in India, is the biggest erection a man has ever had for a woman.” と言った由、たまたまこの番組を見ていた人々は、最近のはやりことばでいう “Tamegoro taken aback” を実感したことだろう。

日本語ニュースにも原稿の読みまちがいなどで、ときに glaring mistakes がある。「オモユ(重湯)」を飲ませたというところを「ジュウユ」を飲ませたり、すもうの「ナカビ(中日)」を野球ととりちがえたのか「チュウニチ」とやったり、いろいろの例があるらしい。

国際放送英語番組は recorded programs が多い関係で boners は少ないが、下読み、校正の段階で目にとまった傑作を私を含め同僚諸氏の恥をしのんで二、三ご披露しよう。

かつて科学関係のニュースで、魚のカツオに雌雄同体の珍種が発見された、という記事があった。これを翻訳したある writer 氏、ことあろうに bisexual tuna とすべきところを homosexual tuna として、われわれに

笑いの種を提供してくれた。またさきごろソビエトが日本近海での爆撃訓練の計画をとりやめたというニュースで～dropped the bombing practice という文句が出てきたことがある。たしかに drop を cancel や call off のいみで用いることはあるが、目でよむ場合はともかく、音声に頼る放送では、事情がちがう。dropped the bomb と聞きちがえて、ギョッとする listeners もあるだろう。

人名、地名など固有名詞の発音もやっかいなものだ。日本人の名前、日本の地名などはとくにはっきりと読まぬと外国人には分かってもらえないし、また逆に外国人の名前を正確に発音することも大切である。俗に「ギョエテとはおれのことかとゲーテ言い」とか「チョビンとはおれのことかとショパン言い」などというが、かって「ケイマスを知っているか」とある外人に言われ、よく問いただしてみたらフランスの作家 Camus (カミュ) のことであった。イギリスの人名 Marjoribanks をマージョリバンクスと読んだり、Beauchamp をボーシャンと発音したりする例はあとをたたない。Birmingham な

どは英米で発音が異なるので前後関係をよくみてきめねばならぬ。自明と思われる発音も、固有名詞については、疑ってかかる態度が必要である。

ことばによっては、発音上好ましくない感じを与えるものもある。アジア太平洋閣僚会議 Asian & Pacific Council は略して ASPAC とよく用いるが、まことに音のひびきが悪い。菜の花といえば日本語ではきわめて romantic なひびきをもつが、これを英語で rape としてしまうと全く感じが違ってしまう。文化庁長官の今日出海氏はかってフランス滞在中、ムシュウ・コンが使えずもっぱらムシュウ・イマで通した由、これもフランス語 con の connotation が悪いためであろう。

今年は Expo をひかえ、日本を訪れる外人客も激増し、国際放送の反響も例年になく活発である。日本の姿を正しく理解してもらい国際親善に役立ちたいという念願で、われわれは日夜 Listening is believing 実現のためにはげんでいる次第である。

(NHK国際局欧米部勤務)

## 国際的な説得力のために

KUNIHIRO, Masao  
國 弘 正 雄

本稿は、筆者が過日神田ロータリークラブの国際理解強調週間に因んで行なった講演のテープをもとに、若干の補筆訂正を加えたものである。談話調を文章調に変えたほか、日米総合交渉の秘話を省き、2月下旬のワシントンにおける言語社会学の会議の模様を削除した。前者は交渉続行中の現状にかんがみ、印刷に付することが不適当と思われたからであり、後者は本誌座談会で詳細にわたって報告されているからである。ご諒承をえたい。またすでに他の個所で書いたことが反覆されている点については、講演要旨であるという点に免じ、あわせて諸先生方の御海容を仰ぎたい。

世は情報化時代といわれる。情報化社会といふことばも頻繁に聞かれるようになった。情報化社会においては、自らを情報化できるかどうかが生存のための必須の条件である。たとえいかなる賢者哲人といえども、またどれほど学の蘊蓄をきわめた碩学といえども、彼がもしその英知や知識を情報化するための手段とシステムを欠いていたとしたら、彼の言説が広く伝達され、他人の行動に影響を与えることはできぬであろう。それのみならず、彼の生存の基盤すらが大きく揺らぐことにならぬ。

国家についてもそれは同様である。しかも世は国際化時代でもある。ことに日本の場合には、そのおかれている地政学的環境や天然資源の状況などから、国際的なしくみのなかでどう対処していくかが、民族としての存立をも大きく決定するといえるであろう。古代ギリシアをみてもローマをみても、その勢力の消長や興亡は、国際的なしくみとのかかわりの成否に左右されていた。ましてや今日においては国家間の相互依存度は高まる一方である。中世のイギリス詩人ジョン・ドンの、*No man is an island unto himself.* をもじって、*No nation is an island unto itself.* といえよう。日本が島国であるというのは、ここではことばの洒落ではない。

そこで日本をとりまく国々に、彼らの理解しやすいような形で、日本の立場や考え方や政策やらを情報化し、それを効果的に伝達することは、国際的なしくみのなかで日本が生き抜いていくための不可欠な条件といえるであろう。この点を私の友人、南雲保彦は国際的な説得力の増大こそが日本にとって最大の防衛であると喝破している。まことに同感である。

沖縄返還交渉などにからんで、自主防衛論議がかまびすしい今日このごろだが、四次防とか核武装の可能性とか、防衛というと軍事力の面のみが不当に強調され、どうしたら日本の主張を、異邦人に對しより判りやすい形で説明できるかという次元での議論はあまり行なわれていない。これは困ったことである。危険なことでもある。そこで以下私は、国際的な説得力をどのようにしてつけていくべきかという立場から、問題点とおぼしきものをいくつか指摘し、そのための一つの提言を行ない、識者のご批判を仰ぎたく思う。

第一に出発点としてとりあげるべきことは、われわれが異邦人を理解しがたい以上に、彼らは日本を理解しがたいと考えているという事実である。そしてそれには十分な根拠が、われわれの側にもあれば彼らの側にもある。

彼らの側の理由としてはまず考えられるのは、われわれが彼らの国や文化を知ろうと努めてきたほどには、彼らが日本のことを知らず、意識的な努力も払ってはこなかったという事実である。コロンビア大学のドナルド・キン氏がよくいうことだが、世界各国の主要な文学作品を読みたいと思ったら、日本語を学ぶにしくはないといふ。ことごとく日本語には訳出されているからである。ことほど左様にわれわれは勤勉で、世界中のことに通じようとする。その理解がまっとうであるかどうかは別として、こんな働き者は他にはみあたらない。

いま1つには、日本がなんといっても極東の島国で、世界の主流からは離れていたという事情があるからである。世界史という檻舞台への登場が近々百年という主要国家は他にはみあたらない。しかも一口にアジアといつても、大陸国家としての中国と日本とは異なる。日本人と同じ Mysterious Orientals というレッテルを貼られてはきたが、なにか共通性をもって迫ってくるようなものが中国人にはあった。少なくともアメリカ人の対中国イメージに関する限りはそうであった。これは近く邦訳が出される予定の『アジアの映像』の著者ハロルド・アイザックスが指摘するとおりである。彼によれば、平均的アメリカ人がアジアと聞いて思いだす国は、やはり中国(とインド)であるという。中国系米人の数は30万、これは日系米人のちょうど半分でしかないが、やは

りズシンとした重味を感じさせる。それに米中関係は日米関係よりはるかに長く、朝鮮戦争以来今日までの一時期を除いては、まずは良好であった。アメリカ人にとって中国が敬愛や畏敬の対象であった時期も、決して短くはなかったのである。

次に、われわれの側の理由として考えられるのは、日本自身が自らの向う道を明確に規定しないままに、国内の建設と整備とに寧日なく、国際的にどう身を処していくべきかについて、暗中模索をつづけてこざるをえなかつたという点であろう。この事情はとくに戦後において著しく、今日なお尾をひいている。自分自身ですら明確に意識し、説明できないものが、どうして異邦人に理解されるであろうか。

またわれわれの場合には、言語的なハンディもあり、四面環海の単一民族国家として、生き、笑い、愛し、泣く、肉体と感情とをともなつたものとしてのナマの異邦人とのかかわりが、ごく最近まできわめて限られたものであった、という事情も介在した。異邦人に政治的な独立を侵されることもなく、異民族や異人種との併存からくる社会的緊張もないままに、長く国内的な平穏無事を保ちえたのである。これはすこぶる倅せな状態であった。

われわれの勤勉をもってしても、これはいかんともなしがたい制約であった。われわれと異邦人とのかかわりは主として書物を通してのものであり、具体的であるよりは抽象的に両面交通であるよりは一方通行にならざるをえなかつた。こちらの立場を明らかにしたくても、相手は冷たい紙にしかすぎず、本体は海の向うであった。しかも日本のおかれている辺境的な位置からして、どうしても憧憬のまなざしを雲烟万里のかなたに向け、遇かに異邦の華やかさを仰ぎみるという宿命を背負わされてきたのである。換言すれば、異人種異民族間の緊張の欠如という国内的なプラス条件は、いまや国際化時代の到来とともに急速に大きなマイナス条件に転化しつつあるともいえるであろう。

しかしこのようなさまざまな理由があるにもせよ、われわれの側からの伝達ないしは自己主張への努力が決して十分とはいえないことも、疑いを入れない事実である。私も過去十数年にわたり、講演、言論活動、翻訳、同時通訳などを通じ、政財学界など各方面において国際的な意思疎通の仲介を行なってきた一人であるが、この点をたえず痛感してきた。そしてこの現状を開拓することが日本にとって最大の国益であり、日本の存立と発展とを確保するもっとも確実な道であると考えられてならぬのである。

おおよそ判らないもの、判りにくいものが、他方に不安を与える、疑心暗鬼を招くものであることは、われわれ

の日常生活からしても明らかな事実である。そして国と国、民族と民族との場合についても全く同じことがいえる。それは必ずしも相手にやみくもに同調し、追随することではない。両者のどこがどのように違うかを知ることで、相互に安心感をもたらす。アメリカ人が好んで用いる表現を借りるなら、お互いの見解が disagreeすることを agree するということであろう。事実、差異がはっきりと意識されてさえいれば、いざというときには打つ手が考えられる。しかし同じなのか違うのかが、茫漠としていたのでは、対処の手だても考えられぬままに、疑惑はさらに疑惑を生んでいく。

しかも渺たる小国ならば判らなくても実害は少ない。しかし GNP で自由世界第 2 位という国は、たとえなに 1 つ対外的に行動しなかつたとしても、ただ存在すること自体が近隣に影響を与えずにはおかしい。スペインの哲学者オルテガではないが、なにも行動しないのではなく、なにもしないという行動を行なっている、というは単なる屁理窟ではない。

GNP も、世界有数の物価上昇率や多層的な経済機構——とくに流通面で著しい——、さらには 1 人当たりの所得の低さや社会資本の未整備などを考えると、ずいぶん人為的にインフレートされているので、額面どおりに受けとて、徒然に大国意識をふりまわすことは厳に警められるべきである。GNP とは Gross National Product の略ではなく、Great National Pollution だという皮肉も現に聞かれる。とはいえ、人口 1 億の高度工業国というのがやはり大国であることは否めない。世界の百数十の主権国家のなかには、ナウマンやマルタのように、人口 6 千とか、せいぜい 30 万というようなミニ国家も現に存在するからである。

しかもことをさらに面倒にしているのは、日本が一見欧米と同じ立場に立ち、今までのアメリカと同様に、経済成長とか GNP というような尺度が国是の重要な一貫をなし、国民もまた経済合理主義に狂奔し、GNP が 2 倍になれば、国民の幸福もまた 2 倍になると、素直に信じているかのようにみえる点である。（ただしこの点については、21世紀は日本の世紀と語ったと伝えられている例のハーマン・カーンを始めウォルト・ロストウ、アルヴィン・トフラー、ロベルト・ユンクなど欧米の有識者は、欧米は急速に脱工業化社会、ないしは超産業中心社会（トフラー）化しつつあり、経済によって象徴されるような量的拡大よりも、むしろ人生や生活の質（quality of life）を問題にするようになっていると述べていることが注目を惹く。現にカーンはつい先日も私に対し、日本が GNP 世界第 1 位になりうるのは、アメリカ人が GNP などに対し don't give a darn の態度を

とるようになるのに反し、日本人はその段階への移行が遅れるであろうから、と述べていたほどである。これはまことに痛烈な皮肉であり逆説であるが、カーン説を金科玉条視しているかにみえる日本の政財界人は、この皮肉に気づいているのであろうか。)

しかし21世紀の未来はいざ知らず、現在の段階において、日本が少なくとも外見においては欧米と同じ理念に立ち、一応は同じ政治経済体制をとっていることは、まぎれもない事実である。いやむしろ彼らのお家芸のゲームにおける優秀選手が、たまたまアジアに位する日本であるともいえるであろう。

にもかかわらず、なにか基本的に大事なところであまりにも異なる面が多く、当の日本人に訊ねても、日本的な論理や発想や思考形態で物をいうだけで、自分たちに納得のいく発想や表現で解説してはくれない、というのが実情であろう。これでは全くもって仕末が悪いということになる。しかもことは単に英語がうまい下手という技術的な問題だけではない。もっと基本的ななかが、どこかで食いちがっているのである。こんなことなら、むしろ始めから完全に異質な政治経済体制に拠る国の方がかえって判りがよいとは、私の親しい知日派の某アメリカ国会議員の説であった。

このように考えると、日本にとって最大の防衛という南雲説は単なるアフォリズムとばかりいえなくなってくる。大国であるが故にその動向は注目に値するし、それが理解できぬ場合には、近隣からの警戒心や猜疑もまた大きくならざるをえぬからである。まして日本はアジアという、欧米人にとってはもともと神秘的で異質な世界に位している。ここから引っ越すわけにはいかない。

この点、現在ニクソン大統領の特別輔佐官をつとめるキシンジャー教授が、最近アジアに関連して「不明確さへの戦略」ということばを用いたことが想記される。一言にしていえば、不明確なものへの対応の必要ということである。もちろん彼は大陸中国を指してこう述べたのだが、日本も非西欧の一国としてこれを対岸の火災視しつづけるわけにはいがない。いつこの同じ戦略が中国の頭をこえて日本にも向けられるか、保証の限りではないからである。現にどうも日本の考えていることは判らないという声が、現実にはもっとも親しい筈のアメリカからさえ、目を追って聞こえてくることがこの可能性を暗示している。

であるとすれば、われわれの特異な発想や考え方を、われわれの歴史的な体験を踏まえつつ、しかも彼らの発想にみあった形で理解させるように努力することは、無用な疑惑や警戒心をとき、日本を安泰ならしめる上に必要不可欠な用意であり、あわせて大国としての近隣諸国

に対する義務であるといえよう。

そこでこの状態を開拓するための具体的な方途を考えるわけであるが、はなしを私が10年近くを過し、もっともかかわりが深いアメリカに限っても、彼らとの接触は量的には必ずしも少ないととはいえたかった。各界の日本人があるいは個人であるいは団体でアメリカに杖を曳き、逆に多数のアメリカ人をひきもきらずに迎えるなど、日米間の交流は深まる一方である。各地で開かれる国際会議やゼミナールの数も増大の一途をたどり、おかげで私が関係している国際会議の通訳引受会社なども、要員不足で嬉しい悲鳴をあげている。

にもかかわらず、金山宣夫の好著『国際人の条件』によれば、「特に国際舞台で話題になるような演説を残す人はほとんど皆無に近いようです。(中略) 中国との共存の必要性を説いた三木(前)外相の第2回アスパックにおける演説以外には、東京オリンピック開催を決定づけたといわれるIOC総会における平沢和重氏の『オリンピック精神が書かれている小学校教科書』をかざしての15分間演説(中略)といったところしか出て」こないという状態が今日もなおつづいている。これは一体なぜなのであろうか。

むろん言語的な障害があることは否めない。しかしこれは有能な通訳者を起用することによってある程度までは解決がつく。現に政財界の指導者はそれぞれすぐれた言語技術者を身近かにかかえている。ただし真に有能であるためには、単に外国语の達人であるばかりか、文化全体のよき解釈者・理解者——ことばの眞の意味におけるinterpreter——であることが求められるのはいうまでもない。

説得力のなきのより本質的な原因は、私のみるところでは、ことばというものの性格や機能が、日本とアメリカ——以下主としてアメリカについて語ることにする——とでは全く異なるにもかかわらず、その点の認識が十分ではなく、あくまでも日本的な理解に基づいてことばを用い、種々の発言を行なっているからである。

日本におけることばの役割をもっとも端的に象徴するものは俳句であろう。英米詩壇のイマジスト運動に少なからぬ影響を与えたとはいえ、俳句といふのはもっとも日本的なことばの使い方である。その本質は、ことばを最小限に用い、できるだけ多くを読者の想像に委ねるという点に存在する。古池に飛びこむ1匹のかわづを描写して、そこに全世界、いな全宇宙を感じさせなければ、秀句とはいえないからである。

このことはわれわれの日常語の使い方、日本におけることばのあり方とも無縁ではない。われわれはあまりに

もミニマム・エッセンシャルズをしか口にしない。目は口ほどに物をいうし、自然に仮託して、意志を間接的にあらわすことが多い。「今夜の月はきれいだねえ」というのは、I love you. という直接表現よりも、ときとしてはより鮮烈な求愛表現でありうる。（これにはむろん世代間の相違もある。I love you. をしか使わない、もしくはそれしか通じない世代が増えていることも事実だし、そこに私は国際的な説得力増大の一つの可能性をみているのだが、ここでは触れない。）

それに反しアメリカ人は、総じてことばにもっと多くをかけ、期待している。これを裏返しにいいうなら、ことばがどれほど無力で、ミスリーディングでありうるかを悟ってはいないともいえよう。不立文字は彼らの伝統にはないのである。彼らはことばのなかに、マキシマム・エッセンシャルズを盛ることに腐心する。ことばに対する基本的な姿勢がますちがうのである。俳句の例でいいうなら、原則としてことばを俳句的には使わないし、俳句的な使い方にはとまどいを覚え、ときには疑惑をすら感ずる連中なのである。

このことは、日本が世界でも稀有なまでに同質であり、民族的にも人種的にも単一国家であるのに反し、アメリカが人種民族のルツボと呼ばれるほどの複合国家であることにも由来しよう。日本のような社会においては、すべてについて言挙げするには及ばない。向う三軒両どなり、氏姓の判った気ごころの知れた同士の間では、ことばによる解説は最小限で足りるし、ときにはなくもがなですらある。沈黙はまさに金であり、饒舌はうとましいことでしかない。ところが異質な諸分子から成立している社会では、言語表現だけが共通の分母であり、自己を主張し自らの権利を守り、ときとしては自己の物理的肉体的存在をすら保証する貴重な手段なのである。言語表現を無視もしくは軽視することは、寝首をかかれることにも通じかねない。そこで彼らは自己保全のためにも異質な要素間にミニマムな理解をつくり出すためにも、マキシマムな表現を行ない、しかもそれをいかに効果的に行なうかに心を砕く。雄弁術や、いわゆるパブリックスピーキングが、学校教育でも社会人の間でも日本よりはるかに重視されているのは、この故である。デール・カーネギーのベストセラーの書名ではないが、「いかにして友人を得、人々に影響を与えるか」が、彼らのさし迫った関心事なのである。そしてたとえば法廷や議会における弁論が、多くの一般人の興味を惹くのも、これが理由である。（この点、自由民権運動華やかなりし明治初期の日本において、逍遙学人物するところの「自由太刀余破銳鋒」（明治17年）の演説の場が、権利や自己主張にはじめて目覚めた当時の日本人に、喝采をもって迎え

られたのは興味ぶかい。むろんこれはシェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」の翻案であった。）

この差異は重要である。つまり軽くボールを投げて相手の反応を見る手段としてのことばと、生命の存続の可能性をすらかける対象としてのことばとの相違だからである。そして私は、日本の指導者の発言の多くが、あまりにも前者的であったと感じてきた1人であり、それが説得力の欠如にも通じていると考えるものである。

したがって、説得力を増すためになによりも求められるのは、まず日米間のことばの機能上の相違を、われわれの意識にのぼせることである。俳句の判らない人間だと相手を規定することである。（もっともいわゆるオエラ方のなかには、都々逸か小唄を示して、「どうせワシのはなしは日本人にも判りにくいんだから、通訳できるわけがない」などとのたまう方がある。しかしこれは、どう伝えるべきかを知らないというコンプレックスから、ご自身で拒絶反応を示しているとみては、あまりにも失礼であろうか。）

そこで心がまえができたとして、次に心すべき具体的なポイントはなんであろうか。アメリカ人と日本人の発言とを比べて、私がたえず痛感することは、彼らがどうしたら相手をびっくりさせられるかに、常に心を用いているという点である。少し大袈裟にいいうなら、鬼面人を驚かすような表現を探し求めているといつてもよい。たとえば一寸したアフター・ディナー・トオーク——これをテーブル・スピーチというのはどうも和製英語らしい——にしてからが、そこには目さきの変わった表現を用いることによって、自分を相手に印象づけるための努力の跡がうかがえる。ところが日本人の発言の場合には、紋切型であることがあまりにも多い。それに表現だけではなく、挙例までがだれの場合も全く同じで、しかも説明の手続きや論理までがきわめて類似している。友人の村松増美によれば、経済人政界人はもちろんのこと、学者、ジャーナリストでも、談が日本経済ないし自由化に及ぶと、必ずハンで押したように中小企業と農業とが引きあいに出され、しかも同じような論法が展開されるという。経済関係の通訳者としては、経験力量とともに当代一流の彼のいうことだから、これは信用してよい。私自身も多くの経済会議や会合に出席して、「戦後24年、日本経済は目覚しい発展をとげ」云々ではじまる発言の多いのに、実はいささか驚いているところである。

なぜこうなのかは一考の価値がある。そして私はやはりことばや説得——自己主張といつてもよい——にかける熱意や、その必要度の相違がその原因だと考える。内語やハラ語——盛田昭夫氏の造語である——が存在しない社会では、それこそ懸命になって相手を説かなければ

ならない。他方、ヒエラルキーに支えられ、ハラ語やハラ芸で用が足りる社会では、それほどの懸命さはむしろ青臭さや書生論の象徴であったり、ヤボとみなされたりする。それはそれでよい。私も文化人類学の学徒として文化や価値の多様性を尊重する点では人後におちぬものである。ただ一つ困ったことには、それでは相手が納得してくれないのである。相手の共感はおろか、知的理解すらえられぬからである。そしてさらに悪いことには、相手の積極的な（？）誤解をすらひきおこしかねないからである。大きなプラスがえられぬまでも、大きなマイナス点を稼ぐようでは、なんのための発言か判らなくなってしまう。

そこで思いだすのは、あるアメリカの有力経済団体が何十名かの大物財界人を日本に派遣して、日本経済に関するゼミナールが開かれたときのことである。もう2年近くも前のことだが、こちらも大会（社）長十数名という布陣で臨んだのであった。ところが日本側の発言は、同じ調子と同じ挙例と同じ論法で終始つらぬかれていた。2日間にわたりこれはほとんど変わらなかつたし、しかも繰りかえしが多かった。ちょうど自由化問題をめぐってアメリカ側の態度がようやく硬化はじめた頃であったが、それだけに結果は彼らにとってすこぶる不満足なものであった。アメリカ側の何人かが、あるいは撫然として、あるいは憤然とした面持で、「これはフィリスターだ」と私語していたのを耳にして、空怖しい思いを禁じえなかつたものである。いうまでもなくフィリスターとは、立法府における議事引き伸ばしを目的とした長広舌のことである。日本側出席者が明らかに善意であり、熱誠をこめて語っていたにもかかわらず、アメリカ側は故意の時間潰しと受けとつたのである。

この種の予期せざる不幸な誤解は、案外多いのではないかろうか。そして日本が海外とのかかわりを深めていくにつれて、むしろ増大していくのではなかろうか。しかもことはアメリカに限らない。中国や東南アジアのように、歴史的に当然な事情から、日本に対して今日なお屈折した感情を抱いている国々においては、さらにその危険は大きいといえよう。とくに日本が不用意な大国主義をふりかざして外に出ていった場合には、この種の誤解やそれにともなう反発は破局的ですらありえよう。醜い日本人という声がすでに各地で聞かれるのを、數度の東南アジアないしはインド亜大陸の訪問で身をもって知りえた私には、これが杞憂とばかりは思えない。アシアとの深いかかわりにおいて生きていかねばならぬ日本の将来を思うと、表現はどぎつくて恐縮だが、やはり国際的な意思疎通の有効なシステムをつくり上げることが、日本にとっての最大の安全保障だと、あえて断じ

たいのである。

そこではなしをアメリカに戻して、もう1つの具体的なポイントをとり上げることにする。それは相手の文化的社会的なわくぐみ (frame of reference) のなかで表現することの重要性である。しかもこれには2つの側面がある。1つには物質的現実的な側面であり、いま1つは前者とは異なり、具体的な形こそとてはいないが、アメリカ人の思考や行動を決定する上に大きな影響を与えていた、発想法、価値感というような側面である。これはマルクスのいわゆる「下部構造」と「上部構造」にほぼ匹敵するが、文化人類学者の故クローバーの用語を借りて「実体の文化」と「価値の文化」と呼ぶこともできる。

相手がアメリカ人であれば、やはり彼らなりのわくぐみを使って物をいうことが、説得力を増す上に有益である。身近なものの方がピンとくるからである。

まず実体の文化から一例をあげるなら、アメリカ人の会話表現には自動車、野球、ボクシング、競馬、カード・ゲームなどに由来するものがきわめて多い。これは、これらの事物がどれほど彼らの生活に密着したものであるかを、物語っている。つまりこれらの事物は、彼らの生活のわくぐみ（の一部）なのである。だからわれわれがなにか発言するときには、それをうまく使うことが有効である。

すでにどこかで書いたことだが一例をあげる。これは、60年の大統領選のときに民主党が打ち出した反ニクソンのスローガンである。あまり秀逸なので原文を掲げると Would you buy a used car from this man? となる。つまり「あなたはこの男から中古車を買う気になりますか」という問い合わせである。これは絶妙である。アメリカの生活の実体を実にみごとに捉えている。いうまでもなく、中古車を求めるときには、相手の信用が絶対である。いい加減な相手から買おうものなら、それこそどんなボロ車をつかまされるか知れたものではない。この事実を逆用して、相手方がいかに信用できぬ人物であるかをあてこすつたのである。（これには後日談があり、先日の反戦デーのスローガンは、自動車を戦争ということばに置きかえていた。中古の戦争を買う気があるか、というのである。二番煎じのせいか、あまりピンとはこない。やはり車であるところがミソなのであろう。）

次に野球の例をあげよう。ある会合で某有力財界人が日本の自由化のおくれを弁明して、「日本の草野球では子どもに4ストライクを認める。日本経済も同じことでいままでは4ストライクを当然と思い、アメリカも認めてくれていたが、一度手に入れた特権はなかなか捨てが

たく……」と発言した。これも実に効果的で、日本に自由化を強要すべく、手ぐすねひいてという感のあるアメリカ人にも爆笑をもって受け入れられ、その場の緊張を和らげ、問題点をみごとに要約し、少なからぬ説得力をもたらしたのであった。

これをたかがことばの上だけの、と退けることはたやすい。もとより私も、このような技術的な工夫だけで問題が片づくなどとは夢思ってはいない。しかしこの種のたくまざるユーマーと、相手のわくぐみのなかで物をいう姿勢とは、国際的な意思疎通にはぜひとも必要である。そこには少なくとも相手を説得しようという姿勢と並んで、アメリカにおけることばの機能への認識がみられる。少なくとも角力の例をひいたり、あるいは某政治家のように、副大統領当時のニクソンの前で、「日本人は米を食う。アメリカのことは米国という。だから日本とアメリカとは友人になりうる」という、追従とも冗談ともつかぬことを臆面もなく口にするよりは数等まさっている。事実、私もこの通訳には死ぬほど閑口した。それに英米的なユーマーは、ことばの駄じゃれでないことが多いので、この辺でも一工夫欲しいところである。彼ら、とくにイギリス人のユーマーは、日本の狂言の笑いに近い、泣き笑いのおかしみであって、純粋にことばの上だけの遊びは幼稚で青臭いと考えられているのである。

次に第2のわくぐみであるが、一口でいえば、思考が形をなす前の淵によどむもの、つまり批評家 R. ブラックモーが沈黙のことばと呼ぶところのものである。実はこれが一番捉えがたく、私などもせいぜい勉強しようと思っているのだが、これを捕捉するためには、1つの文化なり民族なりを巨視的かつ深層的にみていく姿勢が肝要である。したがって文化人類学とか地域研究、さらには社会心理学とか精神分析というような分野がかかわってくる。しかも『大学革命』『孤独な群衆』などの大著で日本でも高名な D. リースマン教授によれば、これらはいずれも日本では発達のおくれた分野である。アメリカという巨大な対象を立体的に捉えるためには、伝統的な社会・人文科学以外に、この種の新興行動科学の振興がはかられねばならない。一国の政治や経済もしょせんはよどみに浮ぶうたかたであり、その背後にある駆動力を理解しなければ、眞の把握はおぼつかないし、ましてやそれを踏まえての説得など不可能である。

そこで具体例を一つ。64年にときの大統領特別輔佐官の W.W. ロストウが来日し、ベトナム戦への介入を擁護して歩いていたときのこと、文化人との会合で東工大的永井道雄さんが、「ベトナム戦争は、草野球のティームがヤンキー・スタジアムに駆り出されて、ニューヨーク・ジャイアンツと試合をさせられているようなもので、

フェヤーとは思えぬ」旨の発言を行なったことがあった。これまた絶妙な比喩で、ロストウの動搖した表情からもそれは明らかであった。（永井さんはこの点でも日本に類のない国際人である。先日もある国際会議をしめくる演説を日本語でやられたが、そのまま同時通訳して異人さんをうならせる内容のものだった。）

この発言の効果は、1つには野球というわくぐみを用いた点にある。しかしさらに重要なことは、アメリカ人にとってきわめて大切なフェヤーという価値に切りこんでいる点である。個人の争いの際にまっさきに彼らの頭に浮ぶことは、当事者の目方や背の丈であり、それがフェヤーという考え方の根底に横たわっているからである。この点に関しては、かつて『言語教育と関連諸科学(3)』所載の拙稿「言語人類学」のなかで多くの例をあげて具体的に説明したので、ここでは立ち入らないが、小兵が巨大漢を倒すことに興味の中心がある角力や柔道に対し、彼ら固有のスポーツであるレスリングやボクシングが重量性をとっていることなども、あわせ想起されるのである。現にイギリスの文化人類学者 G. ゴーラーもその『アメリカ人の性格』という研究書のなかで、「アメリカ人の倫理によれば、自分より弱い人間を攻撃するのは道徳的に誤っている」と指摘している。もっとも彼はさらにことばをついで「しかし弱者が攻撃してきた場合、たとえ窮鼠がかえって猫を囁んだ場合でも、全力をつくして相手にあたることはあやまっていない」と述べている。アメリカ人からするベトナム介入擁護の心情的根拠の一つは、案外この点に求められるのかも知れない。

さて紙幅も尽きたので、ここで1つの提言を行ない、本稿をしめくくり、いい足りなかったいくつかの点についてはいずれ後日を期すこととしたい。

私の提言は、国際的な説得力の増大が、憲法9条によって戦争という手段を自然的に放棄し、平和のうちに生きることを決意した日本人にとって、緊急、しかも長い目でみた場合にはもっとも効果的な防衛であるという立場から、日本とのかかわりの深い諸国家や諸地域を対象に、より有効な意思疎通の手段を開発し、その効用を高めるための研究プロジェクトを開始する時期が到来したのではないか、というのである。いわゆる軍事力の大幅な増強が、近隣諸国がいまだに潜在的にもっている日本への警戒心や不信感、さらには敵意を顕在化し、中ソなど核保有大国との緊張の度を高めるという国際関係でのマイナスを想い、あわせて国論の分裂の激化、経済負担の増大など国内的なマイナスを考えあわせると、いまこそ私がいうような意味における安全保障を真剣に考えるべき秋が来たとはいえないであろうか。とくにノーベ

ル医学賞のセント・ジェルジ博士、平和運動家のノーマン・カズンズ氏、さらにはフィンレッター元米国空軍長官も説くように、核時代においてはいわゆる軍備による真の安全はありえぬことを思い、さらには環境汚染の激化とともに、地球自体がはたして人間の居住に適したところでありつづけられるか否かに思いをいたすと、軍備に目を向けることの空しさと愚かしさとを痛感しないわけにはいかない。現に酸素製鋼やジャンボ・ジェットなどの発達により、酸素の消費量が激増しているのに反し、海水汚染によるプランクトンの斃死や、ジャングルが切り払われることにより、自然が酸素を作りだす能力は日を追って減退しつつあると専門家は警告している。ジャンボ一機が太平洋を横断すると、実際に45トンもの酸素が失なわれるという。このように考えてくると、防衛されるべき対象はなによりも地球自体であり、一国や一民族ではない。ましてや軍備の増大が、再生産とともにわなないばかりか、環境の汚染に積極的に貢献（？）するにおいておやである。

したがって、われわれがもし「自分の国を自分で守る気概」をもつべきであるとするならば、それは平和的かつ建設的なものであるべきであり、集團殺人の道具を増強し、その手段を系統化組織化することであってはならない。そして私が述べてきたような意味における安全保障確保の道はもっとも安上りであるばかりか、国際間の理解を増進し、警戒心や不信感を減殺するという点で、平和に寄与する道とはいえないであろうか。企業の年間交際費が7百億円で、防衛費が5千7百億円にものぼることを思うと、たとえ数十億の金をそのために投じたところで費用対効果(cost-benefit ratio)を考えれば、はるかに安価な投資といえよう。

しかしそのためには、各分野の専門家の「学際的」な協力と、それをとりまとめていくためのシステムが形成されていかなければならない。アメリカを例にとるなら、アメリカ英語やアメリカ文学の専門家はむろんのこと、歴史学、政治学、経済学、社会学、人類学、心理学など、広範な分野ならびにその副分野の専門研究者が打って一丸となることが求められる。意味論やコミュニケーション理論の研究者にも入ってもらう必要がある。情報理論の専門家も欠かせない。このプロジェクトはなによりも日本の立場や考え方を情報化し、いかにこれを有效地に伝達するかをさぐるものだからである。また日本人の心情生活の奥底にある繊細この上ないヒダを明らかにするためには、日本文学や国語学、さらには広く日本研究や東洋学の専門家の協力を仰ぐことも不可欠であろう。これを要するに一つの明確な目標に向っての真に「学際的」なプロジェクト・チームの結成である。そしてそ

の目標とは、世界全体の平和と繁栄と調和し、それに背馳しないばかりでなく、積極的に寄与するような形において、日本の安全と繁栄とをどのように推進していくかということである。なお学者研究者ばかりでなく、広く政官財界、さらには商社・労組など、国際的なかかわりの第一線にある人々の参加はことに重要である。彼らこそがこの作業の重要性を日々身をもって実感し、その成果をもっとも必要としている人々だからである。

そういうまでもないことながら、このプロジェクトは単にアメリカのみならず、中国やソ連、東南アジアの諸国、欧州地域などについてもできれば同時的に行なわれ、しかも相互間に研究方法や資料知見の交換など、スムーズに進行するような体制が組まれるべきである。海外向けの出版活動なども当然考えられてよい。

実はこの考え方の概略を先日經濟同友会の木川田一隆代表幹事にお話したのである。同氏はちょうどシオス経営会議での1時間にわたる基調演説を了えられたところであった。あの演説はシオスの新会長ミテルステンシャイト氏（ドイツ）が「自分がこれまでに聞いたシオスの基調演説のなかで、もっとも感銘を受けたもの」と語っていたように、きわめて格調の高い、しかも熱のこもったものであった。そこには内語、ハラ語ではなく、正面きった説得と意思疎通への情熱、それに西欧的な論理と哲学とがあった。

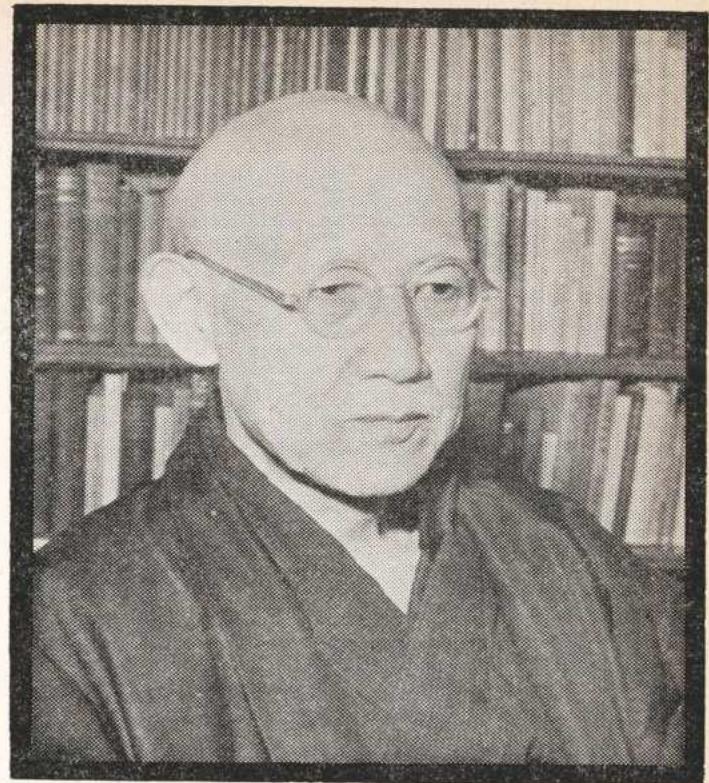
木川田氏は私の簡単な説明に耳を貸し、即座に同意を表わされた。もとより青写真すらできていない段階で、私の着想を述べたにとどまったが、国際的な説得力を増大させようという考え方を説く上に、私にも若干の説得力があったらしいと、いまささやかな満足感を味わっているところである。

（お茶の水女子大学講師）



## 特 集

### 故市河三喜先生を偲ぶ



▲市河三喜先生



▲1966年1月5日 ELEC会館図書室にて

左から前田陽一氏、市河三喜氏、Dr. C.C. Fries, Fries 夫人

# 市河三喜教授を憶う

SAITO, Takeshi  
斎藤 勇

さまざまな方面に大きな足跡を残した東京大学名誉教授市河三喜博士は、この二、三年来、健康がすぐれなかつたが、去る3月17日未明、急性肺炎のため、あわただしく世を去られた。ELEC創立当初からの理事として尽力を惜しまれなかつたことについては、特に別稿が掲げられるであろう。私はただ、この偉大な英語学者の聲咳に接する機会を逸した若い読者のために、その功績の一端を述べて、追悼の意を表することにしたい。

市河教授は1886(明治19)年2月18日、下谷、秋葉原附近に生れた。その先祖に漢学者蘭台、寛齋、米庵、万庵があり、ことに祖父米庵は書家として有名である。三喜博士が楷書や行書の筆蹟がすぐれているのは、まさにお家芸である。早熟なこの天才は、日比谷にあった府立一中生である14歳の時から昆虫について度々雑誌に寄稿した。博物学に対する関心が、1909年東京帝国大学の言語学科を卒業ののちも続いていたことは、Huxleyの*Lecture on Evolution*を訳して、1910年單行本としたことを見ても明らかである。つまり専攻がentomology(昆虫学)から etymology(語原学)へと変ったのである。

卒業論文 *A Monograph on the Historical Development of the Functions of 'For'*は、精細を極めた一大研究である。この見事な書体で立派に書いた約260 pp. のmanuscriptには、ほとんど全く一字の修正もない。それが幸い秘蔵されているので、facsimileとして公刊されるならば、故人の性格をしのぶよがなるのみならず、学会に対する稀有な貢献となるだろう。

ただ惜しいことは学位請求論文 *On the Language of Robert Browning's Poetry*は、市河氏所蔵多数の珍蔵とともに、1923年大震災のため東大図書館や文科の建物と共に焼失してしまったので、誰もそれを見ることができなくなつた。せめて出版されていたならばと思う。Professor John Lawrence—あのすぐれた English philologist が *Oxford English Dictionary*のForの項(それは3ページ以上を占めている)、そのIII.8の余白に、いつもの丁寧な、綺麗な字で、“Perhaps the NED understood the phrase with Grein, Hall, etc., to mean ‘for a support’, ‘for help’. But Schücking and Holthausen take it as ‘aus Gnade’, ‘aus Huld’ which seems to be the true meaning”. S. Ichikawa (Letter to J. L. 17 Apr. 1909)と書き記してあるのを見れば、市河氏の研

究がいかに精密であるか、推察ができる。(ここに“the phrase”とあるのは、‘Beowulf 458(Gr.) Pu... for arsta-fum usic sohtest’を指す。またこの手紙は卒業論文清書中の日附らしい。当時は4月末日が〆切であった。)

市河氏は1912年文部省留学生として、英國その他で諸大家に接したが、出発直前出版の「英文法研究」(*Studies in English Grammar*)が、英語の歴史的および心理学的研究による邦人最初の著述として、わが国における英語学史上に画期的なものであることは、英語学界にあまり知られている。

1916年、30歳で東京帝国大学助教授、4年後には教授、30年間に在職、1946年定年退職、名誉教授。その間に多数の優秀な英語学者を卒業生として世におくり、また英文学専攻卒業生の就職にも斡旋されたこと、改めていうまでもない。1928年規定 Shakespeare Medal に関する尽力もあって Royal Society of Literature の Honorary Fellow に挙げられ、1939年には帝国学士院会員となられた。

著書は前記「英文法研究」のほか、「ラテン・ギリシャ語初步」(1930)、「古代中世英語初步」(1935)、「英語学、研究と文献」(1936)、「聖書の英語」(1937) および *Collected Writings of Sanki Ichikawa* (1966) などが語学を主題とする出版物であり、いずれも英語学者が座右に備えているものであろう。

しかし市河氏は随筆家としても第一流に伍する。そのことは「昆虫、言葉、国民性」(1939) や「旅、人、言葉」(1957)などを読めば、すぐなるほどとうなづかれるであろう。言葉の研究にきびしい一生をかけたこの大家は、巧みに言葉をつなぎ合わせ、或いは造り出して、人を楽しませたり、それとはなしに教えたりする方法として、機知に富むしゃれを飛ばすこともあった。ノビリティとノンビリティ、コンモンセンスとセンモンセンス、あるいはarcheologistと言った調子である。

市河教授のもう一つの偉大な業績は「研究社英文学叢書」初期百冊の編纂である。岡倉由三郎教授との共編であるが、両氏とも註解者の原稿による校正刷を実に克明に検討して厳密な改訂や補筆の結果、世界にも珍らしい註釈版を出したことは、日本の英語および英文学の研究者にどれほど大きな恩恵を与えたか知れない。

かように大きな学問上の遺産のみならず、日本英文学会を創立して初代会長であること6年間も重任を果されたこと、それ以上長く語学教育研究所長や理事長としてつくされたこと、その他、十指にあまるほどの学会、協会などの委員など、その関係範囲ははなはだ広い。

今やこの人なし。英語学界の巨星落つの感なきを得ない。

(東京大学名誉教授・ELEC理事)

ELEC BULLETIN

# 市河先生御夫妻を迎う

—1931年ロンドン—

FUKUHARA, Rintaro  
福原麟太郎

私がイギリスにいたのは1929—31の二年間であった。その間に市河先生がカーン資金で、晴子夫人とと一緒にヨーロッパへ旅行して来られた。それはもう私の留学期の終りで、大体同時代にロンドンにいた中島文雄氏はもうすでにアメリカへ向けて英国を去っていたころであったろうか。私は市河先生夫妻が、いつロンドンへ来られるか、どこに宿をおとりになるのか、全く不明であったので、領事館など方々聞いてまわっている。アザカミ(阿坐上)という日本商店でわかったらしい。アザカミからそう遠くなかったと思うが、ドミニヨンという映画館ではチャーリー・チャップリンの「街の灯」(*City-Lights*)を上映していた。

そのころちょうど His Majesty's という劇場では、John Gielgud その他が Priestley の *Good Companions* を脚色して上演していた。「面白かった」と私は日記に書いている。たぶんマチネを見たのであろう。芝居を出て、雨の中を Imperial Hotel というこれはたしか British Museum の近く Russell Square にあったと思うが、そのホテルへ市河先生をお訪ねしている。市河先生は William Empson という秀才を I. A. Richards が推薦しているが、その青年を文理大(私の勤めていた大学)へ取らないかという、意外な相談をして下さった。そのころ東大では教授の定員が満ちて居り、新しい教授を入れることができなかつたので、文理大の正員教授にして東大を兼任させるという方式によつたのである。1931年5月23日(土)であった。

そして、同じ月の27日(水)午後3時、同じ Imperial Hotel で、市河先生と私と二人で Empson に会つた。その時私は偶然、たしか日本 Shakespeare 協会誌の第何号だか(調べればわかるのだが生憎 backnumber は全部その後小津君にあげたので手許にない)を持っていて、その中に Shakespeare の text を何行か phonetic symbols で書き替えた頁があった。そこを開いて、たぶん私が、日本ではこんなのが流行るんだから覚悟していくなくちゃと言つたら、Empson はそれをしばらく眺めていて、「ああ大てい解るね」というような返事をし、東京へ来ることが簡単にきまつたのであった。その日私は夕方(といつても五月だからまっぽるま)、Royal Society of Literature で Walter de la Mare の William Collins について

ての講演を聞き、夜は Queen's Hall で Malcolm Sargent 指揮の音楽会へ行つてゐる。

そのあくる日5月28日(木)には「Royalty Theatre で Tiger-Cat を見る、Edith Evans の見納め」と日記に書いてゐるが、時間を考えるとこれは映画かも知れない。Tottenham Court Road までくると肩を叩く人がある。市河夫人である。先生もにこにこしておられた。その時私は天気がよいのにレインコートを羽織っていたので、帰国後もいつも、福原さんのレインコートといつて晴子夫人にからかわれた。

そのとき市河先生御夫婦は、近所の Soho, Frith Street にあった C. K. Ogden の研究所 Orthological Institute を訪ねて行かれるところであった。一しょに行かないかと誘はれ遠慮なくついていって、地階から四階まであった各室をまはって Ogden の説明を聞いた。そして研究室主任みたいな Miss Lockhart から International words の寄附を求められ、私は出しゃばって「ビフテキ」と「サーカス」という二語を提供した。

あと近くの上海樓でごちそうになり、Imperial Hotel へ御夫婦をお送りする途中で斎藤静氏に出くわした。

30日には藤原茂先生(これは私の福山中学での英語の先生で、当時旅順工科学堂教授として留学中であった。後、学習院教授となられた。)と一しょに出かけ Hampstead Tube-Station で市河先生御夫婦および森野氏とあひ、近くの Keats House へ行き Parliament Hill を越して High Gate Cemetery を訪ねた、というから、ここで George Eliot とか Herbert Spencer とか Karl Marx の墓とかを見たに相違ない。それから、Wallace Collection へ行って別れて帰ると書いている。この美術館はまたハイド・パークの方角だから、とんだ廻道をしたわけだが、当時はみんな若いから平氣であったのであろう。市河先生44歳くらい、私は8つ歳下であった。

それから3日の後のこと、6月2日に British Museum の本館入口へ立つてたら、正門前を通つていられた市河夫人が、私を見つけられ手招ぎをして下さつたので、門まで出ていった。そして、近所の Harold Monro の Poetry Bookshop や Walters の印刷工房(私のグレイ版本を刷つたところ)や Ingpen の古書店などを一しょに訪ねた。その翌る日には上海樓で先生御夫婦の歓迎会をした。小林象三、藤原茂、森野、山西、伊丹、斎藤静諸氏に私も加わつた。そしてその翌る4日、朝9時先生御夫婦を Victoria Station でお見送りしたのであつた。往時茫茫々。

(東京教育大学名誉教授)

## 市河先生の想い出

ISHIZAKA, Taizo  
石坂泰三

明治32年に私は築地にあった府立一中へ入学したときに、市河さんは私より1年上にいたんです。だから多分明治31年に築地の、当時尋中といっておったが、その尋中へ入学されたんだと思いますが、そういう関係で中学時代からよく知ってまして、なかなか市河さんという人は頭のいい秀才でしたけれども、くそ勉強するような人じゃなかったようですね。そのために自分の好きなことはよくやるし、まあきらいなことはあまりやらないといったようなふうでしたが、しかしあやはりよくできた方でしたね。ことに中学時代、彼が非常に有名だったのは昆虫の収集で、チョウチョだのセミだの、そういう昆虫は非常に集めたと思います。多分それを卒業するときに学校へ寄付してきたんじゃないかと思いますが、いまあるんだかないんだか私は存じませんけれども、とにかく非常な昆虫の収集家でした。

したがって、私は彼が理科博物の方面へ行くかと思っていたら大学では言語学の方へ進んで行きました、ご承知のとおり卒業後は大学へ残って教授になられたくらいの方だから、非常によくできた人ではあったんですね。非常に温厚な方でありましたが、私はご懇意に願つておった関係上、大学生時代に一緒に旅行したことがあります。

明治の43年くらいだったと思うが、友人数人といまの北アルプスへ行ったことがある。いま考えるとちょっと無謀の旅行であったかもしれないが、市河君は若いからでもあったけれどもなかなか元気でしてね。東京から岐阜まで汽車に乗つていって、岐阜からいまは汽車が通っているけれども、その当時は汽車はなかったので、何とかいう川に沿つて、飛驒の高山へ行きました。飛驒の高山から東の方へ折れていきますと、ちょうど乗鞍岳の麓に出るんです。平湯というところに、それから乗鞍をのぼつて安房峠というのがありまして、安房峠を越して焼山というのがあるんです。活火山みたいに煙がぼこぼこ方々から出ておりまして、それからいまの上高地に出たことがあります。その当時の上高地はいまとは丸で違っていた。いまは大正池なんて池があるが、あれは大正時代にできただからその前の明治のころはなかった。それから穗高の麓を通つて槍ヶ岳へのぼりまして帰つてきて、今度は徳本峠を越えて島々という小さな町を通つて松本へ出て、それから方々へ別かれていったことがあります。

る、非常に思い出の種でしてね。ちょうどひと月くらいの旅行でしたが、汽車賃から泊まり賃から全部入れて30円くらいだった。そんな時代と一緒に旅行しました。

市河家というのは有名な書家ですね。市河さんは米庵さんのお孫さんでしょう。したがつて市河さん自身もなかなか書は上手でした。清庵と号してました。そういう方が有名な英学者になったということは、ほんとうに珍しいということもないけれども、りっぱな方でした。その後いろんなことで道は分かれてましたけれども、やはり津田英学塾の理事をしておられ、私も津田に関係がありましたので、津田の理事会のときにはちょいちょいお目にかかりました。ただ、先生は穂積陳重先生のお嬢さんと結婚されたんだが、早く亡くなられまして、その後再婚されたが、その方も最近(昭和30年)亡くなられたですね。その点は不幸でした。

先生が大学を卒業するときの卒業論文は Preposition の“for”という字だけの論文を書いたと聞いているね。“Historical Development of the Functions of ‘for’”という題で、しかもそれを彼が Old English で書いたという話を聞いたが、その時分 Old English なんてのを知ってる人は少ない。だからほんとうの英学者であって、べらべら会話がうまかったとか何とかいうんじゃないらしい。まあ中学時代から有名でした、英語は。

しかし非常に温厚な篤学者でありまして、まことに惜しい方を亡くしたと思います。 (速記: 林節子)

(日本万博協会長・ELEC 評議員)

## A MONOGRAPH ON THE HISTORICAL DEVELOPMENT OF THE FUNCTIONS OF “FOR”.

BY  
SANKI ICHIKAWA.

Little flower—but 'tis I could understand  
What you are, root and all, and all in all  
I should know what God and man is.  
TENNYSON.

TOKYO  
1909

(実物 20.3 × 26.8 cm)

ELEC BULLETIN

# 市河三喜先生を偲ぶ

ISHIBASHI, Kotaro  
石橋 幸太郎

市河先生のお名前を初めてお聞きしたのは、先生が岡倉先生と英文学叢書の刊行を企てておられた大正10年ごろのことと思うが、岡倉先生が教室で何かの話ついでに、つぎのような話をされた時である。その話というものは、府立一中の1人の生徒がリーダーの3巻まですっかり丸暗記していて受持の先生を驚歎させたというが、それが誰であろう、今の市河三喜博士であったというのである。この話はどうも英雄伝説の一種であるらしく、どこにもその確証となるような記述は発見できないようである。「(中学)三年までは普通にやったが一二年の時兄からドイツ語を少し教はったが、ちき止めてしまった—博物学、殊に昆虫採集を始めるようになり、原書を読む必要から英語に力を注ぐようになった。他の学科を顧みないで英語に専心したのでぐんぐん力がついた。」(『昆虫・言葉・国民性』)「兄貴は子供の時分から英語が無暗に好きでした。私共の生家は下谷の練塀小路ですが、近くに槐陰学館といふ英語の塾があり、兄貴は根が几帳面の性質ですから時間になれば、いくら大雷雨に会はうと又病気で少し位熱があらうと御構いなしに通ってゐました。」(『三禄飄談』)(以上『市河博士還暦祝賀論文集』第6輯)など、先生が幼いころからいかに英語がお好きであり、またいかにおできになったかを示すような記述は、いかに博物学に造詣が深かったかを示す言葉と同様に、いたるところに発見できる。岡倉先生のお話は、そういう天才少年に対する世人の驚異が作り出した神話であろうか。

も一つ、これも学生時代の又聞きであるが、土居先生が「市河君は新しい外国語を学ぶときには、その国語の聖書を求めてきて、その十ページばかりを英語なりフランス語の聖書と丹念に引き合わせて読んでその言語の特質を呑みこむ。あとは辞書と文法書がありさえすればよいと言っている」という意味のことを話された。この話も英語一つをもて余ましていたわれわれ学生を驚倒せんにたるものであった。このほうは、しかし前の話と違って実話にちがいない。

東大教授時代の先生が峻烈無比の厳しい drill master であられたことは、部外者のわれわれにも伝わっていた。この点では、先生はわたくしどもの恩師岡倉先生と東西の両横綱といつていいかもしれない。

しかし、わたくしが先生にお近づきになったころ、それはわたくしが戦後、語学教育研究所に關係をもつよう

になってからのことであるが、そのころの先生は、温容そのもので、昔の厳しさなどとうてい想像することさえもできなかった。どんなことがあっても先生は決して声を荒らげられることはなかった。われわれの到らぬところに気づかれても、決して咎めだてするというふうではなく、もの静かにそれとなく注意されたものである。

晩年の先生は、つとめて精神の動搖を避けていられたように見受けられた。それは、しかし、そと眼にそう見えただけで、先生ご自身では、ごく自然の状態であったのかもしれない。とすれば「つとめて」ということばは当らないことになる。とにかく、お若い頃の峻厳といわれた先生のことを存じあげないわたくしには、まったく反対の2つの先生の像が、どうしても心の中で結びつかないので、勝手な想像をめぐらしているわけである。

それはとにかくとして、先生が日頃から大いに健康に留意されていたことは、先生に接する者なら誰しも感じたことであろう。たとえば、毎日、午前と午後に附近を散歩するのを日課とされていたこと、食事以外には、たとえ茶菓一つでも召し上がるがれなかつたこと、などその一例である。また、いつか地下鉄の淡路町の停留所を出たところで、ぱったりお会いしたことがある。先生は乗り場へ下りてゆかれるところで、わたくしは地下鉄から降りて街に出るところであった。どちらへおでかけですかと尋ねたら、つい、この先に懇意な医者がいて、毎週一回、注射に通っている、とのことであった。健康に注意されこと万事この調子であった。

先生はかつて「寿は八十で死んだ米庵に、学はイエスペルセンに、憂國の思念は(高野)長英にあやかりたい」(『小山林堂隨筆』)と書かれている。寿は米庵にまさること4年であり、学も著書の量こそ及ばないが、その質と歴史的意義の点から考えれば、イエスペルセンに比較することも、あながち不当とはいえないであろう。憂國の思念ということは、外形からは覗い知りがたいことであるけれども、語学教育をつねに国家の発展という視点から見ておられた点を考え合わせると、やはり先生も明治の精神を内に蔵していられたかただということがわかる。

(大妻女子大学教授・ELEC理事)



# 市河先生を偲ぶ

NAKAJIMA, Fumio  
中島文雄

3月17日の朝、土居光知先生からの電話で市河先生の急逝を知り驚いた。その2ヶ月前の1月18日に、成城大学でちょっとした集会があり、その帰りに百瀬甫氏と井上ヒデ氏と一緒に、市河先生のお宅を訪ねたが、先生は相変わらず庭いじりをされており、毎日2回の散歩も欠かされないとのこと、昨年のお怪我も直り、そんなに弱っておられるとはお見受けしなかった。それが急の肺炎で大蔵病院に入院され、すぐその翌日未明に永眠された。84歳とはいえ、まことに人生はかなしの感にたえない。

市河先生のことについては、すでにいろいろ書かれており、私も先生の80歳祝賀の記念として発行された英文集 *Collected Writings of Sanki Ichikawa* (昭41、開拓社) の Preface を、祝賀委員会の一人としてその草稿を書いたので、そこに述べられているような、先生の略歴や業績をここに繰返す必要はないと思う。また「市河博士還暦祝賀論文集」第6輯 (昭29、研究社) の 111—159 頁には、先生の略伝と著作年表があることを付記しておく。

本誌の市河先生を偲ぶという特輯に、何か書かなければと思っていたところへ、思いがけなく亀井高孝（たかよし）先生から、次に掲げる「友交 70 年の中から」の御寄稿をいただいた。亀井先生は市河先生と同年で、明治31年東京府尋常中学校（府立一中の前身）に入学以来、第一高等学校、東京帝国大学文科大学（文学部の前身）を通じて、市河先生と同期生であった。大学では西洋史を専攻され、長いこと一高の教授をされ、その方面では令名の高い学者である。晩年の著述としては「大黒屋光太夫」、「光太夫の悲恋」があり、学界の注目をあげて人々の話題にのぼったことは、読者のなかにも御存知の方が多いと思う。先生は数年前数え年80歳のときに、光太夫の足跡をたずねてソ聯を旅行された。市河先生は明治19年(1886)2月18日生まれ、亀井先生は同年6月8日のお生れであるから、わずか4ヶ月お若いだけであるが御健勝である。昨年、時事通信社から「葦蘆葉の屑籠」という文集を出版された。いかにも歴史家らしい筆で、幼少のころから、学生時代、教員時代のことが叙述され、特に一高のこと詳しい。その他、師友の思出や折にふれての随想が収められており、先生を知る者や一中・一高・東大文学部と学んだ者にとって興味津々たるものがある。ここに寄せられた市河先生の思い出は、そ

の補遺をなすものといってよい。

亀井先生の文章にあるように、市河先生は中学時代から動植物の採集に熱意をもち、高山高原を跋渉することを好まれた。先生の山登りは有名であり、植物や昆虫に関する知識が専門家の域に達していたことは人の知る通りである。博物学の原書を読むため英語を勉強され、そのため近眼になってしまい、専門を英語学に変更されたとある。市河先生の学風には英語の採集というところがあるが、これは偶然のことではない。中学時代から英語がすば抜けてよく出来たということは、私が高校生のころには伝説になっていた。先生は中学3年のときに National Reader の 5 まで暗誦してしまったとか、C.O.D. をかたっぱしから読んではたべ読んではたべて、全部腹中に収めてしまったとか。あまり英語に熱中して、他の学科で落第点をとり「赤及」になったとあるが、これについては「葦蘆葉の屑籠」にも言及があるので引用しておく(56—57頁)。

『私は二年と三年の二回その目にあった。市河三喜君も何の学科だったか知らないがその例に洩れない一人であった。二級下の同資格者の故辰野隆君は、後日その事を知って、「市河君を見直した」といふ笑話さへある。』

亀井先生が、ギリシアのデルフォイの考古館をおとづれ、訪問者名簿を開いたところ「私の記憶に誤りがないなら第一ページの最初の署名者は浜田耕作、市河三喜であったのを見てハッと思った。」とあるが、この記憶には誤りはない。昭和5年の初夏、私は同じところをおとづれ、その名簿を見た。そして最初のお二人の名がギリシア文字で書かれていたことを記憶している。

市河先生の人柄についても亀井先生の筆はたしかなものである。学生が先生を訪問しても30分もたないということは、学生のあいだで話し合ったものである。私は英文科入学後間もなく市河先生の牛込山伏町のお宅に伺ったことがあるが、あえてそういうことをしたのは亀井先生の紹介状があったからである。そうでなければ、こわくて行けなかったと思う。

実は亀井先生には中学のとき、短期間お習いしたことがある。それは大正8年、私が府立一中の3年になったとき、東洋史の東恩納寛惇先生の着任がおくれ、その穴埋めに西洋史の亀井先生が、二、三ヶ月東洋史を教えられ、その後すぐに水戸高等学校に転出された。そのとき英語は細江逸記先生であり、前年の日本史は長沼賢海先生であったから、中学とはいえ、大学教授級の先生に教えられていたわけである。今、市河先生との70年の交友の思い出を拝見して、自分も50年の記憶をたどってしまった。諒とせられたい。(津田塾大学教授・ELEC 理事)

## 友交70年の中から

KAMEI, Takayoshi  
亀井高孝

風邪気味なので電気炬燵にしがみつきながら正午のテレビを見ていたら、突然画面に市河三喜君の像と今晩の計報とが伝へられたのでひどい衝撃を受けた。市河君とは親友だったとはいはれない。はじめ動物学者を志したかれは中学——まだ府立一中と呼ばず尋中といった時代の最終の年——に入るとともに早くも帰山先生の指導の下に動植物の世界に分け入った。同学の友人には先輩に武田久吉、内田清之助、同級生には小熊捍といふやうな終生その道をきはめてそれぞれ第一人者となった友人がゐた。日英同盟もまだ結ばれなかつた遠い昔のことである。赤十字社の杜は蝶の宝庫であり、それらの人々は心ゆくまま採集につとめるとともに分類し、すんで研究した。やがて高原高山を跋渉して蝶をはじめさまざまの昆虫を探集した。それは多分明治33年にはじまると察するが、まだ日本山岳会の結成されない前のこと、市河君はいはばこの山岳会の生みの親といへよう。ところで研究心に燃えた彼は原書——英語の動物学の大冊——に挑んだ。しかし、急に英書をマスターできるものではない。翌年の夏はひたぶる英語に取組んだ。秋の第二学期になつたら彼の語学力は担任の英語の先生をたじたじとさせるほど、つまり中学生の水準をはるか立越えた実力を具へてしまつた。しかし、この英書貪読はかれの目を近眼にした。昆虫学者は絶えず顕微鏡と首引きしなければならない。そのことが心ならずも専門を転向せねばならなくなつた。かれの曾祖父は儒学者漢詩人として第一流の寛斎先生であったし、祖父は書家の最高峰米庵先生であつて、自然学者ならずとも人文科学者として当然首峰に立つべき素質を具へてゐる。かうしてかれは理科系から文科系へと転向した。以上は70年以前の彼の素描である。

縁返しになるかと思うが、市河、小熊両君その他と一緒に尋中に入ったのは明治31年である。市河は三兼萬庵先生の次男に生れ、長男でも末っ子でもないので、むしろ粗略にあつかはれたのではないだらうか。それだけに気性ははげしかつた。中学の成績は勉強すれば忽ちクラスのトップに立つかと思うと次の学期には中位に下る。先生にも恭順ではないしいたずら子であった。五年のころは英語だけは受持の教師をあわや凌ぐほどであったが、個性が強く、嫌いなまたはいやな学科はスッポかしたと見え卒業の時は、当時の一中の成績では形式的には

一応赤及といはれるおなき及第の組に入り、席順ではむろん中位以下であったが、恐らく赤及組の最上位であったらう。その年の入試に好成績で一高に入学した。入学後直ちに彼の英語は畔柳都太郎先生の舌をまかせ、二タ組に分れた英語文科の第二組の第一学期には一躍首席となつた。かれはそれで満ち足りたのであらう。それ以後はトップ争いなどはせず己が道を歩いた。私の彼に対する畏敬に似た接触はそれ以後である。かれの家は下谷練塀町にあった。四方竹を内庭に植えた文人墨客の趣を具へた父祖以来の家で、一高には歩いてもすぐ通はれる距離であるが勿論寮生活をした。

書家の伝統として彼の言によれば清白の半紙一帖(20枚)に毎日必ず清書させられた。春秋二季の千字書きにはダダをこねながらも朝から夕方まで謹厳な楷書をしたためた。半折に謹嚴な書を認めた時には清庵三喜と後書をしている。これは幼少からの慣習であらう。中学時代流儀のちがふ岩佐先生から必ず1等(90点—100点)の評点を与へられたことでも、一廉の書家としての伝統を具へていたことを示している。

彼は寡黙で敢て友を求めようとしないが、江戸下町で百年余の生活を身につけていただけに、無口の間に時折り江戸っ兒ならではのしゃれが逆り出る。桑木敬翼教授が課外にカントのプロレゴメナを講読した。教室ははじめ一杯であった。その時市河は何食はぬ顔で「イマニヘルカント」とうそぶいた。全く図星をついた形で内容がむつかしいのでドンドン聴講者が減ってしまった(私も脱落者だったかもしれない)。同室のたれかれとともに荒川べりの浮間ヶ原に散歩に出掛けた時にはわれわれに赤蛙をとらせて自分は蛇杖をつくるといつて山かがしか青大将か知らぬが2、3種の蛇6匹ほど捕えて、その中から気に入ったのを選んで蛇屋に命じてみごと蛇杖を造って得意になっていた。根気のよさもその身についていた。同室で机をならべた高橋穰の一丈以上もある長い紐を小口から堅く結んでしまつた。結んだ方よりもそれを解きほごす高橋の方が二倍ほどの時間を要したであらう。かうした寮生活的一面、彼は内村鑑三さんの著書を邦文と英文とを問はずすべて読みあさっていた。彼の精神生活的一面を窺き見させている。

大学で言語学科に入ったが外人教師ロレンスにふかく認められた。卒業の論題は「前置詞 for の研究」で御賜の銀時計を下賜された。かれと同期生は後日京都大学文学部で古典語(ギリシア、ラテン語)の教授となつた田中秀央であった。2人は大学の初年度直ちにエック教師からラテン語を手ほどきされた。弥次性のある私は長続きしないのを承知の上仲間入りしたが、エック先生はフランス人なのでメンサ、メンセと発音すべきをマンサ、マ

ンセという風に発音された。小柄な人だったがビシビシ鍛えてくれた。正しければトレビヤンまたはビヤン、間違ったらメノン、メノンと容赦がなかったことを今でも忘れない。3、4人の学生と教授とが隔離なく応対のできた時代であった。序に市河、田中の交友関係に及ぶが、田中は古典語を専攻したのでケーベル先生に親炙した。宇和島出身で三高を経て東大に来た彼は、生れついた素質からでもあらうが純真無垢な男ですぐ市河と親しくなるとともにふかくケーベル先生に愛された。2人は相並んで大学院学生となつたが、やがて市河は大学から学費を支給されることになった。市河は生活に困らないので辞退してその権利を快く田中に譲った。田中にはその前ケーベル先生からも若干の支給が一時あったらしい。生活様式や思考を数十年守りつづけているこの好漢は後日ケーベル先生の片身の品を京都北白川の自邸に宝物のやうに大切にしてゐた。かうして日本の英語学は市河によつて築き上げられ、ギリシア、ラテンの古典語は田中によつてまず京大で日本人として最初の道を開いた。

本道に戻るが、言語学出身の市河はその抜群の英語学の実力を買はれて英文学の助教授となり、大正の初年文部省留学生として渡英した。私はかれより13、4年遅れて渡欧したが、ギリシアのデルフォイの考古館を見学した。その玄関口の訪問者署名簿に署名するため最初のページをまず開いたが、私の記憶に誤りがないなら、第1ページの最初の署名者は浜田耕作、市河三喜であったのを見てハッと思った。第1次世界大戦開始の1、2年前ころでバルカンの形勢が逼迫していたかもしれないが、それよりも20世紀に入って10年たつたころにかかはらずギリシアでもアポロ神託で名の轟いてゐるこの聖地にまで足を伸ばす人が少かったことは、それから10年あまり後の訪問者たる、私も同じ名簿に署名したことでもわかる。浜田、市河両君のギリシアの旅は浜田の著「ギリシア紀行」にも出てゐる筈だが、この「ギリシア紀行」の内容を想出してみても、観光といふことが第2大戦後の今日と霄壤の差があることと思ふ。中学生時代から旅行家であり山登りの好きな市河は、イギリスでもその最高のベンネビス山を登ったといふ。尤も英國には高山なくこの山にしても千メートルに達しないだらうが、ともかくも彼はかうしてあまり人の行かぬ所を歩いたあと、莫大な英書をもたらし帰った。

しかし市河の置かれた地位はかれ自身の性格にもよるけれども、はじめの10数年は峻しかった。英文学教室はその先輩も後から来る者も、もちろん大半は英文学志望者であり文学者肌が多い。元来自然科学者の素質を多分にもち、その上科学的の言語学科出身の市河に対して英文学本来の先輩以下はかれに冷たい。彼も元来無口であつ

て人に下らうとしないし、後進に対して温情をあまり示さなかつたかも知れない。後輩や学生が私宅を訪ねても、対座したまま30分も口をきかないので取りつく瀬がなく空しく引取つたといふ話もあり、陰陥であるとの風評すら私の耳に入った。彼自身の傲岸さや、取巻く周囲の冷たさが彼をある時期の間自分の貝の殻に閉じ込めたことはわからないではないが、12、3歳のころから彼を知る私は彼が文字通りの江戸っ子であり、洒脱さをもつてゐるのを知つてゐるだけに、彼が孤立し嫌はれている謎が解せなかつた。安倍能成や辰野隆も彼とは異質であったが、野上豊一郎だけはかれの真価を認めていた。それらの環境の間にあって彼は毀譽褒貶にかかはりなく自己の道を正しく守り通し、日本の英語学を動きなきものに築き上げたことは万人の知る通りである。

市河は少くも寛斎先生以来四代の江戸っ子であり、儒教的精神に培はれ、学問に徹した。たゞへ偏狭、冷酷に見られようとも敢て言訛や弁解することなく己れに追隨する学生なら喜んで精進させた。10年ほど前私は市河に所望して色紙に字を書いてもらった。「学者如登山」の五字であった。山好きで、また登山の苦楽を生涯の半以上味はつたであらう彼は、その体験と学とが常に一つとなり、おのづからかかる五字となつたのであらう。またかれが物惜みしないことは、父祖から伝はる蔵書を吝みなく後学の使用に任せた。そのため山村才助や松浦武四郎の伝記が目の目を見たことでもわかる。また亡き夫人の追善のためであらうが、東京女子大学の追分寮の建築に貢を捐てたり、少からぬ書物を同大学に寄附してゐる。

彼と私との交はりの淡いことは既に述べたが、昭和の5年ころ彼は北軽井沢大学村に山荘を建てた。私もその1、2年のち彼と地続きの裏側に夏小屋を営んだ。わざわざ互に往来することは稀であるが、時には一緒に散歩して道なき荆棘の間を分け入つた事もあるし、散歩の道すがら立話したり、村会で隣合つて坐つたりして70年余の年月がつづいて今に至つた。山登りが好きでもともと健脚な彼は、昨年夏まで午前と午後の2回殆ど欠かさず可なりの距離を散歩しつづけた。中学以来の同級生でも最も元気だらうと考へられてゐたその人の急死を知つた瞬間、平凡な言方ではあるが、今更に人生如朝露の感に堪えない。以上は平板且つ散漫な記述の連続であり、彼の眞の姿に触れるところは少ないであらうが、筆を執らずにあらねない氣持一杯がこの冗文となった。冬3ヶ月室内に閉ぢこもつたままの私は彼より3、4ヶ月若いが、間もなく後を追つて行くであらう。暫く待つていて貰いたい。（敬称略）（昭和45年3月17日夜記す）

# とりとめもなく

SHUMUTA, Natsuo  
朱牟田 夏雄

3, 4年前からすこし弱られたかと伝聞もしましたお見かけもしていた先生が、とうとうなくなられたことをやはりさびしく思い、哀悼の誠を致したいと思う。本誌から追悼の文章を求められたが、先生の遺された大きな業績については、当然私よりもっと適任な諸君子が筆にされるであろう。他誌にも書いたことだが、ついに不肖の弟子以外の何者でもなかつた私としては、とりとめもなくその時その時の思い出をつづるより仕方がない。それもはなはだはない、自分本位の思い出でしかないのは今さら如何ともしがたいことである。

私は昭和2(1927)年に東大英文科に入学し、その年はHarold Palmer の *Grammar of Spoken English* の講義と、*Hamlet* の演習（あるいは講読）とで先生の聲咳に接した。上級生もいっしょだし、うしろのほうには女子聽講生というのも2, 3列控えているという、ズブの新入生にははなはだ窮屈な感じの教室であった。Palmer の本は周知の通り、例文例句が全部音標文字で書いてあるのが当時としては珍しいものだった。私はそういう文字を中学で教わっていたからあまり苦労しなかったが、東京一中出身の高見順あたりでさえ、used to を [ju:st tə] と書いてあると、[dʒʌst] と読んだりして先生の悶笑を買った。高見に限らず、何かというと先生のその悶笑が出て来るのには降参だった。

その頃はまだ、関東大震災で文学部その他がやられて復旧されていなかった頃だから、教室はバラックでなければ医学部の講堂などを転々とした。Blunden さんの使う講堂が解剖学教室か何かで、教壇のわきに骸骨がぶらさがっていたりした。研究室も仮住居で、四合舎といったか六合舎といったか、とにかく牛乳屋の出張所みたいな名前の粗末な建物に、英文と仏文とが同居していて、学生も自由に出入して利用してよろしいということだったらしいが、とてもそんな恐ろしい所にノコノコ入って行けるものではなかった。私の在学期間の後半になると正門よりのほうに文学部の教室も出来、研究室も図書館東側の一室に移った。私などその頃になってやっと、おそるおそる研究室の扉をたたいてみる気をおこした。卓上に足を投げ出しておられた市河先生のお姿が印象的だった。何しろせまい部屋だったから、先生方のおられる時はこちらは咳一つできないくらいに堅くなっていたようである。

私たちの卒業するすこし前に、文学部の事務室に就職相談部みたいなものができた、専従の事務員がおかれた。先生はその顧問か何かだったらしい。某日構内で先生に逢ったらよびとめられて、「君の家はよっぽど金持なのかね?」といわれたことがある。およそ身におぼえのない嫌疑だからあっけにとられて、「どうしてですか」とおたずねしたら、「就職係に斡旋希望の申込をしなかつたのは君一人だからさ」といわれて二度びっくりした。いわゆる就職難の時代で、新設相談部の実力をあまり尊重できなかつたのは事実だが、それよりも在学3年があつという間にすぎてしまつて、これで世の中に出でゆくのではちとお寒すぎると感じ、もうすこし大学院で勉強しようと思ったのである。先生が相談部に関係しておられるとは、当時は知らなかつたように思う。その相談部から卒業後半年くらいしたころに上田勤と2人でよばれて、台湾軍司令官の通訳の口があるが行く気はないかといわれて、これは2人ともその場でおことわりした。先生がこの話に介在しておられたかどうかは知らない。

上海の東亜同文書院に勤めていた1930年代に、先生から手紙をいただきて、林語堂の開明(Kai-ming)英文法というのを1冊買って送れという御用命に接したことがある。だれか外国の学者から評判をきかれたらしく、それから間もなく、この文法書の紹介をたしか「英文学研究」に書かれたと記憶する。お送りする前だったかお送りしてからか、開明とはenlighteningということかね、というご下間に接して、本来はそうでしょうが、この場合は開明書店という本屋から出ているからの命名でしょうね、三省堂コンサイスの類です、とお答えしたことがあった。

先生の喜寿のお祝いが麻布のシナ料理店であつて、集まる者が多勢祝辭を述べた。私はおわりのほうだったから、苦しまぎれに七言絶句みたいなものをその場でこしらえて披露した。人生七十古来稀というのを起句に、その次は更加七歳寿算喜とおき、それから三喜に喜が加わって、四喜だという初等算術みたいな句があつて、四喜賀筵靄々裡とかいうのが結句だった。冷汗物だったが、先生は言下に Thank'ee と報いられた。

先生をいちばん羨しく思うのは、東大退官後、六十にして教え子を貫かれたことである。こちらはまだあくせくと俗事多端なのにつけても、せめて10年おくれくらいであやかりたいと念じつつ、先生のご冥福をいのる。

(中央大学教授・ELEC理事)

# The First and the Last

UENO, Kagetomi  
上野景福

市河先生が亡くなられて、今あらためて先生から直接いろいろと教えを受けたあれこれが、次々と前後の関係もなくどっと心に浮んできます。先生の学問上の偉大な足跡とか、学界での誰もできなかったような貢献とか、英語教育界を正しく導かれた影響力とかいったものは、適任者がそれぞれ書かれると思いますので、ここにはやや個人的な回想になるかもしれません、不肖の一弟子の目に映った先生のことを書きとめてみましょう。ジョンソン大博士を知るにはボズウェルの書き残してくれた言行録が実に貴重な文献となっているように、こんな駄文も相手が市河先生であれば、また何かのお役に立つかもしれません。

先生のお名前を初めて知ったのは、たぶん中学の4年のときだと思います。当時、研究社発行の『英語発音辞典』を座右に置いて夢中になって引いたものでした。この扉に印刷されている著者名 Sanki Ichikawa は、このとき以来ぼくの網膜にきつく焼きつきました。

しかし直接先生の風貌に接したのは、東大文学部の入学試験で、一般の学科試験に次いで行なわれた各専攻学科別の試験のときでした。英文科の試験は法文経29番教室が使われたように覚えてますが、ここにじっと座って、ときおりじろりと見渡される先生のお姿は、だれから教えられたわけでもないのに、すぐ先生だとわかりました。言ってみれば千両役者の重みがあって、周囲を自然と威圧していたのでしょう。これは、あながちぼくたちが受験生という立場にあったためばかりではありません。(そう言えば、市河先生は「名前はイチカワで千両役者と同じだが、芝居げは薬にしたくもない」と自らを語り、「ガクシャもある程度ヤクシャでなければならない」と「長き教授生活の思い出」の中で述べておられます。)

次に先生にお目にかかったのは、その2ヶ月ぐらいあと、東大の入学式の当日のことです。型通りの一般の式が一応終ったあと、各学科別にわかれ、英文科に入学した新入生一同は助手の曾根保さんと、副手になったばかりの佐々木達さんから、いろいろと説明や注意を神妙に聞きました。今でいうガイドンスに当るでしょう。市河先生も当然この席におられましたが、先生が何をここで話されたか、それとも何も言わなかつたか、はっきり覚えていません。覚えていないところから考えると、何か話されたとしても、あまり多くのことは話されず、お

もに助手と副手に任せておられたのでしょうか。

この日、まだ板につかない「角帽」を意識しながら、正門前から電車に乗って帰路につきました。すると次の停留場の赤門前で市河先生が乗ってこられるではありませんか。しかもぼくと同じ後部の入口からはといって、ぼくのすぐ側に立っておられます。ぼくは胸の高鳴るのを押えて、先生にご挨拶しました。これが先生に話しかけた最初であり、そのときの先生との一問一答は、きのうのことのように鮮やかに覚えています。

しかし実際にはこれは昭和5年(1930)の春のことでしたから、40年も昔のことです。ですから勘定してみると当時先生は44歳ということになりますが、ぼくの目には、そんな年齢とは無関係の老大家として映っていました。しかもこの40年間、不思議なことに先生はそのとき以上に決して年をとられなかつたようと思えます。ゴールに早く着かれたので、あとは足踏みしておられたのでしょうか。

現に最後にお目にかかった今年の正月の10日にも、先生はぼくが初めてお目にかかったときと特に違ったものを感じませんでした。強いて言えば、隙のない厳しい目指(まなざし)に温容が加わったことぐらいでしょうか。この日、気の抜けない2,3の友と誘いあわせ成城の先生のお宅を訪問しました。そしてわれわれが勝手にしゃべりあうのを、先生はただじっと楽しげに聞いておられました。ときおり先生も口を挟まれましたが、それはごく僅かでした。もともと寡黙という言葉がぴったりの先生でしたが、この日はあるいは先生に較べればまだ若いわれわれの談笑に、ちょっとばかり圧倒(?)されたかもしれません。われわれとしては日ごろ隠棲しておられる先生に、つとめて外の話題をお聞かせしようとして、よけいおしゃべりになっていたようです。晚餐のご馳走になり、お暇(いとま)したのは、かれこれ7時半ごろでした。玄関まで見送って下さり、いつまでも電燈の下に先生は立っておられました。

先生の葬儀は市河家の菩提寺で、寛斎・米庵のお墓のある(そしてそのため東京都の史蹟になっている)谷中の本行寺の僧侶の読經で行なわれました。ここは日蓮宗の名刹です。たまたまその10日後、同僚諸君と甲府方面へ旅行する機会があったのを幸、帰路身延山へ初めて寄り、標高1,143メートルの山頂にある奥の院(思親閣)まで登って清々しい山の大気の中で、平野・田中・下村・中野里の諸君とともに「友林院殿清庵喜大居士」に向向してきました。少なくとも登山家であり、高原を愛された先生は、あるいは有難迷惑と感じながらも、にこにこと見守っていて下さったように思いました。

(武蔵大学教授)

# DR. SANKI ICHIKAWA

A. S. Hornby

When, in the 1930's, I left Kyushu to teach in Tokyo and to work with Dr. H. E. Palmer at the Institute for Research in English Teaching (as it was then known), I had the great privilege of meeting a number of Japanese scholars who were members of its Board of Administration and research associates. There was Dr. Joji Sakurai, Dr. Sanki Ichikawa, Professor Rinshiro Ishikawa, K. Jimbo, Takeshi Saito, Senkichiro Katsumata (author of the valuable 'Dictionary of English Collocations'), T. Chiba, Eishiro Hori (with whom I used to broadcast from N. H. K.), M. G. Mori (the blind scholar who knew more about English grammar than many eminent European grammarians), Colonel Shigeo Emoto (who spoke correct English at a higher speed than any British or American speaker), and many others whose names, alas, I can no longer recall with any certainty.

It was a privilege to work with them on the Board when I succeeded Dr. Palmer as adviser in 1936. Almost all of them are now dead, and today we mourn the loss of Dr. Sanki Ichikawa, the greatest English scholar of them all.

I recall him as the kindest and most sympathetic member of the Board, always ready wise counsel and sympathy. Others will pay tribute to his wide knowledge of English literature, to his enthusiasm for Shakespeare (which extended, I recall, to the making of a garden in which were grown all the herbs, flowers, shrubs and trees mentioned in Shakespeare's plays), and to the friendships he made with scholars of English everywhere in the world. He was primarily a student of English literature, but was, too, an authority on the English language. He was able to direct the activities of the Institute in linguistic research and in methodology. Like Palmer, he knew that to scale the peaks of literature it was first necessary to traverse the plains of language learning. The addresses he gave at the Institute's annual conferences were practical and inspiring.

During my visit to Japan in September last year I

did not meet Dr. Ichikawa. His age prevented him from being present at the meetings I attended. I was happy to be told, however, that he was still able to walk daily. His death this year has filled me with a sense of personal loss. I did meet him when I was in Tokyo in July 1956 for the Specialists' Conference held under the auspices of ELEC. It was typical of his kindness that when he learnt that I wished to see a Noh play he helped me to do so and provided me with a book containing his English translations of some of the Noh dramas.

As we grow older, we all tend to look back on the past with nostalgia. We think of the past as being better than the present. "There were giants in those days", we say to ourselves. There *were* giants in those days, and among them were the Japanese scholars with whose names I began this short tribute.

We must not, however, regret their passing too much. They have been succeeded by new scholars. Japan today need not think that English teaching is failing to make progress. Japan has always been in close touch with linguistic research everywhere and, what is more important, has always made her own contributions to it. Dr. Ichikawa must have felt, in recent years, that his work, and that of his associates, was in good hands and that progress was being, and will continue to be, carried on in ways he could approve.

## PREFACE.

It need scarcely be said that too much importance cannot be attached to the study of prepositions or other particles of whatever language possess them at all and nowhere else is this more the case than with English where case endings have long been discarded and full scope was given to the development of this part of speech. The evolution of the diverse and often complicated meanings of English prepositions, some of them so remote from their original significations that they can hardly be traced back to them, is simply prodigious and always affords a subject of inexhaustible interest to a curious and inquiring mind. We might say without exaggeration that the nice subtleties of meanings expressed by prepositions constitute a chief beauty in the English of the present day and it would be a sheer impossibility for those not to the manner born and especially for us Japanese, to whom English is emphatically a foreign tongue, to try to enter into the genius of the language of Shakespeare and Milton without a right understanding of the uses of these Protean particles. Nevertheless, the study of the syntax of English prepositions has hitherto sadly been neglected, and he who wishes to make any systematic investigation in this field will find in his path innumerable difficulties to contend with.

# 座談会 言語行動の比較研究

出席者	服 部 四 郎	(東京大学名誉教授)
前 田 陽 一	(東京大学教授)	
國 廣 哲 彌	(東京大学助教授)	
中 根 千 枝	(東京大学教授)	
國 弘 正 雄	(お茶の水大学講師)	
(司 会) 中 島 文 雄	(津田塾大学教授)	

## 日米文化教育会議

中島 きょうはお集まりいただきありがとうございました。2月末にワシントンで日米文化教育会議というのがありますて、皆さんお出かけになったので、それでお集まり願ったのですが、この会議がどういうものであるかというところから説明していただきたいのですが。

前田 いきさつはかなり複雑ですからそれをご説明しましょう。事の起りはもう10年近く前になりますか。池田首相がケネディ大統領と会談されて、日米の協力関係、ただ政治、外交面、安保、そういうところ以外でも協力をしようじゃないかということが出て、3つの分野が考えられた。

1つは経済の面で、ひんぱんに日米経済閣僚懇談会というのをアメリカと日本で相互に行なっているわけです。

第2の分野が自然科学で、自然科学の領域において両方の学者が共同研究しようと、これは非常に伸長して、今日では学術振興会を通じて日本側だけでも年間2億円のお金が使われていて、数学から医学に至る広い方面で日米の学者が両方で協力していい題材をさがしてやっております。近ごろは共同研究の題目の公募をするぐらいまで広くなってきたわけです。

第3の領域が文化と教育の交流で、これはいまから8年前に第1回の会議が東京で開かれ、それから2年おきに交互に、2回目がワシントン、3回目が東京、4回目がワシントン、それからつい先週東京で5回目の会議が持たれました。これは直接、文化、教育に関係ある大学関係の方とか、芸術家ばかりではなく、たとえば今度の会議では両方とも議員さんも1人ずつ出ていたり、政府の関係の代表とか、財界の代表とか、新聞界の代表とか、要するに各方面の代表が集まって、国民的な広い見地から両国の文化、教育交流を促進しようということを話し合う会議が行なわれてきました。その会議の1つの大事な仕事として、自然科学でもやっているような共同研究を人文科学、社会科学の面でもやろうじゃないかといふ

ことが第3回の東京での会議の決議になりました、4年前ですか、それがその後実行されて、2年少し前に両国に共同研究のための委員会が結成されました。

当時日本側は大河内前東大総長が委員長でしたが、いまは中山伊知郎先生が委員長になっておられ、委員は桑原武夫さんとか学術振興会の吉識さん、鵜飼さん、都留さん、松本重治さん、平塚さんと私、向こうは Council of Learned Society、人文系の学会と、Social Science Council、社会科学との両方が一緒になったものがアメリカの委員会で、日米が一緒になって学者だけの委員会で共同研究を進めていくことになりました。

その予算はアメリカ側は国務省とか、たとえば今度の社会言語学の問題なんかは教育庁が出しますかもしれませんし、それから問題によってはほかのものも出す。要するにアメリカは主に政府のお金です。日本はもとは政府ですが、文部省から学術振興会に予算が来て、ちょうど自然科学の場合と同じように学術振興会の事業としてまかなうことになっております。そしてその共同研究のための委員会は、2年前にホノルルで第1回の会合を行ないまして、日本では委員長の大河内さんもそのころ東大の紛争が始まる前でしたので行かれ、都留さんと鵜飼さんと私と、それから学術振興会の岡野さんが行きまして、向こうからも4人の学者がみえて第1回の打ち合わせ会をしたわけです。

その話の結果まず最初に取り上げる問題としては、アメリカが日本を占領していた間の占領行政に関する資料がどこにあるかということを調べて、bibliography をつくろう。それから占領行政にタッチした人がだんだん年をめされているから、いまのうちにインタビューをしたらいんじゃないか、どういう方とインタビューしたらいいかということをいまのうちに急いでやらなければいけない。これはまさに両方とも一緒にやるべきかこうの材料なんで、それを取り上げたわけです。

それからもう1つは、アメリカと日本との生活水準、それはただ貨幣価値だけではわからないので、実際にどういうことを enjoy しているかということ、どういう思

恵をこうむっているかということを調べなければならぬ。日本のほうが安いものもあるし、逆にアメリカのほうが公共施設が多いためにそういう意味でまた樂しているところもあるし、そういうふうに具体的な生活水準の比較研究をするということをやってみよう。その2つの分野について2年前から共同研究が行なわれていて、これはほぼ両方とも昨年度で一応完了して、今年度はすでにその出版費が計上されております。

その2つを選んだ2年前の会議のときにいろいろな案が出たのですが、すでに第1回のときにも、これは私が言い出したのですが、アメリカ人と日本人のことばの使い方の違いを調査しようじゃないかと。これは内容に関してはこれからずっと先生方といろいろお話ししていくので詳しいことは申しませんが、要するに、この間ワシントンに行って相談したような問題、そういうことばの使い方の違いを科学的に調査したらどうかということを2年前に言い出したわけです。それは私、子供のときから外国と日本の間を行ったり来たりして、たしかにことばの使い方が違う、それからことばの役割が違うし、ことばそのものの意味が違うとか、いろいろなことがあることに気がついていて、西洋人と話す場合と日本人と話す場合には切りかえないとうまくいかないということも経験的に知っております。

ところがそういうものを正面から研究したこととか、学問的に研究したものがない。幸いに日本には英語を話す人がたくさんいるし、アメリカも西洋の国では今日最も日本学者が多い。日本をよく知り、日本語もよく知っている人が多い国だから、もうそろそろここで両国の学者が共同してこの問題に当たったらいんじやないかということを最初の会議にも申したわけです。しかしそのときはあまりにも問題がぼうばくとしてつかみどころがないので、将来折りをみてやろうということになっていたわけです。

ところが2年たっていまの2つのものがすんで新しいものを取り上げようということになって幾つかの題が出てきたときには、今度は私は日本側では1べん言ったっかりで、そうpushしませんでしたが、アメリカのほうが食いついてきて、社会言語学者のグループが、こういう問題はおもしろいということを言いだしてきたわけです。それで、それならばというので日本側もその気になって、少し前に向こうの委員長のJohn Hallというイエール大学の日本学の教授がわざわざ日本にみえまして、日本側の委員とお話し合いをしたところ、やはりこの問題を取り上げようということに、意見が一致したわけです。

ただ問題があまりにもぼうばくとしているので、いき



中島文雄

なり共同研究を始めることがとてもできないから、どういう問題があり、どういう方面から研究ができるだろうかというようなことをまず話し合う必要があるうと、それで初めのうちはある程度長いseminarか何かを開く予定でしたが、この親委員会が3月の中旬にあるために、その前に少し具体化させておかなければいけないので、ほんの打ち合わせ会ですね。どういうことができるか、それから両方ともやる気があるかということを確認する、そういう会議を持とうというので、この間、きょうここにお集まりの5人の先生方と、学振の長谷川さんと一緒にワシントンに出かけたわけです。

ですからこの間ワシントンに参りましたのは、日米教育文化会議の1つの下部機構である共同研究の委員会の扱う1つの仕事として、一応アメリカ側でいう社会言語学の共同調査、それをexploreする、どういうことが研究する意味があるかどうか。それからやるとしたらどういうことができるか。そういうことを相談するためだったわけです。

中島 それでは今度はその会議の内容を伺いたいわけですが、その前に社会言語学ということを言われましたが、英語ではおそらくSociolinguisticsというのだろうと思いますが、これはずっと使われていることばですかわりあいに新しいのでしょうか。Linguistic anthropologyというようなことなんですね。

服部 そういうのがありましたね。Anthropological linguistics, Sociolinguisticsというのはもとからあったのですかね。

中島 あまり聞きませんね。昔から言語社会学ということは言っておりましたけれども、それとは違うのでしょうか。

前田 この会議でワシントンに行く前に、向こうから



服部四郎

ペーパーを送ってきて、それに向こうの Social Science Council で Sociolinguistics の committee ができた。その committee のメンバーを見ると、言語学者もあり、人類学者もあり、心理学者もあり、というような、いろいろな分野の人がその committee に入っておりますね。

中島 それで 6 方の方がいらしたわけですが、その会議の様子をもう少しくわしく説明して頂きたいのですが。

服部 そのまえにチーム成立の事情を少しお話ししておきますと、昨年の 12 月に前田さんが私のところにおいてになって、さきほどお話しになったようなことを言われたので、私自身もいろいろな経験があり、日本人と西洋人の言語行動の大きな違いは、恐らく何千年、何万年という長い間かかってできた社会習慣の差異なんだが、近年急速に変化しつつあるので、この自然の大実験の結果ができるだけ早く記録しておく必要があるというわけで、全面的に賛成したのです。

それに、ELEC での私たちの研究は言語体系・言語構造の対照的研究だけれども、これは言語行動の対照的研究だから、両立するとも考え、乗り出すことにしたのです。最初の前田さんの話では、第 1 回の会議は 5 人位でやり、後にさらに 5 人位ふやして 10 人位でやりたいということで、自分は何もわからないから適当な人を推薦してくれと言われました。そこで中根千枝さんを含む 4 ~ 5 名の方の名前を挙げておいたのですが、その後 1 月末でしたか、いよいよ話が具体化し決定したとかで、中根さんと 2 人で私のところにお見えになり、前田、中根、國弘、國廣の 4 氏と私という第 1 回会議の顔ぶれがきまたのです。それから学術会議で、5 人が打合せをして、2 月下旬に行くことになったのです。アメリカ側は John W. Hall, William Labov, Dell Hymes, Samuel

E. Martin, Eleanor Jorden の 5 人に決まったという電報が 1 月末に届いていました。

國廣 2 月 25 日に一行は全部そろって同じ飛行機で出発しました。そして途中サンフランシスコに 1 泊して、26 日にワシントンに着きました。27 日、28 日と会議が 2 日あったわけですけれども、第 1 日の 27 日の午前中はまず John Hall 教授が最初のあいさつをされまして、そこで今度の会議の目的を大体説明されました。

そこでは、いま前田先生がお話しになつたようなことを大体お話しになつたわけで、今度の会議は exploratory conference であるということをおっしゃって、どういう具体的な問題があるかとか、研究を進めるのに今までにある研究でどういうものを利用できるか、そういう点でみんなの意見を聞きたいというようなことがありました。

前田先生はかなり具体的な問題をお話しになつたと思います。そのお話の中でしたか、日本の上役は詳しい命令をくださないのでアメリカは詳しく言うというお話もありましたね。(笑) そしてそのあとで会議メンバーの自己紹介がありました。前後しますけれども、会議で使われたことばは英語でした。アメリカ側にも 3 人ほど日本語を話す人がおられたわけですけれども、英語になりました。そしてその自己紹介では各人の言語歴を話しまして、それにつけて加えて問題点なんかもそれぞれ幾つか指摘されたようです。

中島 会議は 2 日間だったわけですか。

國廣 そうです。その自己紹介と一緒に指摘された問題点はいろいろおもしろいこともあったのですが、午後になるとメンバーが言語学部会と文化人類学部会の 2 つに分かれて、それぞれ違った部屋で問題点がどういう点にあるかというようなことが討議されました。

28 日の午前中に前日の討論のまとめを言語学部会側は Eleanor Jorden 女史、そして文化人類学部会側は Fischer 教授が話されました。言語学部会は大体 3 つにまとめられまして、その 1 つは、いろいろな社会的な場面ごとにそこで使われる言語表現を比較をするということ、2 番目は、日本語と英語の表現の比較ということを問題にして、その 1 つの方法としては、翻訳とその原文の比較というようなことも方法として考えられるというようなことです。第 3 番目、これはこまかん問題ですけれども、共通語の問題が出まして、共通語とは一体何であるか、だれが共通語をきめるか、それから共通語というものに対する一般の日米人の考え方というようなことも問題になるというようなこと、それから言語調査する場合のインタビューの技術といふことも問題になるというようなことでした。

それから文化人類学部会のほうでは、民族による文化の中での言語の機能の違いということ、それから言語の使い方の特徴が文化によって特徴づけられる点があるだろうということ。いろいろな言語の変種というかこれは social dialect になると思いますけれども、いろいろな言語の変種とその社会層との関係、社会構造と言語に対する態度との関係、そういうことが問題になるだろうというようなことでした。

それから、Dr. Caudill という人を招いて、その人がずっと手がけておられた日米の子供の言語行動の比較研究の報告があって、それが 1 時間以上続きました。

それから Center for Applied Linguistics からも 1 人来て、そのセンターでやっている仕事の内容紹介ということがかなり詳しく行なわれました。それで大体午前中の時間を使いまして、そのおしまいに、Hall 教授がまとめられて、アメリカ側と日本側の今後の連絡係として、アメリカ側は Jorden 女史、日本側は私ということにして、今後積極的に研究を進めていくということを決議して散会したわけです。

### 言語行動の比較

中島 どうもありがとうございました。それで会議の様子はわかったのですが、具体的なお話が読者のためにもおもしろいだろうと思いますので、何か具体的なことで日本の英語教育に参考になるようなお話を伺いたいと思います。必ずしも会議の話題になったというのではなくてもけっこうですが、今後の研究がこういう方向に行くんだということがわから抜けっこだと思うのです。何かいまのお話をもう少し具体的な実例でお話しitたい。つまり日英語の比較、比較といつてもそれこそ言語行動の比較であって、構造の比較ではないわけですね。

國弘 さっき國廣先生がお触れになった Caudill という人の報告の内容が非常におもしろかったです。要するに母親と子供との間のかかわりですね。それが日米でどのように違うか。そしてそのことが一体いかなる言語行動ないしは言語というものに対する信頼度の上の相違を導き出すか。そこまで Caudill さん自身が結論しているわけではないけれども、そういう結論を引き出したくなるような話でした。

要旨を簡単に申し上げると、Caudill さんは、社会的な背景、あるいは経済的なレベルというようなものの新しい日米の初生児を同等数集めて、その初生児が母親とのようなかかわりをもっているか、母親と子供との間のかかわりをきわめて実証的に、かつ総密に調査したわけです。その調査の結果の findings はたくさんあったわ

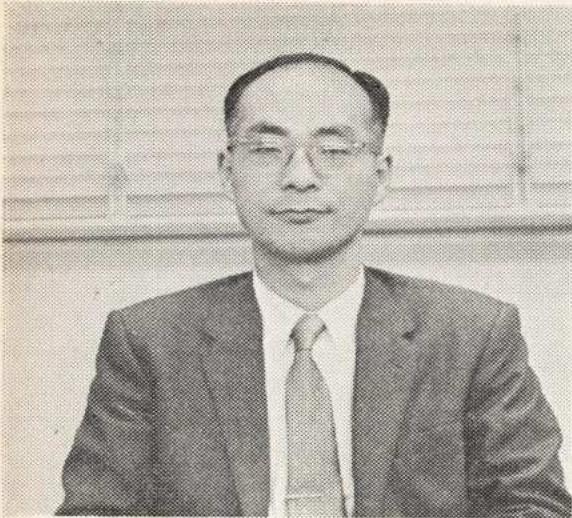


前田陽一

けですけれども、言語生活、言語行動というような面に関係のある findings だけを 2 つ申しますと、1 つはアメリカの母親のほうが日本の母親よりも子供に話しかける度合いというか、頻度が高い。つまりアメリカの母親のほうが日本の母親よりも子供によくおしゃべりをするということがどうやら 1 つ言えるらしいのです。アメリカの母親のほうが子供を別人格としてみなしているという傾きが強い。

それに対して日本の母親は、子供に対して語りかけることはしないけれども、lullaby といいますか、子守歌のたぐいですか、というようなものを歌って、そして子供を抱いたり、あるいはときと場合によってはおぶったりして、子供を揺さぶりながら子守歌を聞かせる。英語で lull ということばを盛んに使っております。そういう意味だと私は理解したのです。言語化する度合いというのが非常に日本の母親のほうが低いようです。しかし、lull する度合は日本の母親のほうが高い。そして何か子供を抱いたり、おぶったりしながら一緒にからだを揺すっているということで、子供を別人格として認めているよりはむしろ子供と母親との一体感みたいなものがそこで強調されるのではないかとも言っています。これが第 1 の finding です。われわれの問題に直接関係があるのは第 1 の finding だと思います。

それから第 2 の finding として関係あると思われるものは、子供が何か不愉快な音を出した場合、unhappy vocalization といっておりましたが、たとえばむずかるとか、あるいは泣くとか、とにかく子供が不快感を音声的に訴えた場合に、アメリカの母親はすぐ子供のところに飛んでいく。日本の母親は薄情だということには必ずしもならないと思いますけれども、それに対してすぐ子供のところに飛んでいくということが少ないので、そして、な



國 廣 哲 彌

ぜ、何が子供をして unhappy な vocalization をさせているのかという原因をつきとめて、それを正すという行為もアメリカの母親のほうがより早く、またより質的にも濃い。日本の母親はなかなか子供のところに行ってしまやらないし、また原因を究明して、それを矯正するということがおそいという結果を報告しておりました。

これはおそらく私の憶測ですけれども、家屋構造の違い、その他もからんでくるのではないかと思います。アメリカの場合のように個室があって、子供も個室に入っている。そして子供が泣声をあげているというような場合にすぐ飛んでいかなければ重大事を引き起こすという可能性もあるわけです。一方、日本の場合は、1つの部屋で、せいぜい障子か何かで仕切られていることが多いですから、母親は仕事をしながら泣きじゃくっている子供をよそ目で見て、別に危険もないからほっとくという。家屋構造の違いも若干からんでくるだろうと思います。いずれにしてもそういう状態だ。

そこで考えられる1つの帰結というのは、言語というものに対してアメリカ人の子供は小さいときから信頼感を持つ。つまりことばに出すことによって何か不愉快な状態が直ちに矯正されるのだというような信頼度を持つだろう。それに対して日本の子供は声に出しても騒いてあまり事態が改善されないということで、言語に対してはあまり大きな信頼を置かないのではないかということが憶測されると思います。

私が一番 Caudill の話で感心もし、またきょうわれわれがここで討議しようという問題に関連あると思われるものは以上の2点ですけれども、ほかの先生方から補足なり訂正なりしていただければたいへんしあわせです。

中島 非常におもしろいですね。アメリカの母親が子供を別人格にみているというのは、やはり夫婦の間でも

darling とか言っているのと通ずるんじゃないかな。(笑) 日本なんかそんなこと言いませんね。

前田 話が論理的につながるので1つ申し上げたいと思いますが、私もこの間の会議で一番おもしろかったのは Caudill さんの話で、なるほど最初からそうなのかと思って非常に教えられたわけです。私は専門が思想史ですから、逆に西洋人と日本人との民族的な長い思想伝統の違いということを主に考えていました。ですからこの間の会議のときにもちょっと申しましたけれども、西洋はご承知のようにギリシアとキリスト教の文化の産物、西洋人はみんなそうで、アメリカ人もその1つの流れですが、キリスト教の場合には、聖書はほんとうに神のことばであると、逐字靈感説というものがあるのですね。それは派によって違いますけれども、一番極端なものは逐字的靈感だ。神のことばを、非常に大事にする。神がことばを通じて人間に真理を与えたという信仰です。

それからもう1つの流れのギリシア語は、おそらく世界で一番精密な、繊細なことばで、たいがいのことはかゆいところに手が届くように表現できることばです。そのことばで頭が練られてきている。どの民族もルネッサンス以後そのギリシア語で brush-up して、自分のことばを精密にしていく。私が勉強しているフランス語なんかそれに一番近付こうとしてやってきたと思います。そういうふうに西洋思想のもとはことばというものが非常に重要なものをもっていて、ことに一番極端なのがフランス人で、現在のフランス人でもことばによって何でも言えるという確信を持っております。それに反してわれわれのほうは以心伝心、それから腹だとか、大事なことは口では言えない。ことばはすぐあきらめてしまう。そういう伝統があるわけなんで、要するに長い間の祖先からの伝統、歴史的な伝統が初めのころからことばに信用を置かない。あちらはことばを大事にするという伝統の違いと思っていたわけですけれども、何のことはない。もっと簡単に、赤ん坊のときにおかあさんにあやされるときから始まっている。(笑) むずかしく考えなくてもそこにあるということがわかった。それならその縦と横と両方、1人の人間の origin からと、民族の origin からの両方からなってきているので、これはやはりいぶん違うなとわかって、この研究がいろいろな専門家によって進められることを期待しております。

服部 ぼくも Caudill の話は非常におもしろく思ったのですが、アメリカのおかあさんは、つまり、happy vocalization と unhappy vocalization の違いに特に敏感で、それに対応して反応を変える。赤ん坊が unhappy vocalization をやっている場合はすぐそれに手当をする。Happy vocalization の場合はまたそれに対応する。

ところが日本のおかあさんはこの両者の違いということにあまり注意しない。日本のおかあさんは、赤ん坊を自分自身の一部のように思っている。赤ん坊のほしいもの、赤ん坊のいやなものはみんなわかっているというふうに考えているようだというのですね。ですから happy vocalization を出しておっても自分が赤ん坊に必要だと思うことをしてやる。(笑) Unhappy vocalization を出しているときでも捨てておく。赤ん坊の意欲とは関係なしにおかあさんがこれがいいと思えば与える。

つまり、アメリカのおかあさんは、赤ん坊を間隔をおいて離れて観察して、その声を聞き分けてそれに反応する。ところが日本のおかあさんは赤ん坊の vocalization にはわりあい無とんちゃくで、赤ん坊が好きに違いないと自分の思うものを与える。あるいはいやがると思うものを取り除いてやる。そういうふうにしておればアメリカの赤ん坊は自分の vocalization に対応した手当てをして貰えるのだということがはっきりわかるようになる。ところが日本の赤ん坊の場合には unhappy vocalization をやったところで対応する反応が必ずしも直ちには現われないとすると、自分の出す声の意味というものがわからなくなってくる。それでアメリカの赤ん坊の場合、実際に生まれた直後からすでに自分の出す声の意味を教えられているわけですね。日本の場合には、それが教えられないようなことになるから、ことばに対する信頼がより薄くなってしまって、しまいにはほしくても黙っているとか、黙っていても向こうが察してくれるはずだと、言挙げせずとか、不言実行とか、そういうもろもろの、非常に向こうの人間と違った態度ができるてくるのだと思われます。しかもそれが生まれおちた直後から始まっているということを聞いてぼくはがく然としたのです。

わが国でも戦後若い世代の言語行動がかなり変わりつつありますね。それでこういう研究は急がなければいけないと思っていましたが、しかし赤ん坊のときからの訓練の仕方がこんなに違っているとすれば、まだだいじょうぶだろう。そんなに急ぐことはないだろう。安心してゆっくり研究すればいいと(笑)、そういうふうに直感したのですよ。驚きました。

前田 ほんとうに行く前は急いでやらないといけないと思っていましたが…

服部 どんどん変わるから早く研究しようと思ったのですがね。(笑) こういう研究は大事だと思って。

中根 ことばということを考えると、悪循環するかもしれない私思ったのですね。というのは vocalization があまり意味をなさないから、反対にほかのことで伝達する能力が発達しますね。たとえば感覚が発達するというか、以心伝心というのがたしかに日本人はその tech-



中根千枝

nique が相当発達しているのですね。飛行機の中の操縦士同士の communication が日本人の場合はすごくよくて、アメリカ人よりずっとことばを使わないで、とってもよくいくって。そういうことをあのときだれかがおしゃって。

前田 ぼくはそれを書いたことがあります。

中根 先生でしたか。帰りに日航の機長に操縦室にいらっしゃいませんかとさせられて、そこで、いろいろなことを話して、どういうご研究をなさるのですかと言うから、たとえばこういう操縦室の中の人間関係をアメリカと日本と比較するのですと言ったら、それを聞いていて、それは日本人のほうが以心伝心でとても通ずるからいいけれども悪いこともあるというのです。captain がきげんが悪いぞということがバッとみんなに伝わっちゃって。(笑) ほんとうはそんなにきげんの悪いことを考えないで操縦すればいいのに、それを知ったために苦しむことが多いというんですよね。ですから以心伝心のほうもすごく発達しちゃいまして、そうするとまた言語の威力というものが減るのではないかしら。

中島 だから日本人の場合は小人数ならばそれで非常にうまくいくけれども、systems engineering というとだめになるのではないか。(笑)

服部 それで思いついたのですが、ぼくが学生のときに偉い先生が見えまして、こわい方だったのです。事務室のほうに坐っていらっしゃるところに、毎朝事務員が入っていって、まっさきに先生のひげを見るというのです。ひげが下がっていればよろしい。(笑) 上がっているといかん。(笑) そういうことの見分けは非常に速いのですね。ことばに出さなくても表情というかなんというか、そういうものの見分けが非常に発達していると思うのです。



國 弘 正 雄

前田 だからよく西洋人にこのことを説明するときは西洋人にはことばというものは the means of communication, 定冠詞つきの方法だと。ところが日本人にとっては不定冠詞つきの方法、たくさんある中の1つにしか過ぎないので、いろいろなほかの要素もみんな合わせて見なければいけない。だからただ「ハア」といっても顔色とかみんな入れなければ、それからお互いの社会的な地位の違いとか、先輩、後輩とか、みんなすべて勘定に入れなければ理解できない。それでぼくはあるところに書いたのですけれども、長い間西洋人のほうはどうも同じ時間にたくさんのことと言ったんですね、内容的に、スピードが速いのですよ。講義でも何でも速いのです。日本語より、それは西洋人の頭が速いのかと思ったらどうもそうでもなさそうだ。考えてみたら西洋の場合には、これはフランス人の場合は一番わかるのですけれども、何でもことばに盛ってあるからことばだけ follow していればいい。聞くほうはことばだけ注意していればいい。だから速くてもついていけるけれども、日本で話しているのは、ことばだけ follow してたんじゃいけない。ほかのことも考えなければならない。ことばどおりとってはいけない。だから顔色見たりするわけですね。速く言われると困るわけです。で、あまり速くいけば、相手も口先でごまかすんじゃないかと。フランス人の場合は論理だけ追っていけばいい。論理さえいんちきがなければごまかしにならないわけです。日本語の場合はあまり速くたたみかけていくと、あれは舌でごまかしているんじゃないか。(笑) そういう速度の違いということがそこにあるということに気がついた。

中島 それは芝居でもそうですね。日本のせりふはおそれけれども、向こうのは速いからね。ことばで劇が展開していくでしょう。日本はしぐさや何かで。

前田 だからフランス古典劇を日本の学生に講義するとき、まず最初に言うことは、たとえばラシースならラシースという。作者が言わんとすることは全部ことばになっているから、ことばを精密に分析さえすればすべてがわかるのだと、ことば以外のことをさがすなと言って教えるのです。

ところが歌舞伎を見て気がつくことは、ぼくらホロリとするのは、たいがいせりふと事実が違っているから。(笑) おかあさんが自分の子供に「かわりに毒まんじゅう食べなさい。わが家の名誉です」なんて。(笑) だから違うんですよね。

服部 この間、ある教授夫妻を歌舞伎にお招きました。奥さんは全然日本語はおわかりにならない。そうしたところが完全にしぐさだけで芝居がわかったというのです。ことばは全然わからないけれども、非常によくやるといって感心しておられました。

ところがいまおっしゃったように、あることばを言いながらしぐさでは別のことを行っている。そこを味わわなければいけないわけです。ところがいまの西洋婦人はしぐさだけを見て、一応はわかったつもりですけれども、本当に劇を味わったことにならないわけですね。そういうようなことの研究をする必要がある。言語行動の大きな違いがあることはあるけれども、どうやってそれを科学的に把握するかということでしょうね、問題は。

前田 すでに Caudill さんみたいな data が出てくるわけですからね。ですから専門家にやっていただいて、だんだん積み上げて。

#### 言語行動の比較研究の方法

中島 どのように実験したんですか。

中根 タイムウォッチではあって、1日じゅうその家にいるんです。

服部 これはやはり日本人だったらばかにするような、笑っちゃうようなやり方ですね。それがぼくはやはり科学的な方法だと思うのです。ただ印象的にやらないのです。15秒ごとにそのときの状態を観察して。

中根 そして書く途中は blank だと。日本人だったら言わないわよ。

服部 15秒おきにバッとする。その瞬間におかあさんと赤ちゃんがどういうことをやっているか、それを予め用意しておいた記録表のいろいろな該当の項目のところにしをつけるのです。15秒したらまたバッと見て。(笑) そういうふうにして10分やってから5分休む。そしてまた10分やるというふうに、できることをやるんですね。15秒の間をおくというのは意味があるので、その

間に、さっき観察したことが記録できる。その時間がちゃんととはかってある。そして10分やったあとで5分間休める。そしてまたやる。こういうふうに、ちゃんと観察したことを記録するのですから、ただ印象的な思い出のようなものにはならないのです。

中島 そういうように日米でことばに対する態度が違う。やはりいい点と悪い点とあるんじゃないですか。日本のほうが必ずしも全部悪いわけでもないんでしょう。日本の生活のほうが気楽だということはないですか。

前田 狹いところに大勢ひしめき合って住んでいるから、お互いに察することがなかったらたいへんでしょうね。

中根 楽なこともあるけれども誤解も多いんじゃないですかね。ちゃんとといってればいいけれども、ずれていするのが相当ある。

中島 それからよけいな気を使うということもありますね。向こうはことばどおりでいいから。

中根 何か日航の機長たちが、忙しくなるとアメリカ式のほうが楽でいいですって。Yes, no とはっきりいて察しなくていいほうが楽だといって。

服部 ぼくも20年前になりますが——アメリカ人はやはり約束をよく守るでしょう——そのときにはことばを聞いていなければいけない、ということを経験しました。非常に友好的でもことばがそうでなければそれはいけないのでね。うっかり喜んじゃうとひどい目に会うわけですよ。だからことばを聞くということは非常に大切だと思いますね。向こうの人と交渉を持つときには、ですから、そのへんの事情を日本の政治家たちにおわかりいただきたいと思いますね。ビールなど飲んで非常に雰囲気がよかったです。(笑) だからだいじょうぶだというふうなことでは困るんで、条約の条文そのものが大切なんですね。その条約を締結するときの雰囲気は、極端に言えば条約そのものとは関係がないわけですよ。

中島 実際日本人はそういう条約の文句なんてあまりね。われわれだって出版の契約書読まないでしょ。(笑)

前田 親しい者同士で契約書なんか見たらほんとうにあいつは変なやつだと思われる。(笑)

服部 そのかわり向うでは、書いておけばそのとおり履行しますからね。日本のは書いてあったってダメなんです。

前田 身にしみて知られたのは、戦争直後に外人教師が来たんです。そのときの契約書があるんです。着任したら家は東京大学が35,000円の範囲で見つけて住ませることを書いてあるんです。そういう契約書あったんです。ところが戦後のあのたいへんなときに西洋人の住める家なんてそう簡単にありはしない。それだか

ら一生懸命やるのだけれどもなかなかできない。そうしたらカンカンにおこっちゃってね、向こうは、だって約束じゃないかというわけです。間に入ったぼくは困るんです。学校の事務当局はそんなこと言ったって無理ですよということですね。東京の家のないところで、日本人ならそんなことはわかるのだけれども、それは契約書だというわけです。ぼくは実は契約書なんか見なかった。(笑) そんなにはっきり書いてあるとは思わない。

中根 私、この間 London の本屋と契約したんです。私、大したことないと思ってよく読まなかっただんです。友だちが、よく読まなければだめだといってさかんに悪知恵を入れるんですね。りっぱな出版社で、大丈夫だと私は思っていたのですが、彼らに言わせるとどなりっぱな出版社でもこちらに弱味があるとやられるって……。りっぱだというのは問題にならないといってね。だからすきがあるほうが負けだというわけ。やはりちゃんと契約しないと危いんですね。

中島 やはり日本というのは狭い社会でお互いにわかっているから信頼しちゃうんですね。

それで日本の英語教育ですがね、そこまでいかなくちゃいけないんじゃないですかね。ことばに対する態度というものは。

前田 大事業ですが、ぼくはだんだんそういう研究を積み重ねていくことは必要だと思います。よく日本ではいままでの英語教育のしかたが悪くて、本を読むことだけしかやらないから1つも話せないといいますが、それにちょっとぼくは不服があるので、結局その理由は、耳と口の訓練がしてないからだというふうに簡単に考えて、ただ発音の練習とか tape を聞くとか、音のことだけすればもうそれでいいんだ、抜けているのは音だけだというふうに思われがちだけれども、実は外国人と話していく学校で習った英語で役に立たないのは、いま言ったことばの使い方が違うために予想もつかないことを向こうがしゃべるからです。

それから、こちらも向こうの予想もつかないことを話す。食い違った内容を予想するから、それに発音がへたならなおさらわからない。ところが向こうが何を言うかお互いに言語の使い方が同じでわかっていてれば多少耳は悪くたって聞こえるはずなんです。西洋人同士はずいぶんひどい broken の発音で通じているでしょう。スペイン人の英語とか英米人のフランス語だってめちゃくちゃに broken な発音で通じてるんですよ。それは大体言うことが見当つくということでわかるんです。だからいま中島先生がおっしゃったように、たしかにそういうことを明らかにしなければ普通の会話だって壁になってしまふ。

國廣 その点に関係あるんですけれども、私も会議のときに触れたのですが、実生活のいろいろな situation というか、わかりやすい例でいうと、あいさつの場面、買い物の場面、議論の場面、そういう場面のあるものは日米で共通なものがあるから、そういう共通な場面を取り出して、そこで用いられる言語表現にはどういうものがあるか、またそれがどういう順序で用いられるかという、そういうやり方を方法の 1 つとしてやったらしいんじゃないかということを言ったんですけども、そのことにも関係がありますね。

服部 それをどういうふうに科学的に研究するかということですね、やはりいちばん重要なのは、自然な行動を観察するということですけれども、この観察というのはただ印象的にやるのではなくて、科学的な方法でやらなければならぬし、できれば何らかの形で記録して——トーキーなどに記録して繰り返し観察するとか、そういうようにしないと瞬間瞬間の行動というのを消えてしまいますからね、何か固定した形で研究しないと科学的でできないのではないか。

前田 フランスで基本単語を選定するときもそういうことをやったらしい。実際にあらゆる situation の記録をして、それで現実に使われるフランス語の単語はどういうのがいちばん多いかというので現実にとったらしいんです。

服部 実際に自然な行動を科学的に観察すること。それからもう 1 つは、やはりすべて習慣の原動力は頭の中にあるわけですね。それが発現するのだから、それを引き出すのに質問による方法もありますね。

それからもう 1 つ、文学作品とか、あるいは映画のシナリオとかそういうふうに固定したものを使わないと手がかりがないのではないか。

前田 ぼくは前からこんなことができやしないかと思っていたのは、外国の劇を日本語に訳して上演するのになんしても変えなくちゃいけないところを、長い経験ある人は知っているわけだから、そういうものでどこを直したという統計とするという方法が 1 つある。

それから現代ではトーキーの吹きかえの場合に、ここはどうしてもことばどおり訳せない、訳したら日本語でおかしくなっちゃうというようなところをずっと統計とって調べてみるとかね。

服部 あのトーキーの吹きかえはじょうずになりましたね、というのは日本語としても自然になった。その原文は、また英語なら英語として自然でしょう。その違いはおそらく相当大きいものがあるのでないかと思います。あれを分析したらおもしろいと思います。

國廣 それと映画の話が出たのでちょっとついでにお

話しますと、アメリカ映画を日本で上映する場合に日本語の題名をつけるわけですけれど、これは場合によって非常に食い違った表現を使わないと日本の観衆をキャッチできないという。そういう日本語の題名のつけ方にはかなりはっきりした特徴があるように思います。それも 1 つの手がかりになると思います。それと同じですけれども、アメリカの流行歌の日本語訳も同じです。

國弘 マンガなんかもそうです。いま服部先生のご発言の前半の部分でちょっと思い出したのですけれども、私がもう 2 年ほど前に外務省にいたときに、アメリカでロビー運動やっている徳山二郎さんという野村総合研究所のニューヨーク出張所長なんですけれども、彼が私に手紙よこしまして、どうも外務省が集めているアメリカの政治家とか経済人だとかの発言に関する情報というのはどうもどっか 1 本筋をたがえているというのです。その筋をたがえているのをもとに戻す 1 つの方法として、主要なアメリカの政治家とか経済人だとかが何か発言したときはそれを映画にとって、そしてただ単に彼の発言を紙にうつしたものだけを読むのではなくて、いわば彼の totality としてね。たとえばどこでどういうふうに手を振ったとか、あるいはどういう表情をしながらどういうことばをはいたとか、そういう extra linguistic なものと、それから彼の発言を紙にうつしたものとうまく関連づけて分析すればもう少し筋をたがえないですかではないかという提案があったもので、私も非常に興味をもって、だいぶあちこちに、そういう情報の集め方をしたらどうだということを提案したのです。けれども予算がないとかいう話で結局お流れになったのですけれども、何か extra linguistic なものも含めてことばというものを考えなくちゃいけないなという気がそのとき非常に強くしました。

それからもう 1 つ、私は国際的な communication の場で若干苦労してきた実務家として、今度の会議にも参加させていただいたと自分では思っているのですが、同時通訳だとか国際会議なんかに出ておりまして非常に痛感していることなんですが、やはりことばというものの社会的な機能といいますか、働きが違うし、日本とアメリカだけに限ってみても認識が非常に異なるという気がするわけなんです。どうも最近、日米の間の communication というものは非常にぎくしゃくしたものになってきた。実は私最近の例の纖維交渉なんかにもどうもアメリカ側では日本人が一体何を考えているのか、どこへ向かおうとしているのかはっきりしない。何かとにかく日米関係に非常に大きなすき間風がしおび寄ってきたという感じがたいへん強いわけです。

一体どこをどのように手をつけたらこの問題が少しは

*smooth* なものになるのかよくわからないのですけれども、とにかく、アメリカ側の日本に対する不信感、警戒心、あるいは猜疑心というものがとみに増大してきたということはまぎれもない事実ですし、そういうものをできるだけ大きな禍根とならないうちに<sup>さん</sup>芟除しておくということが日本にとっての最大の自主防衛だと思います。特に日本が経済大国になってあちこちに働く場がふえてくると、東南アジア、中国、アメリカを含めて日本に対して、一体日本は何をしようとしているのか、大国になったけれども何をしようとするのかはっきりしない。意図を articulate に表明すらしてくれない。日本信ずるに足らずということになってくれば、日本が生きていく道というの非常に狭くなってくる。そういう意味においてこういうような種類の研究というものが行なわれて、もう少し自己主張を明確に彼らにわかるような形でしていくように努力することが戦闘機や潜水艦をふやすよりも日本にとっての最大の安全保障だというような気を最近強く持っているのです。そういう意味においてもこういうような仕事は基礎的な作業としてうまくいってほしいなという実感です。

**服部** それに関連して、どうしてそういう誤解が起るかということ、いろいろ考えられますが、要するに文化的な pattern が違うからですけれども、文化的な pattern と人間性との関係ですね。それはどうかといふと、ぼくはおそらく人類学もそうだと思いますけれども、人間性は同じだが文化的 pattern が違っているのだと、そういう assumption の上に立っていますね、われわれはですからほんとうにやり方によっては、異民族どうしても、少なくとも個人対個人の間では理解し合えるのだと思うふうに考えます。

そこで、どうして誤解が起こるかといふと、早く反射的に反応するからだと思うのです。反射的に行動するといふのは、要するにわれわれは日常行動において自分の固有の文化の pattern によって行動しているわけです。それは一種の社会習慣ですね。社会習慣といふのは日本なら日本の社会に私が住んでいるから、日本人としての社会習慣によって行動していければうまくいくわけです。それで能率的に速くいくわけです。自転車でも、結局考えながらペダルをふんでいるようではだめなんで、反射的に筋肉が動くようになってはじめて自転車に乗れるようになるわけでしょう。それと同じように文化的な pattern に従って行動するのは反射的にならなければいけないし、反射的になっているからその社会でうまく生活できると思うのです。ところが反射的になればなるほどものを見きわめなくてバッと行動するわけでしょう。だから相手が自分の期待に反することをちょっとやると、真

意を見きわめないでバッと速く自分なりに解釈するから誤解がおこるので、結局お互いに同情をもって、pattern が違うんだからまああ見えるけれども実際の真意はどうなんだろうというように、速く反応しないでゆっくりとことんまで相手の真意を了解しようという努力する好意さえあれば、極端にいえばこんな研究がなくても、文化的 pattern の違いがあるのだということさえ知つていれば相手がもっとよく理解でき、いまのような民族間の誤解も少なくなるんじゃないかなと思うのですがね。

ぼくは初め、20年前にアメリカに行ったときに、両民族の言語的な pattern が、あいさつでも何でも非常に違うので驚いて、これはたいへんだなと思って、両者の間にたいへん大きな違いがあるという印象を持っていたわけですけれども、最近イーデス・ハンソンさんの書かれたものを読んでおって感じたのは、こんなことはとても英語では言えないだろうと思っているようなことが表現できるのですね、英語でも、驚いたですよ。あれを読んでいると非常に小さいような気がしてきました、両国民の差異が、自分が20年前から考えていたよりも、というのは、おそらくハンソンさんは非常に同情的に日本人や日本語を観察して、それに対応するアメリカの考え方とか表現をというふうに探してみると必ずそういうものがあるわけです。こちらのほうはうんと使うが、あちらは使い方が少ないといふぐらいの違いで、そういう表現を使えば誤解し合わなくともすむというようなことだと思いますから、結局ぼくはひどく絶望することはないんだけれども、やはり根本は互いに同情をもって相手を理解しようという1つの sympathy が非常に大切だと思います。

**中根** 私も、もちろん先生のおっしゃること同感なんですけれども、同情して sympathy をもって approach できる人といふのはパーセンテージにしたら低いと思うのですね。そうすると、それに依存するということは非常にパーセンテージが低くなっちゃうわけです。だからそういう同情をもてないような人も折衝しなければならないわけで、そういう人たちに理解させるという場合は、sympathy なしで理解しなければならないわけですね。そうするとやはり私考えるのには、日本人がアメリカ人を理解することのほうがアメリカ人が日本人を理解することよりもやさしいのではないかと思うのです。

といふのは、アメリカ人のほうがさっきも出たようにことばをたくさん使っているので、logicalな面が非常に多い。ですから感情的なものを理解するほうがむずかしいのですよね。きめ手がないから、よほど勘が発達している人でなければこれはむずかしくて、オニチの人すいぶんありますよね、感情的に、だからアメリカ人の多くが

感情的オンチとすると、こちらの状態をできるだけ scientific に分析して示す以外理解される可能性というのは非常に低いと思うのです。イーデス・ハンソンみたいな人が 50% アメリカにいれば心配ないのですけれども、織維交渉や何かの場合は、鈍感な人が多いと思うのです。

服部 いまの発言賛成です。たしかに柔軟な理解力のある人はパーセントが少なくて、かたくなな人々の方がパーセントが多いですね、何としても、実は少し悲観的になるけれども、そういう人々には、どんな研究を示しても何をしても効果があまりないような、(笑) 教育できないエレメントだと思います。極端に言えばね、やはり自覚ある指導的な人たちが特に努力する必要があるのではないか。

前田 今度、日米文化教育会議に出されて、驚いたのは、最初に過去 8 年のことの評価をする keynote speech をするよう命ぜられたことです。それでいまおっしゃったことと関係するようなことを言ったんです。

どういうことかというと、いまアメリカには 7,000 人近くの日本人留学生がいますが、フルブライト委員会が試験をやって、ちゃんと選考した人の数は百何十人なんです。それだけ大勢だからいいじゃないかという説もある。しかし深い理解をするような人を選んで、それを交換することが非常に重要だということを納得してもらうために、服部先生がいまおっしゃったように、pattern が非常に違うから心の動きがずいぶん違うので、それで誤解が生ずるということを言ったことがあります。

これは、國弘さんがおっしゃったことと通ずるのですが、このごろかえってアメリカ人が日本に不信感を持つというのはぼくの考えでは、心の動きが非常に違うのにかかわらず、目に見えるところが一緒になってきてしまったわけです。一そういけないんです。前みたいにこっちが貧乏で変なかっこうしていれば変なやつだと思いませんからね。いまでも貧乏な国の人たちを見るなら、あれは変わったやつだ、あれは貧乏だからしょうがないと思うわけです。ところが全部が同じになって、場合によってはアメリカに脅威を与えるくらいになってきた。機械だって何だって見たところは同じでしょう。それから機構も同じなんです。技術も同じ。だから全く同じと思っちゃうんです。アメリカ人は単純ですから。

第 1、アメリカ人は違った顔の色をした人が、自分の American way of living に assimilate することはあたりまえだと思っておりますからね。世界じゅうの人が行ってアメリカの pattern の中に入っていますから。だから日本だってとっくにいちばんよく入っていると思っているわけです。特に日本の実業家はいい着物を着てい

ますし、それが何か話してみると違う。これは何かだまされたと思うのです。それがために変わったやつと思わずには、同じなのにだまされたと思う。わかっているくせにやっているという。こっちは本気なんです、日本人は、それがだましていると思う。それがもとなんです。

だからどうしてもこれから、さっきおっしゃったように全部の人に理解させるのは無理だから、選ばれた人が同じに見えても違うんだぞということを明らかにすれば根本はやはり人間というものは同じなんですからね。現にこの間の会議でも 2 世の河本さんという人がちゃんと向こうの代表で来ております。ああいう人は完全に日系なのに向こうにとけ込めるわけでしょう。だから本質的・遺伝的にわれわれ違うわけじゃないんですね。

ただ、pattern の違うから来る心の動きに違いがあるので、ここが違うぞということをはっきりさせることができですね。会議でそれを別の意味で Borton さんは次のように言っておられました。

日本とアメリカはこのごろ関係が非常に緊密になってきたが、しばしば人間の世界でも緊密になるとかえっていけなくなるので、緊密になるからいいとは限らない。

例えはある老夫婦が、だんなさんがそこひで、おぼろに見えていた。ところがそこひの手術が成功してよく見えるようになった。そうしたら奥さんの顔見て、あなた、そんなに年をとったのか、と言った。(笑) だから日米もお互いによく見えるようになったら、あんなしわができると両方思っているんじゃないか。(笑) 実はそれよりもっと深刻なんですね。われわれの場合、なまじか同じだからいけないんです。目に見えるものは同じなのに中が違う。それが変な不信感を持つ。だから大問題だと思います。

國廣 それは心の動きの違いの具体的な例で、今度の会議でも問題になったんすけれども、私が日英の表現の差の 1 つとして、英語では自分というものを客観的に眺めて描写する場合が日本語に比べてうんと多いと、端的な例が、英語には再帰代名詞があるということを言ったんですけども。

それに関連することとして、アメリカ側の日本語学者からわれわれに質問が出されたわけです。心の中でひとり言を言うときに日本人は主語は何を使うか、一人称の主語に何を使うかという問題が出されてわれわれちょっと面くらったわけですが、考えてみても、主語は全然使ってないらしい。帰国してからもあっちこっちの人に聞いたのですけれども、どうも全然ないらしい。(笑) 私もそうだろうと思うのです。ただ英語のほうは一人称を使うことはもちろんすけれども、ときには二人称を使うわけですね。You を使う。そういう点はかなりもの

考え方の違いがあるということを示しているのではないかと思うのですね。

服部 あの質問2つポイントがありましたね。一人称を使うか、二人称を使うか、これはぼくは二人称は使わないような気がすぐしたんです。ところが一人称で何を使うか、「私」か「ぼく」か、それは答えられないですね。ぼくは二人称は使わないように思うのですね。

というのは、たとえばタタール語で二人称で一般とか自分を言いあらわすことがあります、英語でもありますね。それを習うときちょっと抵抗を感じました。わかるのですよ。わかるけれども、はいるのにちょっと抵抗を感じた。だから何かいまの質問はね、ひとり言を言うときにどういうかと、つまり「私はあそこへ行って、こうして、こうしてやろう」というか「おまえはあそこへ行って、それからどうしなさい」というか、どちらかということですが、あとのほうはどうもやってないのではないかという気がするのですが、どうでしょうね。（追記：ただし、自己について反省するときに「なんてお前は馬鹿なんだろう」ということもあるが、「なんてお前は馬鹿なんだろう」とひとり言を言っていることもあるようだ。）

中島 あまりそういう区別がないですね。広島の原爆記念碑に「このあやまちは再び繰り返しません」というので、アメリカ人が見るとおかしいじゃないかと。日本人が原爆を落としたんじゃないのに「このあやまちは再び繰り返しません」というのはおかしいというけれども、日本人の考えだとそこの区別がないんじゃないか。ただこういう戦争はいけない、こういうことはしませんというだけのこと、「このあやまちは…」と書いちゃっただけでしょう。ところが向こうに言わせると、だれのあやまちかということがすぐ問題になるでしょう。だから英語で言えばおかしいんですね。つまり、だれがこのあやまちを2度と繰り返さないのか。

服部 あれは一人称なんじゃないですか。

中島 ところが原爆を落としたのはアメリカ人で、日本人がそういうのはおかしい。

服部 「もう二度と原爆を落とさない」というのではなくて「もう二度と原爆を落とされるような事態を引き起こすようなことはしません」というのではないでしょか。ぼくはやはり主語は一人称だと思うのですよ。ほんとうに思っているかどうかわかりませんけれども。（笑）

中島 だって向こうは一人称か二人称かすぐ問題になるでしょう。

服部 日本語としてもそれは一人称だと思いますね。ただほんとうに自分が悪いと思っているかどうかは別問題として、そういう表現をしているのだと思います。

中島 まあ一人称でしょうね。

服部 それにしても複雑で、原爆を落とされるような事態を二度とひきおこしませんと表現しているのですけれども、一方では、皮肉の意味も皆無だとは言えませんし、他方実際に自戒もしております、いずれにしてもボヤッとしておりますね。

それからついでに申しますが、いまの対照的研究の方法について、いろいろな場面を映画にとったり録音したり、あるいはそういう会話を記録したシナリオや文学作品を資料として、そういう場面の言語行動を分析するのには必要ですけれども、言語行動の研究を、日常の会話というような基礎的レベルにばかりとどめないで、もっと高度な思考と関係するレベルにまで持って行く1つのやり方として、たとえばこういうことをやってみたらどうかということを思いついたんです。日本の最も日本的な学者——これはあるいは国文学者なんかいいかもしれません——そういう人のすぐれた論文を英訳するんですね。その英語が非常に自然な英語になるように努力する。おそらくそういう研究をするときには現存の方の論文がいいと思います。これはどういう意味でお書きになったのかと聞けますから。それを自然な英語、アメリカ人が読んでもよくわかるような英語に翻訳して、そこにどういう違いが起こるかということを調べてみたらどうか。そうすると単なる会話とか日常の言語行動じゃなくて、もっと高いレベルの言語行動の研究になるし、同時に日本のすぐれた学問的労作を英語に直すという副産物的仕事をすることにもなって、いかがなものだろうかと思つたのです。

前田 非常におもしろい経験は、フランスのシフェール氏というソルボンヌの日本文学の教授ですが、長く日本に留学していて、世阿弥のものを訳したりした人ですね。その人と話したときに、彼は何百年前の日本の文学を勉強し、ぼくは300年前の向こうのことをやっている、あなたとぼくとちょうど逆のことをやっているわけだと。ただぼくはあなたよりも仕事が比較的楽だと思うのは、フランス語は実によくきちんとしていて、辞書がいいし、時間は短いし、外国人にも学びやすいから楽だ、あなたはさぞかしたいへんでしょうといったら、彼は、ことばのむずかしいことはしかたがないけれども、いちばん苦労しているのは、日本の国文学者の書かれた論文を見てわからないと、白か黒かわからない、あることがあったのかなかかったのかわからない、私は望むらくは日本の国文学者の先生方がデカルトの方法序説を読んで下さったらよかったのにと、日本の国文学者は非常にニュアンスがあるのであるんですね。西洋人はデカルト式に分析してや

(p. 70 へつづく)

# 今日のイスラエルと聖書

SHIMIZU, Mamoru  
清水 護

今日のイスラエルは、その範囲に多少のずれはあるが、古くはカナン、新約時代にはパレスチナと呼ばれた地域である。パレスチナ (Palestina) は士師記をはじめ、旧約の歴史物語にペリシテ人と訳されている Philistines (おそらくクレテ島あたりからやって来た海洋民族であったろうと想像されている。魚神 (Dagon) を拝するところからも、そらしく思われる) からの転訛で、ダビデが討ち取った巨人は Philistines の勇将であったと見られており、この戦捷が一つの契機となってイスラエル王国の制覇がなったと考えられている。今日の民主国イスラエル第一の都は Tel Aviv (テル・アヴィヴ) ('Tel' は「岡」で「春の岡」の意味) であるが、ダビデ、ソロモンの時代には全く聞かれない名である。この旧イスラエル王朝時代の唯一の海港は Joppa であった。又新約時代にもヘロデがカイザリア (Caesarea) を建てるまでは Joppa は海陸の要衝として重んぜられていた。しかし、Joppa は海港として決して恵まれた条件を備えてはいなかったという。したがってカイザリア開港後は次第にその地理的価値を失ってわびしい姿をとどめるに過ぎなくなった。ところが最近60年間に、その北側の海岸沿いに移住者が集って新しい町を営むようになり、いつしか人口50万の近代都市への発展を見た。これが Tel Aviv で、ここがイスラエルの商工業、文化、娯楽の中心であり、その繁栄はまことに目ざましいものがある。あまり繁華なため、住む町ではないとさえ言われる。こうして Joppa は単独には見捨てられるべき運命にあるが、Tel Aviv-Jaffa とか Tel Aviv-Yafo という連接地区を含めた呼び名に名残りを止めている。

昔の Joppa、今の Jaffa を訪ねると、なるほどこれという見るべきものはないが、この名を聞いて誰しも第一に思い出すのはヨナと鯨の物語であろう。これは史実に基づいたものではないが、ヨナの逃避先が今スペインあたりの Tarshith であったことを思えば、ヨッパの港には遠洋航路の大型船が出入りしていたことと想像される（なお歴代志下20章36節なども参照）。新約時代の Joppa はペテロの伝道と関連した使徒行伝にてて来る：

In Joppa there was a disciple named Tabitha (in Greek, Dorcas, meaning a gazelle), who filled her days

with acts of kindness and charity. (New English Bible, *Acts* 9.36) (Jerusalem Bible では 'Jaffa' となっている。) ここでは省くが、このあとに続く記事にも因んで、貧しい人たちに衣料を送る奉仕団体（主に教会の婦人会などに見られる）を Dorcas Society という (Dorcas basket とか dorcastry なども参照されたい)。上の引用は N.E.B. からである (A.V. では Dorcas について margin に 'Or. Doe (雌じか), or, Roe (のろじか)' と説明がある) が、一般的の英語でも今日 Dorcas はかもしかの一種である gazelle の意味で使われるようである。ことによると使徒行伝に名をとどめている慈善家としての Dorcas は gazelle の如く目の優しい婦人であったのかも知れない。それはともかくとして、ペテロが Joppa に近い Lydda に逗留中、たまたまこの婦人が病で亡くなつたので、ペテロは急を聞いてかけつけ、奇跡を行なう。 (As Lydda was near Joppa, the disciples...sent two men to him [Peter] with the urgent request...—*Acts* 9.38) ペテロはこれより少し前にもアイネという中風病みを愈して奇跡を行ない、多くの改宗者を出したとある。ここでは地名と関係のある部分を中心に引用する：

Peter was making a general tour, in the course of which he went down to visit God's people at Lydda. There he found a man named Aeneas who had been bed-ridden with paralysis for eight years.... All who lived in Lydda and Sharon saw him; and they turned to the Lord. —N.E.B., *Acts* 9.32—33, 35)

さて、この Lydda は今日の Lod で、ここにイスラエルの国際空港がある。Tel Aviv の東南10数哩の地点にあるので、ちょうど札幌と千歳空港のような感じである。Lydda-Lod は昔から交通の要衝としての位地を保ちづけて来たように思われるが、ここで注意したいのは、Lydda と並んで記されている Sharon [ʃéərən] である。A.V. では Saron となっているが、Sharon が普通である。この名を聞くとすぐ雅歌を思いだす。A.V. でも旧約では Sharon である：

I am the rose of Sharon, and the lily of the valleys.  
(A.V., *Cant.*, 2.1)

N.E.B. は

I am an asphodel in Sharon,  
a lily growing in the valley.

とあって、聞き馴れた A.V. のリズムが乱される感がある（後半で ‘growing in’ としたのは「すずらん」をさす ‘lily of the valley’ との混同を避けたためとも思われる）。それでは Jerusalem Bible はいかにと繙いて見ると、つなぎの ‘and’ を省いただけで A.V. と全く同じ（ただし 2 行に分ける）であるので息をとりもどす。しかもこの句についてかなり詳しい注がついている。これによると、‘rose’ は実際には ‘crocus’ をさし、‘lily’ は ‘the red Palestinian anemone’ とあり、マタイ伝 6.28 を参照するように注意してある。筆者が Lod の空港に降りたのは昨年の 3 月 24 日の朝であった。直ちにエルサレムに向い、翌日ガリラヤ湖畔への旅に出たが、ガリラヤ湖畔から更に北上する時、あちらこちら沿線の緑の草原に霞のように赤い野の花が咲きこぼれていたのを思いだす。‘lily’ といえば、

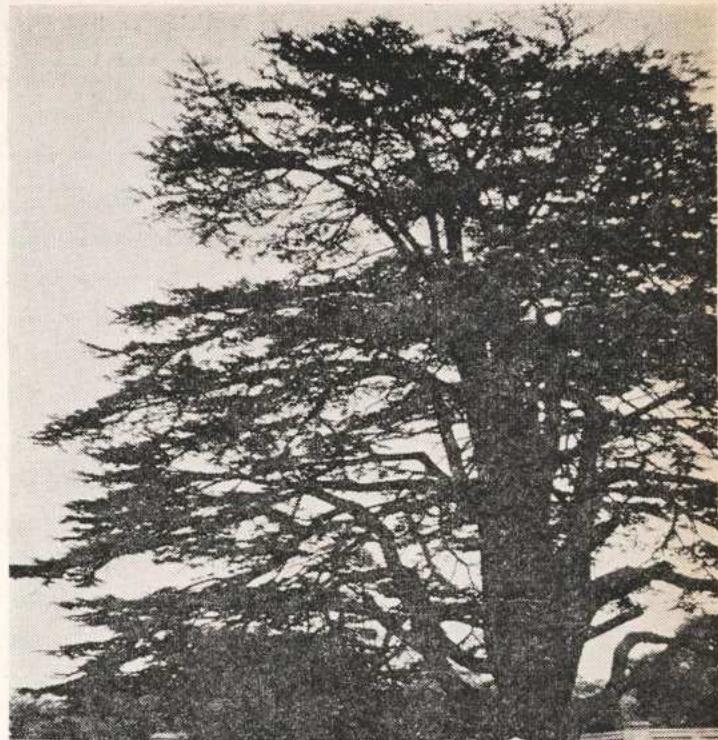
Sweet is the lilly's silver bell

—C. Smart, *A Song to David*, LXXII, l. 4

(うるわしきかな、ゆりの銀鈴)

のようすに清楚な silver-white を連想する。ソロモンの栄華にくらべるとすれば、あでやかな紅いアネモネか、ひなげしの類となるのがふさわしいようである。Sharon は「平野」の意味で、Joppaあたりから海岸沿いに北の方カルメル山 (Mt. Carmel) にいたる広い沃野をいう。カルメル山の北 Haifa から Sharon の野を縦断して、Joppaへ下る時、遺憾ながら赤い野の花は認められなかつたが、沿線一帯に果樹園が多く、殊に柑橘類の栽培が目についた。このオレンジは Jaffa と呼ばれて旺に輸出されているようである。イギリス滞在中にも小さな町の菓実店で Jaffa と印のついたオレンジをたびたび見かけた。Sharon の野だけで栽培している訳ではなく、イスラエルの北部では手広く生産しているようである。

Carmel 山は、予言者エリアの活舞台で、今日もその洞窟であったと伝えられているところを見る事ができる。この山でエリアはバアルの予言者たちと対決してついに勝ち、彼らを殲滅したといわれている（列王紀上 18 章）。その山頂から美しいハイファの港を見おろすと、豪雨襲来の前ぶれとなつた Behold, there ariseth a little cloud out of the sea, like a man's hand (列王紀上 18. 44) の句が思い出され、再び海のかなたに、手のひらほどの雨雲が現われるのではないかと、思わず目を細めたくなる。この山は樹木もよく茂っていて Sharon と並んで天恵豊かな地と見なされている。



①今は観光客の目を楽しませる Woburn Abbey (300年も Russel 家の邸宅であり、現在 “the Duke and Duchess of Bedford” の住いという) の広大な庭園中央にそそりたつレバノン杉。

直接イスラエル領内ではないが、地中海沿岸で Sharon と Carmel と並んで忘れられない名は Lebanon である。囚虜からの帰還の喜びを歌ったと思われるイザヤ書 35.2 に

It [the desert] shall blossom abundantly, and rejoice even with joy and singing; *the glory of Lebanon* shall be given unto it, the excellency of Carmel and Sharon. (R.V.)

とある。ここに、カルメルとシャロンの美しさとともに与えられるであろうというレバノンの榮とは何であろうか。Jerusalem Bible も *the glory of Lebanon* で、イザヤ書 60.13 に繰り返えされている同じ句に対して Jerusalem Bible は ‘The cedars’ と注をしている。事実 the cedars of Lebanon はしばしば旧約で繰り返えされている句で、とくにソロモンの神殿造営との関連が密である。ソロモン王はツロ (Tyre) の王ヒラム (Hiram) に親書を送って神殿用の木材を提供してくれるよう懇請した。これをヒラム王が快諾した模様は列王紀上 5 章に詳しい。

And he [Hiram] sent this reply to Solomon: 'I have received your message. In this matter of timber, both

cedar and pine, I will do all you wish. My men shall bring down the logs from Lebanon to the sea and I will make them up into rafts to be floated to the place you appoint. (NEB. 5.8—9)

レバノンから伐り出した材木を海から指定の場所へ送るというのは Joppa の港をいうのであろうとは誰しも考えるところであるが、このことは歴代志下 2.16 にはっきり書いてある：

We will fell all the timber in Lebanon that you need and float it as rafts to the roadstead at Joppa, and you will convey it from there up to Jerusalem. (NEB)  
ヒマラヤ杉は均齊のとれた枝を四方に垂れて悠然王者の如き落ち付きを感じるが、レバノン杉は、こみいった枝が鋭く上に向ってはねている感じで、どことなくきびしさが感ぜられる。この木は、イギリスの大きな庭園で折々見かけたが、枝ぶりから一目でそれと判るほど印象的である。千年の樹齢を誇るこういう巨木が何千、何万と生い茂っていたレバノンの山容はどんなに見事であったであろうか。香柏の名のごとく、その材質には檜のように芳香があって虫がつかないため建材として愛用されるから、おそらく濫伐されたのであろう、今日レバノン山には残念ながら、ごくわずか残っているにすぎないという。ワーズワースはこのレバノンの香柏に強い関心を持っていたらしい。たびたびその詩にこの名が出てくるので一例をひく。

The dew, the storm—

The dew whose moisture fell in gentle drops  
On the small hyssop destined to become  
By Hebrew ordinance devoutly kept,

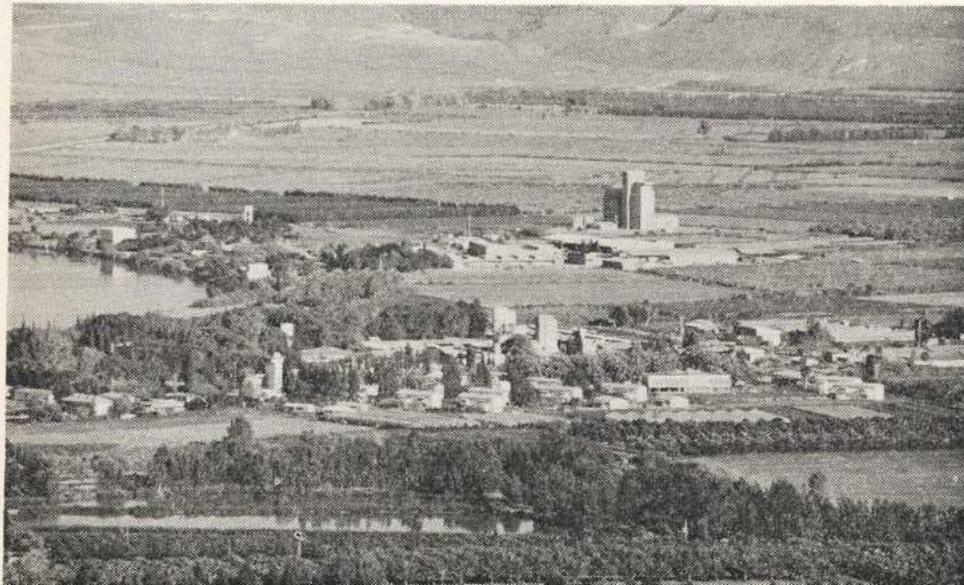
A purifying instrument—the storm  
That shook on Lebanon the cedar's top.  
And as it shook, enabling the blind roots  
Further to force their way, endowed its trunk  
With magnitude and strength fit to uphold  
The glorious temple—did alike proceed  
From the same gracious will, were both an offspring  
Of bounty infinite.

—*Memorials of a Tour in Italy*, 133—44

ここにヒソップのことが出るが、これについてはソロモンの博識に関して列王紀上 4.33 に「彼はまた草木のことを論じてレバノンの香柏から、石垣にはえるヒソップにまで及んだ」(A.V. のこの部分は And he spake of trees, from the cedar tree that is in Lebanon even unto the hyssop that springeth out of the wall) とあるのが参考になる。ワーズワースの詩は、ヒソップは石垣に生えるようなごくささやかな草であるが、ヘブライ人によって宗教儀式に用いられたためついに清めの器となった。このヒソップの上に静かにおりてこれをうるおす露のしづくも、レバノンの山で香柏をゆるがしながら根を地中に深く深くはらせ、幹を強く太く肥らせて、あの壯麗な神殿を支え得るまでに育てる嶺の嵐、この何れもひとしく同じ恵みの賜であるという意味で、旧約を背景にしたイメージとして不自然はない。さらにワーズワースは *The Excursion* で専横な王権 (the thrones) は

Are still permitted to extent their pride,  
Like cedars on the top of Lebanon  
Darkening the sun.

—*The Churchyard among the Mountains*, 845—7



②ガリラヤ湖の南端を含めてヨルダン河谷に展開する Degania のキップの一部。(200 ミリレンズで)

即ち、尚驕奢をほしいままにするさま、レバノン山頂の香柏が天日を蓋うがごとしという比喩を用いているのは、事実とは多少違うようである。山頂には大木はない。しかし詩的比喩としてはこのままの方が迫力に富むであろう。12年前の10月はじめ筆者は Beirut に、2泊した際ホテルの窓から紺碧の海をへだててレバノン山脈を眺めた。中心のレバノン山頂は一面雪に蔽われているようにも思えたが、やや濁った白色であったからおそらく Parnassus の山頂のように limestone (石灰石) の岩肌であったろうと思う。もちろん冬期には雪をいたたくであろうが、このシリアの名山 Lebanon は 'white' の意味であるから、何れにしても「白山」、Mont Blanc であり、その名にそむかないものがある。

レバノンと並び称されるのはヘルモンである。レバノン山の東に当るが、広い意味でレバノン山脈群の一部に含められる。それはともかく、一見西のレバノンと対峙しているようであるが、この山は今回の旅行でガリラヤ湖畔から北上する時、澄み切った空にその雪の嶺を仰ぐことができて、感激したことを思いだす。まさに snow white で、むしろ遠望の方が輝いて見えた。近づくにつれて山頂は霧がかかったようにかすんで来た。ヘルモンは露の多いことで有名で、夏の朝など雨とまごうほどじっとりと露が降りるという。「はらから相睦みて共にをる」その楽しく美しい姿を A.V. では mountains が hills にかわって

As the dew of Hermon, and as the dew that descended upon the mountains of Zion (Ps. 133.3) にたとえている。N.E.B. では mountains が hills にかわって  
It is like the dew of Hermon falling  
upon the hills of Zion.

(邦訳「ヘルモンの露くだりてシオンの岡にながるるがごとし」)

と簡潔になっているが、地理的矛盾を越えてヘルモンの露が詩人の注意をひいたためであろう。レバノンの香柏とヘルモンの露とは詩的な対照である。ヘルモンの名で思い出されるのは C.スマートの *A Song to David* の一節 (LXXII) である。

Sweet is the dew that falls betimes,  
And drops upon the leafy limes;  
Sweet Hermon's fragrant air.

(朝まだき、しなのきの葉末におく露、いと美はし。

ヘルモンの香ぐわしきいぶき、いとさやけし)

すでにその一例は見たが、A.V. で mountain となっているところは N.E.B. では多く hill と改められている。イスラエルの山野の起伏は、「山」即ち mountain と呼ぶものよりも「岡」即ち hill と呼びたい丘陵と谷である。

今のシオンの岡もその一つで、今でこそエルサレムの城壁外の南西の一隅をいっているが、聖都全体を指しているらしい処もあり、はっきりしないという。しかしこを指すにしても Zion は岡と呼ぶべきで、エルサレムは一イスラエル全体がそういう感じであるが多くの岡に囲まれている。この気持をよく表わしているのは Ps. 125.2 (N.E.B.) であろう

As the hills enfold Jerusalem

So the LORD enfolds his people, now and evermore  
(エルサレムを岡のかこめるごとく、エホバも今より  
とこしへにその民をかこみたまはん)

森羅万象を宗教的目的で見、神の全能を歌うのは詩篇の特色であるが、ここで思い出されるのは

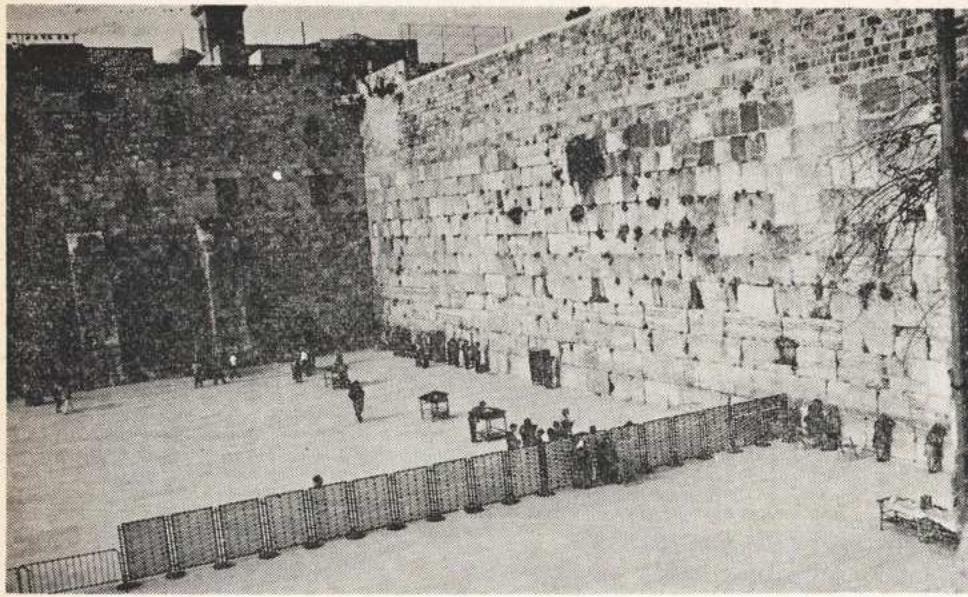
For every beast of the forest is mine, and the cattle upon a thousand hills. (A.V., Ps. 50.10)

である。後半の句は Wales の山谷を旅行した時、行けども行けども岡あり谷あり、その間に羊や牛の群がのびやかに放牧されているのを見て、ワーズワースの句ではなかったかとさえ思ったほどであるが、イスラエルはまさに a thousand hills の国である。この部分は N.E.B. では and the cattle in thousands on my hills と改められているところを見ると、どうやら A.V. は誤訳か、少なくとも正確な訳ではないらしい。しかし訳文の適否とは別に、a country of a thousand hills はよくイスラエルを表わしているといえる。

一つの岡の頂に登れば谷をへだてて向うの岡が手に取るように眺められる。ヘロデが、オーガスタス帝に獻げる神殿を建てた Sebastia (昔の Samaria) はその最なるもので、その頂からは四方の谷が一望のうちにおさめられる。北朝イスラエルの覇権はこうして確保されたのであろうと想像される。岡の上からの眺めで忘れられないのは、モーセがヨルダン河を越えて約束の地を踏むことを願ったが許されず、Pisgah (おそらく死海北端の東にある岡の崖であろうと推定される) の嶺から四方を眺めるだけで満足せよと斥けられたという話である。この Pisgah view は先達の悲しい運命を物語るもので、何故これまで努力して來た民族の指導者が最後の喜びを味わうことを峻拒されたか、今日の我々には理解に苦しむのである。容れられなかつたモーセの願い (申命記 3.25) を同情をもって味わって見よう。

I pray thee, let me go over, and see the good land that is beyond Jordan, that goodly mountain, and Lebanon. (A.V.)

Let me cross over and see that rich land which lies beyond the Jordan, and the fine hill-country and the Lebanon. (N.E.B.)



③いわゆる「歎きの壁」  
男女は広場中央の衝立  
で入る場所を区別され  
ている。大小のヒソブ  
の房に注意されたい。  
(35ミリレンズで)

これで見るとカナンは hill-country であり、レバノンはその象徴のような感じを受けるが、豊沃な平野は西北に Sharon の野があることはすでに述べた。今 Pisgah を下り、ヨルダン河をさかのぼってガリラヤ湖畔に近づくと、河谷に緑豊かな平野が展開する。ここは Degania と呼ばれて早くからキブツが発達したところであるという。集団農場とか集団社会とか訳されているキブツ (kibbutz, 複数は kibbutzim. ヘブル語で単に「集合」「集団」の意) は方々に見られるが、ヨルダン河谷のこのキブツ部落は最もめざましい発展ぶりを示しているという。西側の小高いところに立って眺めると、整然たる農園、養魚池、その間に点在する工場、住宅、施設等が、したたるばかりの緑に包まれて展開している情景は絶景で、社会生活のあり方に一新機軸を開いたものということができる。今ここではその起源、特色、今後の問題等に立入って考えることは避けるが、近年、日本人も多数このキブツ研究に出かけて行っているので、ある程度関心をひくことであろうが、私有財産も家族主義も否定し、男女同権、性の解放をうたい、社会主義的無神論に立つ労働至上主義者が育つ傾向のあるこの新しい社会生活のあり方は、イスラエルにとって多くの問題をはらんでいるようである。しかし、このキブツの人たちは農兵の形で国防の第一線に立っているといえる。筆者たちが訪ねた頃も、ガリラヤ湖の東を南北に走っているゴーラン (Golan) 高地からは、今尚ヨルダン側からゲリラの銃撃が時折あると聞かされた。

ガリラヤ湖はキネレット湖ともいう。キネレットは「琴」の意であるというから、この湖はさしあたり「琵

琶湖」にあたる。鏡のような湖面の静けさに、周囲を取巻くアラブ諸国と、再建されたイスラエルとの関係をつい忘れるのであったが、エルサレムに戻って例の「歎きの壁」を訪ね、これに向って今も尚日夜祈る男女の姿を見た時、数千年にわたるイスラエルの歴史の縮図を見る感があった。第二神殿と呼ばれるエルサレムの宮は A.D. 70年にローマ兵のために破壊され、今日ではその至聖所があったと思われる内庭の西側の壁のみが残っているという。この唯一の遺跡がこの高い石垣である（写真第三参照）。しかもこの石垣の中央あたりの隙間からヒソブが房を垂れているのを見た時、ソロモンの栄華と、ソロモンの智恵に関する聖書の記事を思い出し、何となく旧約の世界を身近かに感じるのであった。なお昨年10月上旬に帰国して間もなく、この「歎きの壁」——今は「祈りの壁」というべきであろう——もゲリラの銃撃を浴びたという知らせを聞いた。ユダヤ人は長い間離散・流離の悲運にあり乍ら、約束の地への帰還という夢を捨てず、あくまでこれを実現しようと努力して来た驚くべき忍耐強い民族である。彼等は「主に贖い救われし者は、歌うたい一つ、シオンに帰りきたらん」(イザヤ書 35.10 参照) という予言を忘れなかった。1948年5月の独立宣言によって故国再建の夢は実現されたのであるが、四面虎視眈々として侵攻の機を狙うアラブに囲まれている情勢を思うとき、実現したと思われる予言は、いつまた未来への予言として遠のく日が来ないとも限らない。たとえそうあっても彼等はこの夢を決して捨てないであろう。

（国際基督教大学教授・ELEC理事）

## Objective Complement の種類

(2)

NAKAJIMA, Fumio  
中島文雄

前回においては、

- (1) They elected Nixon president.
- (2) He painted the house green.
- (3) I helped John (to) carry the box upstairs.
- (4) I persuaded John to consult a doctor.

のような文型を分析し、これらの文の deep structure においては、VP Complement として  $S_0 \rightarrow NP VP$  が埋めこまれていることを明らかにした。そして(1)(2)のように surface structure で名詞・形容詞を Objective Complement とする動詞を作為動詞 (factitive verb), (3)(4)のように不定詞をとるものを使役動詞 (causative verb) とよんだ。こんど問題になるのは、

- (5) I saw the boy cross the bridge.
- (6) I heard the captain giving orders.

などに見られる感覚動詞 (verb of physical perception) である。ここでも深層構造には S が埋めこまれているが、その S の性質や埋めこまれる位置は、既述の場合と同一ではない。既述の埋めこみ文は  $NP VP$  からなる  $S_0$  という表象を意味するにすぎなかったが、感覚動詞の場合には、感覚の対象になっている事実があるので、これは  $S_0$  ではなくて正規の S、すなわち  $NP Aux VP$  からなる S である。それからこの S が埋めこまれる位置であるが、それは作為動詞や使役動詞の場合のような VP の補文という位置ではなくて、感覚動詞の直接目的になっている NP の内部であると考えられる。前者の場合は

$$VP \rightarrow V NP S_0$$

であったが、感覚動詞の場合は、

$$VP \rightarrow V NP$$

$$NP \rightarrow NP S$$

と解される。NP が S によって拡充されるのである。具体的にいうと(5)の文は、

I saw [[the boy]<sub>NP</sub> [the boy crossed the bridge]<sub>S</sub>]<sub>NP</sub> のように分析されるということである。

この分析に対し see の目的は the boy crossed the bridge という S であって、その前にある the boy という NP は、重複するから不要ではないかという疑問が出されるかも知れない。しかし英語の感覚動詞は、直接に文を目的とするときは、すなわち直接に that-clause を目

的とするときは、後の(90)(91)(92)の例に見られるように、感覚動詞ではなくなるので、どうしても I saw the boy を認め、そのあとに that-clause が付加されていると見なければならない。事実そういう言い方が古い英語には見られる。たとえば英訳聖書 AV の John xi. 31 を見ると、

When they saw Mary, that she rose up hastily and went out, .....

とあり、これが RSV では

When the Jews...saw Mary rise quickly and go out.  
.....

となっている。後者は(5)の例文と全く同型である。そしてわれわれが埋めこみ文と考えるものが、AV では that-clause として現われている。そこでは Mary も that-clause もともに saw の目的である。これが  $NP \rightarrow NP S$  なる基底構造から派生したとする解釈は承認されるであろう。

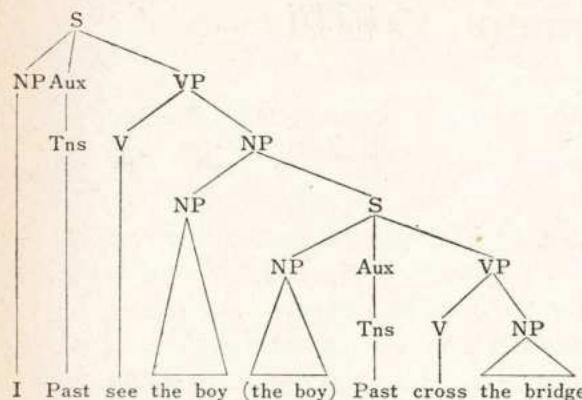
上の AV の表面構造は、この埋めこみ文の S に that なる Complementizer をつけてこれを補文にしたものである。しかしこういう形は現在の英語では用いられない。そこで(5)の文が生み出されるには変形操作が行なわれなければならない。問題の規則

$$NP \rightarrow NP S$$

は、NP が同じ NP を含む S によって拡充されることを意味している。従ってこの S に含まれる同一の NP を関係代名詞に変えることによって、この S を関係節にすることができる。この規則は relativization transformation のものとなるものである。(私は関係節に restrictive と descriptive と continuative の三種類を区別する必要があると考えるが、この議論は他日にゆずる。上の規則は descriptive relative clause の構造を説明するものである。)

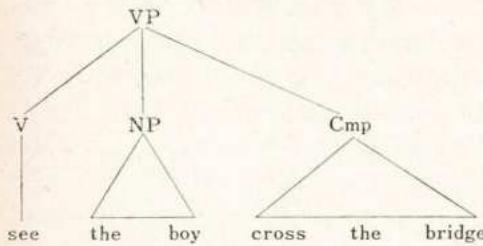
そこで(5)の深層構造を図解すると、[1 図] のようになる。—この基底構造における埋めこみ文が relativize されれば who crossed the bridge なる関係節ができるが、(5)の文は I saw the boy who crossed the bridge とは、やや意味をことにする。そのちがいは、埋めこみ文が relativization transformation をうけるのではなく、図

[1 図]



の cross the bridge が、主文の VP の Complement の位置に移され、Objective Complement の機能をはたすようになったからと説明される。すなわち cross the bridge の extraposition transformation によって

[2 図]



となり、これが表面構造をなしている。もっと厳密にいって Cmp には(4)の場合と同じように Complementizer の to がつくはずであるが、\*see the boy to cross the bridge は非文法的で、感覚動詞の場合は、かならず to を消去するという規則を立てなければならない。その結果(5)の文ができると解釈すべきである。ただしこの to は受動文においては消去されない。

(68) The boy was seen *to* cross the bridge.

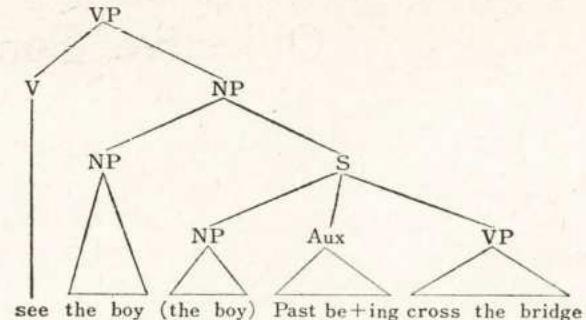
能動文にせよ受動文にせよ、そこには the boy crossed the bridge という事実が表わされているので、その点が表面では同じ Objective Complement であっても(4)とちがうし、そのちがいが深層構造で説明されるのである。

(5) I saw the boy cross the bridge.

(69) I saw the boy crossing the bridge.

この二文を比較してみると、(5)では橋を渡ったことが意味されており、(69)ではまだ渡っている最中であることが意味されている。構造は同じように説明されるが、念のため(69)の VP を図解すると、

[3 図]



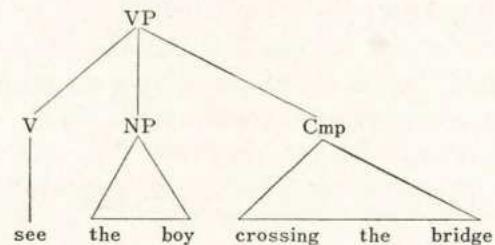
となる。これが(5)の場合と同じように、be crossing the bridge が Cmp の位置に移され、to be crossing the bridge となり、それから to be deletion という変形をうけて(69)ができたと説明される。この to be は受動文にも現われないようである。すなわち(69)の受動文は

(70) The boy was seen crossing the bridge.

となる。

(69)の文は、厳密にいってあいまいである。というのは、この文は(a)「子供が橋を渡っているのを見た」とも(b)「橋を渡っている子供を見た」とも取れるからである。どちらにしても実質的な意味にたいしたちがないが、二様の意味にとれるというのは、やはり文法上差別があるからである。(a)の場合、すでに説明した通りで、その表面構造は

[4 図] (a)



である。これに対し(b)の場合は、もとの埋めこみ文がまず relativize されて

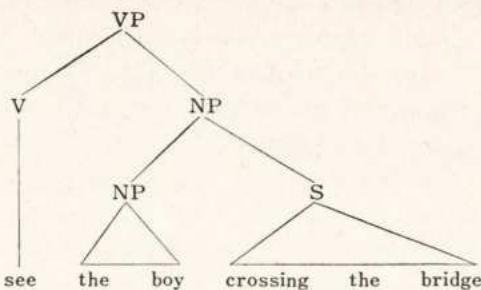
the boy who was crossing the bridge

と変形され、次に relative clause reduction という変形によって who was が消去され

the boy crossing the bridge

ができたのである。この場合 crossing the bridge は the boy の修飾句になっており、この修飾句は依然 NP に支配されているのである。すなわち(b)の表面構造は、

〔5 図〕(b)



となる。同じ crossing the bridge でも(a)では Objective Complement, (b) では Modifier の機能をはたしているのである。

感覚動詞としては *see* のほかに *hear, feel, smell* などがある (*taste* は文法的には同型でない)。いずれも上に述べた *see* の場合と同じように説明される。

I heard the bell.

I heard the bell ring.

I heard the bell ringing.

みな文法的である。人を直接目的にして

Do you hear me? (私の言うことが聞えるか。)

Let's hear him. (彼の話を聞こう。)

のようにも言える。それから

(71) The door was heard to open.

は(68)と同じく、

(6) I heard the captain giving orders.

は(69)と同じように説明される。その他の感覚動詞の用例には、

(72) I felt my heart beating wildly.

(73) I smell something burning in the kitchen.

(74) I watched the boy jump.

(75) Look at them dance.

(76) I don't like to listen to other people talk

などがあげられる。(75)(76)の *look at, listen to* は *see* や *hear* と同じように用いられている。(73)(74)の *smell* や *watch* の受動形は見かけないようである\*。なお *see* と *watch* は Objective Complement のところに過去分詞をとることがあるが、これは受動形の *be + p.p.* の *be* が消去されたものであるから、現在分詞が Objective Complement になる(69)の場合と、同じに説明される。例は

(77) I saw the letter burnt.

(78) He watched his team beaten.

この(78)と

(79) He watched his team being beaten.

とのちがいは、(5)と(69)のちがいと同じである。

感覚動詞ではないが、これと関連して考えられる他動詞に次のようなものがある。前回にあげた

(7) They caught the tiger alive.

(8) I cannot leave you lying in sickbed.

(9) We Japanese eat fish raw.

のほかに、

(80) I caught the boys stealing flowers.

(81) You have left the door open.

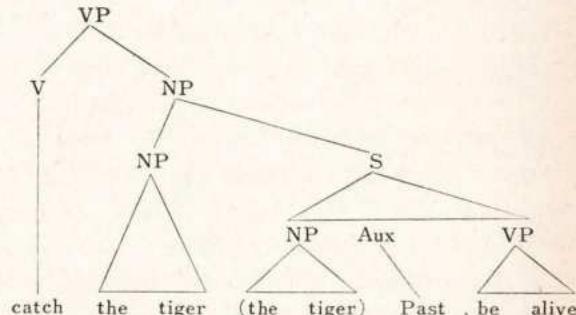
(82) Better leave it unsaid.

(83) He drinks his coffee black.

(83) You must serve the fish hot.

などが同型である。ここに用いられている *catch, leave, eat, drink, serve* などの他動詞は、感覚動詞と同じように具体的なものを対象とする、身体的な活動 (physical activity) を意味している。ただし *leave* は積極的な活動を意味しないが、否定的に活動を意味しているので、文法上も同型の動詞として扱われている。そして上記の例文は、いずれもその対象がある状態か動作中にあることを表わしているので、Objective Complement は形容詞 (または過去分詞) か現在分詞である。これらの深層構造は感覚動詞と同じように目的として NP→NP S をとする。(7) の VP は、

〔6 図〕



であって、ここには the tiger was alive が埋めこまれており、(8)の文には you are lying in sickbed が埋めこまれている。ただし同じ *leave* でも

Let's leave him to do it himself.

においては使役性が含まれているので *to-* 不定詞を伴なっている。すなはち既述の *cause* (48) や *allow* (45) と同型になっているので、消極的な意味ではあるが使役動詞で、今の場合の *leave* とは用法をことにする。

上に(69)の受動文(70)には *to be* が現われないと述べたが、同様に以下の受動文にも *to be* は用いられない

\* F.R. Palmer: *A Linguistic Study of the English Verb*, p. 171

- (85) The tiger was caught alive.  
 (86) The boys were caught stealing flowers.  
 (87) The door was left open.  
 (88) He must not be left lying in sickbed.  
 (89) The fish must be served hot.

感覚動詞およびこれに類する動詞の用いられる文型は以上のようなものであるが、感覚動詞は下に示すように *that-clause* をとることがある。このときの動詞はもはや感覚 (physical perception) ではなく心的知覚 (mental perception) を意味している。

- (90) We saw that the plan was unwise.  
 (91) I have heard that he is a miser.  
 (92) We feel that he should retire.

ここに *that-clause* が現われるのは、これらの動詞が物的なものを対象とする感覚動詞でなく、心的な事象を対象とする知覚動詞になっているからである。これらの動詞句の構造は

$$VP \rightarrow V NP$$

$$NP \rightarrow it S$$

と規則化できる。この *it* は preparatory *it* で、次の *S* はこれと同格である。そしてこの *S* は *that* で nominalize され、*it* と *that-clause* が相接しているときは、*it* が消去されるという規則が立てられる。この *that* を *S* の Nominalizer とよんでおく。

感覚動詞から知覚動詞への推移は微妙である。上に *see* の用法を扱ったとき Objective Complement に形容詞をとる場合をあげなかつたが、次のような例においては *see = perceive by visual tokens* (*OED see B. 4*) といふことで、感覚動詞と知覚動詞と両方をかねているようと思われる。

- (93) I saw him young and strong.

すなわち、ここには I saw him と I saw that he was young and strong. と両方の意味があると解される。Hornby\* が

- (94) I hope I see you well.

という文を *V × (Pro)noun × Adjective* 型の例としてあげ、その注で

This means: 'I hope you are well (now, when I see you)'

といつてゐるが、上の見方と一致するものであろう。(91)の *hear* も

I have heard someone say *that* … または

I have heard *it* said *that* …

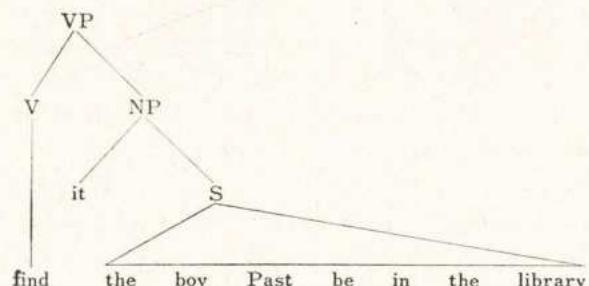
から推移したと考えられるから、*see* の場合と同様に感覚と知覚と両方を意味している。

\* A Guide to Patterns and Usage in English, p. 33

感覚動詞と知覚動詞と両方に用いられる語としては、ほかに *find, discover, notice* などがある。

- (95) I found the boy reading in the library.  
 (96) I found that the boy was in the library.  
 (95) は感覚動詞、(96) は知覚動詞としての *find* の用法である。後者の深層構造は、

[7 図]



この埋めこみ文が *that* によって nominalize され、*it* が消去されて(96)の文ができると説明される。私は意味の上からいって、知覚動詞の目的になるものは、基底においては *that-clause* であると考えるが、この *that-clause* がしばしば変形をうけて、

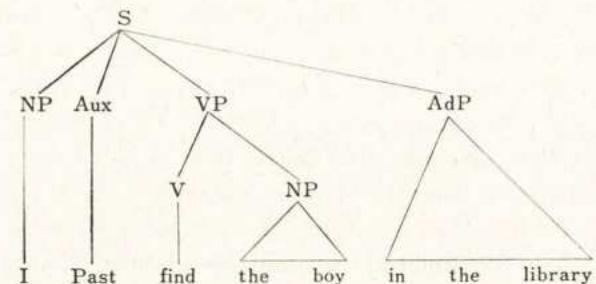
- (97) I found the boy to be in the library.  
 のような形で現われることが多い。それは上図の埋めこみ文の the boy が *it replacement* という変形によって *find* の直接目的の位置に移り、それから Aux (Past) が Complementizer *to* によって置換され、それで(97)ができると説明される。この表面構造においては to be in the library が Objective Complement ということになる。(97)はさらに *to be deletion* という変形をうけて

- (98) I found the boy in the library.

ともなる。

(98) は「子供が図書館にいるのに気がついた」を意味すると同時に、「図書館で子供を見つけた」という意味にもなる。この文だけを取出してみると、どちらの意味にもなるので(98)は ambiguous である。(79)のように *to be* があれば、知覚動詞であることが判然とする。そ

[8 図]



の際の深層構造は〔7図〕に示した通りであるが、(98)が感覚動詞の *find* であるとすると、この *in the library* は埋め込み文のなかではなく、主文のなかの構成素であるから、

$$S \rightarrow NP \text{ Aux } VP \text{ AdP}$$

の *AbP* (Adverbial Phrase) の位置にくる。すなわち〔8図〕で示す構造で、自分も図書館にいるのである。

(97) の類例をあげると

(99) I found my friend to be a puzzling character.

(100) I have always found him to be reliable.

どちらも *to be* deletion が可能である。知覚動詞で *to be* を消すと (98) のように意味があいまいになるものもあるが、次の諸例は意味の上からいって知覚動詞であることがわかるから、あいまいではない。

(101) I found the girl absent.

I found the paper missing

前回の最初にあげた例文のうち、

(12) I found my wallet stolen.

(13) He found his wife not at home.

も同類である。これらの *find* のかわりに *discover* も用いられるが、これも本来は感覚動詞であるが、知覚動詞に推移したのである。

(14) He felt the plan to be unwise.

が He felt that the plan was unwise. からの変形であることは言うまでもない。

意味のあいまいな例として

(102) I found the door locked.

があるが、これを受動文にして

(103) The door was found locked. (a)

The door was found to be locked. (b)

(a) なら感覚動詞、(b) なら知覚動詞といふことができる。実質的にはその差は問題にならないであろう。多くの場合受動文では *to be* は略されない。

(104) He was discovered to be unreliable.

(105) Water is found to be a compound substance.

しかし

(106) He was found (to be) guilty.

は *to be* がなくても知覚動詞であることは、意味の上からわかる。

感覚動詞と知覚動詞をかねるものとしては、ほかに *notice* がある。

(107) I noticed her hesitate.

(108) I noticed her hand shaking.

(109) I didn't notice my purse missing till I got home.

前の二文が感覚動詞、(109) が知覚動詞としての *notice*

である。

前回にあげた例文で、まだ残っているのは、

(10) I think him honest.

(11) I believe him to be a brave man.

(15) I want you to go.

このうち(10)の *think*、(11)の *believe* は *suppose*, *expect*, *hope* などとともに思考動詞 (verb of thinking) として一括することができる。これも知覚動詞と同じように *that-clause* をとるのが本来であると考えられる。それが *it replacement* や complementization の変形をうけて(11)ができる、さらに *to be* deletion によって(10)ができたと説明される。

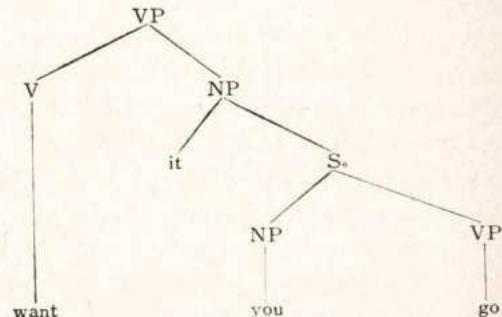
(15)の *want* は *like*, *prefer*, *hate* などとともに情意動詞 (verb of feeling and volition) として一括することができるが、その深層構造は思考動詞とはちがう。それは

$$VP \rightarrow V NP$$

$$NP \rightarrow it S_0$$

で表わされるが、思考動詞とのちがいは、埋め込み文が *S<sub>0</sub>* である点にある。そして思考動詞の場合は Nominalizer が *that* であったが、今度は *S<sub>0</sub>* → *NP VP* を名詞化するので、Nominalizer は *for-to* である。(15)の動詞句は

〔9図〕



*S<sub>0</sub>* が *for-to* によって名詞化されて *for you to go* となり、*it* が義務的に消去されて *want for you to go* となる。このままでも文法的であるが(15)のように *for* の消された言い方が多い。それは *you* による *it replacement* がおこり、ために *for* が消され、表面構造では *to go* が Objective Complement の位置をとることになったと説明されよう。しかし意味上は、思考動詞の(11)の場合と同様に、*want* や *believe* の目的は *you* や *him* だけでなく、*you to go* や *him to be a brave man* ということがらなのであるから、Jespersen が名づけたように、この全体を *nexus object* とよぶことは意味のあることである。

(11)と(15)とは表面構造は類似しているが、深層構造のちがうことは上述の通りである。これに対して(11)も(15)と同じように解釈できないか、思考動詞も情意動詞と同じように  $NP \rightarrow it S_0$  として説明できないかという疑問がおこるかも知れない。この疑問に答えるために(11)を *that-clause* の文にもどし、

I believe that he is a brave man.

とし、この *he* を *I* に変えてみる。すると

(11)' I believe that I am a brave man.

となる。この文が(11)と同じ変形をうけると

I believe myself to be a brave man.

ができる。埋めこみ文の *I* が *it replacement* によって *believe* の直接目的となり、ために reflexivization をうけて *myself* となったと規則的に説明できる。これに反して(15)の *you* を *I* に変えると

\* I want myself to go.

とはならずには

I want to go.

となる。これは [for I to go] 内の主語が主文の *NP* と同一の場合には、*identical NP deletion* という変形規則により消去されてしまうからである。それでもし(11)'の文が情意動詞のように、

I believe [for I to be a brave man]

からできたとすると、あとの *I* は消されてしまい、非文法的な

\* I believe to be a brave man.

ができてしまう。それ故に(11)と(15)とは深層構造をことにすると言わなければならない。(11)は(15)のように埋めこみ文が  $S_0$  であるとする事はできないのである。

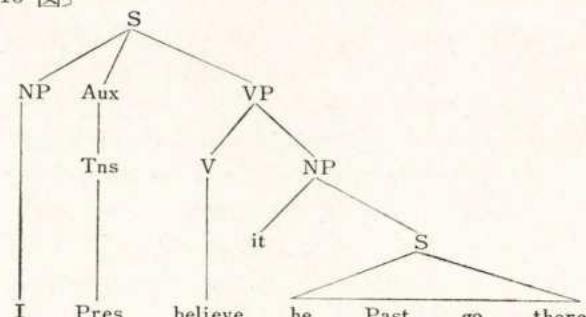
さらにこのちがいを確認させるものとして、埋めこみ文の時制の問題がある。たとえば

(a) I believe that he went there.

(b) I believe him to have gone there.

の二文を比較すると、(b)は *to have gone* という完了形の不定詞をもっている。これが出てきた経路は、次の深層構造によって説明される。

[10 図]



この埋めこみ文が *that-clause* に変形されれば(a)ができる。(b)ができるには *he* による *it replacement* と、埋めこみ文の *Past* を *to have+en* にする変形とが行なわれなければならない。主文の *Tns* が *Pres* で埋めこみ文の *Tns* が *Past* のときは、Complementizer がただの *to* でなく *to have+en* となるという規則が立たれる。この規則によって(b)の説明ができるが、(a)が

I believe that he has gone there.

のときも(b)は同じく

I believe him to have gone there.

となる。すなわち、埋めこみ文が *that-clause* になるものなら、過去と現在完了の区別ができるが、埋めこみ文が  $S_0$  であれば両者の区別ができないという不都合がおこる。この点から見ても思考動詞は *that-clause* をとるのが本来であると主張される。

思考動詞、情意動詞、 $NP \rightarrow NP S$ 、 $NP \rightarrow it S$  などについてはなお考えるべきことが多い。順次取上げて行きたいと思う。

(津田塾大学教授・ELEC 理事)

## ELEC 発行 英語発音教材

### ESSENTIAL ENGLISH PRONUNCIATION DRILLS

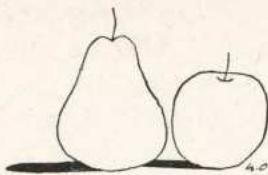
英語教育協議会著	A5判	¥ 300
オープン 全2巻	各巻	¥ 1,500
カセット 全2巻	セット	¥ 3,000

日本人にとって最も習得困難とされる基礎的英語音の集中的 drill を目的とするもので、大学における発音教材として、また英語科教員の自己研修のための教材として最適である。録音テープには Aural Comprehension と Aural Perception のテストが収録されている。

### オーラル・アプローチ教本 1, 2

Archibald A. Hill 著	A5判	各巻 ¥ 790
オープン (1)―全2巻、(2)―全1巻	各巻	¥ 1,300

英語の話し方・理解の仕方を反復練習するための教材。第1巻は発音を、第2巻は文型・文法・綴字等を組織的に扱っている。



# Mother Goose の世界

— 雜感的序説(その4) —

HIRANO, Keiichi  
平野敬一

## 現代のフォークロア

いったい、フォークロア (folklore) とはなんだろう。どう訳したらいいのだろうか。訳語としては「民間伝承」、「民俗」、あるいは「俗信」などといろいろあるようだが、いずれも「帶に短し櫻に長し」という感じで、あるいはそのまま「フォークロア」で通したほうがいいのではないか、という気がする。定義としては、フォークロアは、ある民族の、庶民（あるいは常民）レベルにおいて（おおむね口頭で）伝承されてきた知的共有財産をさす、というふうに一応いえるかと思う。わたくしたちが今まで問題にしてきた童謡はもちろんこの中にはいるが、そのほか民話や民謡、さらに迷信、民間療法、格言など庶民のいわゆる「生活の知恵」を形成するさまざまのものが含まれるはずである。こういうものの総体が伝承されるわけだが、その伝承は、固定したままの形で行なわれるのではなく、伝承される総体は、たえず流動し、新しいものが加わっては、古いものが脱落してゆく、という一面のあることを忘れてはならないよう思う。したがってたとえば19世紀と20世紀とでは、また同じ英語圏といつてもイギリスとアメリカとでは、フォークロアの性格が、たとえ大もとで同一であっても、かなり違ってくるのが、自然のなりゆきであるように思われる。とうぜん、現代アメリカのフォークロアというものが存在していくはず、ということになる。

たとえば漫画家 Al Capp 描くところの L'il Abner を、わたくしは、現代アメリカの典型的なフォークロアの hero、ひょっとしたら最重要人物のひとりでないか、とかねがね思ってきたし、Walt Kelly の Pogo も、それといい勝負だと思っている。だから、現代アメリカに關し、L'il Abner や Pogo のような「重要人物」を平然と無視してすすめられるような文化論や文学研究にたいして、わたくしは若干食いたりない不満の念をもっている。(Imagination の世界では Al Capp の 'Dogpatch' も Faulkner の 'Yoknapatawpha' も同格のはず、というのがわたくしの立場である。) 100篇の Henry James 論があっても、1篇の Al Capp 論すらない、というの

がわが国のこんにちのアメリカ文学研究の姿の一面向である。アプローチのどこかに大きな穴があるように思えるのだが、それは、いまここで立ち入るべき問題ではなさそうだ。

このように Al Capp や Walt Kelly を現代アメリカの新しいフォークロアの創造者とわたくしは考えているが、他にフォークロアの集成あるいは形成に大きな役割をはたしていると思われるタイプに、たとえばアメリカの Bennett Cerf のような小話の集成家——'raconteur' という呼称がいちばんあたるように思えるが——がいる。ジャパン・タイムズの最終面に "Try and Stop Me" という見出しでよく登場するので日本にも愛読者が多いと思うが、将来、20世紀アメリカのフォークロア研究を志す篤学の士は、Cerf の仕事を重要な研究資料にするにちがいない、とわたくしは予想している。

近ごろ、イギリス伝承の童謡や民話から出発して現代アメリカのフォークロアへと、あれこれ連想の糸をたぐっていると、いつのまにか Al Capp とか Bennett Cerf の名にたどりつくことが多いので、今回は、まず Cerf に登場してもらって、この稿の糸口を切ってもらうことにしたい。

Cerf が紹介する数多い小話の一つに、映画のオールド・ファンには昔なつかしい Mae West に関するものがある。そのまま引用してみよう。

Mae West, probably the only star who had an important piece of war material named after her (the life preservers, which when inflated, saved many an aviator ditched in the briny) is wont to boast. "When I'm good, I'm very, very good ... but when I'm bad, I'm better."<sup>1)</sup> (italics は筆者)

('the briny' は俗語で「海」のこと)。Mae West が救命胴着の名になっていることは、たとえば岩波の『大英和』にも出ているし、別に珍しい話ではないが、この小話の Mae West のせりふがおもしろいのである。わたくしは、さいしょにこの話を読んだとき、ゲラゲラ笑ったのをおぼえているが、そのおもしろさは、たんにこと

1) "Try and Stop Me" (The Japan Times, February 25, 1970)

ばの logical absurdity だけから来るのではない。わたくしたちが今までみてきたマザー・グースの世界との、いわば重なりあいがおもしろいのである。伝承童謡の中に、つぎのような唄がある。

There was a little girl, and she had a little curl  
Right in the middle of her forehead;  
When she was good, she was very, very good,  
But when she was bad, she was horrid.<sup>2)</sup>

この唄は詩人の Longfellow とも結びつけられ、おそらくアメリカ産であろうと推定されている比較的あたらしい童謡（初出例1885年）であるが、現在では伝承童謡の中に確たる位置を占めており、英米の子どもの幼時体験のまぎれもない一部になっている。Bennett Cerf が伝える Mae West のせりふは、この童謡の、おそらくほとんどの無意識のパロディーであり、そのせりふが、たんなる駄じゃれの域を脱した味わいをもつのは、読者がそこに幼時なれしたしんだ童謡の投影を感じるからである。

### 子どもの quiz book

童謡をあるていで知っていないと、このような現代アメリカのおとな向きの笑い話もじゅうぶん味わえないし、子ども相手の quiz には、なおさら答えられない、というはめにもなるのである。いま手もとにある *The Junior Puffin Quiz Book*<sup>3)</sup> という、おそらくイギリスの quiz book の中では、いちばん初級向きと思われるものをみると、つぎのような問題が出ている。

What do you know about the character of the little girl who 'wore a little curl right down the middle of her forehead'?

前記の童謡の ll. 3-4 が正解になるわけだが、その童謡を知らないことには、答えようがないのである。

わたくしは、クィズに答えるのは、あまりとくいでないが、まえまえから子ども向きのクィズの本には興味がある。ペンギン・ブックス社の子ども向きの Puffin 双書には、現在、上記のもののほかに、名に *Junior* を冠さないのがもう 1 冊出ているが、両冊とも、いろいろの意味で、わたくしたちに問題 (quiz でない) を提供してくれるようと思われる。たとえば後者の序文で著者たちに、つぎのように本の内容を説明している。

"...we have tried to provide questions that are *not* for the most part about the things you learn at school but that *can* be answered by boys and girls between ten and fifteen years of age." (italics は筆者)<sup>4)</sup>

つまり、この quiz book は、学校で習得する事項について

のクィズではなく、主として学校で習わないことについてのいろいろのクィズが主体になっているのである。もちろん工夫をいくらか凝らしたクィズ集だから、すべての子がやすやすと答えられるとは限らないだろうが、集められた問題をながめると、だいたいイギリスの子どもの常識として、どういうものが予期されているのか、また学校外の幼時体験の質がどういうものか、あるいはどの見当がつくような気がする。読者は、こころみに当ってみられるがよい。イギリスの子どもでも知っている（はずの）ことで、わたくしたち英語の「専門家」の知らないことが、いかに多いかということを、いやというほど思い知らされるに違いないのである。そして、こういう欠落が、わたくしたちの英語英文学の理解に、なんらかの影響をあたえないはずはない、ということも。

筆者が、今まで 3 回にわたり話題にしてきたイギリスの伝承童謡が、こういう種類のクィズでは、かなり大きな位置を占めるだろうということは、とうぜん予想されることである。こまかく紹介する余裕もないのに、もう 1 題だけ童謡に関連した問題をあげてみよう。（これも *Junior Puffin* のほうから）

What persons in nursery rhymes and stories are connected with a hungry dog, a cow in the corn, Banbury Cross, a little lamb, and frogs and snails and puppy dogs' tails? (p. 114)

(はじめの 4 つは、それぞれ本稿で言及したことがあるもの。さいごのは 'What are little boys made of?' という唄から。) イギリスの子どもなら、まずこの中、3 つはすらすらと答が出ると思うが、わたくしたちのばあい、どうだろうか。

クィズといえば、例のハンガリー生まれのユーモリスト George Mikes が 3 歳になる自分の娘から "Daddy, who is Marjorie Daw?"

と質問され

"Maybe one of the little girls upstairs. I've never heard of her."

と答にもならぬ答でごまかしたあと、大いに自分の無知を恥じ入り、一念発起して娘といっしょに童謡の勉強をはじめる、というおもしろい打ちあけ話<sup>5)</sup> があるが、

2) Opie, *ODNR*, p. 187.

3) By Norman and Margaret Dixon. A Puffin Original (Penguin Books, 1966). p. 80.

4) *The Puffin Quiz Book*, Revised Edition, ed. by Norman and Margaret Dixon. (Penguin Books, 1965). Note.

5) George Mikes, *How to Unite Nations* (1963). Penguin Books edition, p. 71. これは山田和男氏のご教示による。なお拙稿「伝承童謡」(『英語教育』1970 年 6 月号) を参照していただきたい。

Mikes などの英語の達人でも（あるいは達人だからこそ），幼時体験の欠如という問題に真剣にぶつからざるをえなかつたのである。これは、英語を母国語としない英語関係者にとっては、避けられない問題であるように、わたくしには思われる。

### 英語の ‘plain’ と ‘coloured’

先日亡くなられた市河三喜先生は、かつて富山房の『英米故事伝説辞典』(1963)の序文の中で、R.L. Stevenson のことば<sup>6)</sup>を枕にして ‘plain English’ と ‘coloured English’ とを区別されたことがあった。つまり、わたくしたち外国人の使う（また Palmer 氏によれば「学ぶべき」）英語は「原則として plain」であるが、本国人の英語は「物心について以来 nursery rhyme をはじめとして Bible, Prayer Book から Shakespeare とだんだん身につけて」いるから、それがおのずとその使う英語ににじみでて ‘coloured’ になるのであり、したがって英米人の文章の「妙味を味わう」には、そういう知識が不可欠である、というのが序文のおおよその趣旨だった。

‘Plain English’ と ‘coloured English’ の違いは、たんに表現や語彙がやさしいか難しいかという点にあるのではなく（外国人は英米人よりえてして難しい語句を使って英文を書くくせがある）、こういうふうに滲みでてくるもの有無にある、といえる。教養ある native speaker の英語と、native speaker でない人の書く英語とのあいだに、絶対的な落差があるといえば、もちろんいいすぎになるだろうが、両者の差は、かなり本質的なものであって、容易に越えがたいという感じは否みえない。わたくしにいわせると、大きなポイントは、幼時体験の差であって、それがおのずからにじみでてきて生ずる ‘colour’ や ‘におい’ は、努力によって習得しうる性質のものではないようと思う。それは、たとえていえば、アマチュアの将棋が、いくら定跡に通じてうまくなつても、プロの将棋と質が決定的に違うと似たところがあるようと思われる。George Mikes の文章にしても、達者ではあるが、わたくしの感じでは、こういうふうににじみでてくる味がなく、‘plain English’ の域にとどまっているように思われる。（たとえば Stephen Potter の文章のおもしろさと比べるとはっきりする。）また英語を常用する外国生まれの思想家の英語についても同じことがいえそうだ。Arthur Koestler や Hannah Arendt のような人の文章は、いかに格調が高く流暢になつても、前述のような意味での ‘coloured English’ には、けっしてならないのである。

くりかえしいうようだが、英語の ‘plain’ と ‘coloured’

の相違は、おのずからにじみでてくるような幼時体験の有無と多分に関係があるのであり、その幼時体験のたいせつな部分を占めるのが、わたくしたちが問題にしてきた伝承童謡——マザー・グースの唄——の世界なのである。過去の経験を変えることが人間にできない以上、わたくしたちが、これから ‘coloured English’ を駆使するようになることは、ほとんど望むべくもないが、それでも Mikes の懸命の勉強法を見習うなら、‘coloured English’ の「妙味を味わう」ところまでは行けるのではないか。

### Humpty Dumpty の唄

アメリカの作家 Robert Penn Warren がかつて Pulitzer 賞を獲得した作品に *All the King's Men* (1946) という小説がある。アメリカ南部の政治家 Huey Long (1893—1935) をモデルにしたといわれる世評きわめて高い作品である。Warren についての作家論や作品論が日本でどうなっているのか、わたくしはまったく知らないので、口はばったいことはいえないが、かねがね気になることがひとつある。それは、この作品に邦訳があり、その邦訳名が『すべて王の臣』<sup>7)</sup> となっていることである。（「すべて王者の臣」という訳をどこかで見た記憶もある。）ひょっとしたら、訳者は、原題が童謡の ‘Humpty Dumpty の唄’ に由来していることに気づいていないのではないか、といううていへん失礼な推測を、わたくしは禁じえないのである（事実、邦訳巻末の訳者の「解説」にも、この童謡への言及はなされていない）。

‘Humpty Dumpty の唄’ は、有名すぎて紹介の要もないほどだが、挙げてみよう。

Humpty Dumpty sat on a wall,  
Humpty Dumpty had a great fall.

All the king's horses,  
And all the king's men,  
Couldn't put Humpty together again.<sup>8)</sup>

Warren の小説の題名が、この第4行から來ていることは、いうまでもない。富山房の『故事伝説辞典』に紹介されている竹友藻風訳では3行目といっしょになって「王の兵馬をくり出すとも」となっているが、要は「王様の馬が全部と王様の家来が全部、力を合わせても、ハシブティーをもとに返すことができなかった」と歌って

6) “If landscapes were sold, like the sheets of characters of my boyhood, one penny plain and twopence coloured, I should go the length of twopence every day of my life” (*Travels with a Donkey*)

7) 白水社、1967年。

8) Opie, op. cit., p. 213

いるのであって、童謡の調子からすれば、*All the King's Men* を「すべて王の臣」と何んでみせるよりも「王さまの家来がみんな」とでも訳したいところである（邦訳の題名が原作の直訳である必要はもうとうないことは、わたくしも承知しているが）。訳者は、万事承知で、この題名を選んだのかもしれないが、それにしても感心しない。

原作者 Warren が ‘Humpty Dumpty の唄’ を念頭においていることは、作品をよめば、いよいよはっきりしてくる。‘Humpty Dumpty の唄’ は、ほんらい riddle であって、Humpty が卵を象徴していることは、周知のことと思うが、この卵のイメージが、たとえば主人公の老父の頭のかっこうを描写するさい (‘his narrow, egg-thin old skull’)<sup>9)</sup> とか、‘the top of the skull exploding off like an egg’<sup>10)</sup> といったような表現にも生きているように思われる。また、地方政治家として栄華をきわめた後の主人公とその息子の破滅（これが Humpty の ‘great fall’），狂瀾を既倒に廻(ま)すすべもない悲劇の進行を、読者は、たえず ‘Humpty Dumpty の唄’ を脳裡にうかべながら（表題のこういう喚起性 suggestiveness をぬきにしては作品を論じえない）、読まざるをえないのである。さらに付言するなら、モデルとされている Huey Long は、いかにも Humpty Dumpty 的風貌の人だったらしく，“a dumpy figure, as plain and pudgy as a potato”<sup>11)</sup> というふうに、いまも回想されているのである。

これは、文学作品の理解に、伝承童謡の知識を必要とするひとつの例証にもなると思うが、特に ‘Humpty Dumpty の唄’ のばあい、今回のはじめにあげた ‘There was a little girl, and she had a little curl’ の童謡や、前回にとりあげた ‘huff and puff’ のような表現に比べると、知名度（？）がずっと高く、どんな引用句辞典にも出てくるはずのものであり、幼時体験の有無と無関係に、英語関係者なら知悉していなくてはならない、いわば最小限の「英語の常識」に属しており、英語圏では、子ども相手のクイズの対象にすらなりえないものなのである。たまたま Warren の小説という文学作品のばあいを引き合いに出してみたのだが、‘Humpty Dumpty の唄’ を意識した表現は、英語には日常きわめて多い。

例をいくつか挙げてみよう。たとえば、さきごろ New York 市を中心起こった郵便ストのおかげで、ほとんど全国的にアメリカの郵便機能が麻痺したとき、*The New York Times* 週刊版 (March 29, 1970) の該当記事の書き出しは “Can Uncle Sam put Humpty Dumpty together again?” となっていた。これは、たとえば “Can the American government put the shattered

postal service back to normal again?” と普通に表現するよりは、よほどイメージが生き生きしているし、事態をもとへもどすことの難しさを読者に実感させるのに効果的であるように思われる。

また、ポーランドが国内の政治情勢不安になんでいた2年まえのやや古い例だが、同じく *The New York Times* 週刊版 (April 4, 1968) の記事は、見出しが “Poland has Humpty-Dumpty's Problem” となっており、しめくくりの文章が “Who will put Humpty Dumpty back together again?” remarked one Pole educated in the United States. となっていた。

以上は、いずれも Humpty Dumpty が、おもてに姿を現わしているので見落とす氣づかいはないが、つぎのような文章になるとどうだろう。

... the fundamental question raised by the very existence of an East and West Germany is whether the two halves can ever be *put back together again*. (*Newsweek*, March 30, 1970) (italics は筆者)

字義どおりに解して、もちろんなんのさしつかえもないが、わたくしには Humpty の影がちらっとみえるような気がするのである。

系統的に用例集めをしているわけではなく、偶然、目に付いた例ばかりで申しわけないが、‘Humpty Dumpty の唄’ をふまえた例を、もうひとつだけあげてみよう。

To achieve healthy price stability at full employment seems to be beyond the powers of *all the king's horses and all the king's men* in any present-day mixed economy. (P.A. Samuelson in *Newsweek*, March 2, 1970) (italics は筆者)

マザー・グースの世界に親炙(ふれ)していないと、時事英語もまんぞくに読めないことになる、どこでわたくしが遠慮がちに主張しても、おおかたの読者は認めてくれるのではなかろうか。

Humpty Dumpty をふまえた用例にかかずらって、‘Humpty Dumpty の唄’ そのものを忘れてはなるまい。実は、伝承童謡の Humpty Dumpty そのものが、無類におもしろいのである。‘Humpty Dumpty の唄’ の文献初出例は *Mother Goose's Melody* の Bussel 版本の追加原稿書き込み (c. 1803年) だとされている。<sup>12)</sup> Humpty dumpty ということばが他の意味で使われた例は18世紀に散見されるが、唄の人物としては19世紀にはいってはじめて登場するのである（すくなくとも文献上

9) *All the King's Men*, Modern Library edition, p. 26.

10) *ibid.*, p. 372.

11) cf. *The New York Review of Books*, Feb. 28, 1970.

12) Opie, *op. cit.*, p. 215.

は). けっして古いとはいえない. しかし Humpty が擬人化している卵のなぞ (riddle) は、その歴史をわめて古く、分布は広くヨーロッパ全般にまたがるという。Opie の解説を借りるなら

What is not so certain is for how long the riddle has been known. It does not appear in early riddle books, but this may be because it was already too well known. Students of linguistics believe that it 'is one of those pieces the antiquity of which is to be measured in thousands of years, or rather it is so great that it cannot be measured at all' (*op. cit.*, p. 215)

ということになる。この大昔からのなぞのいわば personification は、イギリスでは Humpty Dumpty、デンマークでは 'Lille Trille'、ドイツでは 'Hümpelken-Pümpelken'、スウェーデンでは 'Thille Lille'、と各地各様であるが、伝えられる唄の内容も調子も酷似しているという。比較言語学や民俗学の好個の研究対象となろう。そしてそれは、一見、たわいない童謡が持つうる計算知れない奥行きの1つの例証にもなっているのである。

ただ、話を英文学に限るなら、わたくしたちは Humpty Dumpty が大きく登場する2つの例を忘れるわけにいかない。1つは、いうまでもなく Lewis Carroll の *Through the Looking Glass* (1871)，もう1つは、前回ふれた Joyce の *Finnegans Wake* である。すでに今回も紙数がつき、それぞれの作品における Humpty Dumpty を、ていねいに紹介するいとまがないが、「鏡の中の世界」でアリスが会う Humpty Dumpty は、伝承童謡の無色の Humpty ではなく、Carroll 好みのつむじ曲がりになっており、その Carrollian logic ともいうべき屁りくつと、John Tenniel のさし絵ばかりが強く印象にのこり、第6章さいごの Humpty Dumpty 倒壊の場面 ("at this moment a heavy crash shook the forest from end to end") も、とかく読みおとされがちである。いっぽう、*Finnegans Wake* には、前回ふれたので、再び立ち入ることは避けたいが、この途方もない作品の主人公が、ほかならぬ Humpty Dumpty の化身であるというのは、ほぼ通説、といってもいいかと思う。開巻早々、酔っぱらって梯子から落ちて死に、通夜 (wake) の対象になる人物 Finnegan 氏は、名まえは Mac-Cool その他、いかように変わっても、Humpty Dumpty に間違いないし、事実、*Finnegans Wake* の随所(たとえば第7雷鳴の中)に、その名は出てくるのである。*The Annotated Alice* (1960) の注解者 Martin Gardner は *Through the Looking Glass* の第6章 Humpty Dumpty の挿話から、わたくしたちの目を *Finnegans*

*Wake* へ、さらにその Finnegan の墜落が象徴する宇宙卵 (cosmic egg) の崩壊へと向けてくれるのだが、この探究の方向は、つとにジョイス研究家の J. Campbell が指摘していたところでもあった。童謡の Humpty Dumpty の墜落から、アリスの世界を通っても、フィネガンの世界を通っても、どうやら、わたくしたちの行きつく先は、狭義の「文学」を、はるかに越えた世界になりそうである。およそ人間の imagination の根底に興味をもつ人なら、この無限のひろがりをもつ world egg (あるいは cosmic egg) の問題を無視するわけにいかないだろうが、わたくしたちとしては、いまは、そういう無限のひろがりが Humpty Dumpty の喚起する世界のかなたに1つの可能性として存在する、ということを銘記するにとどめなければならないまい。<sup>13)</sup>

わたくしは前回、「pie」ということば1つ取りあげてみても、その connotation は、わたくしたちの予測を考えるといったが、「egg」になると、その内包は pie の比ではない。復活祭 (Easter) と卵とウサギの関係だけを考えても、それは、あっさりキリスト教世界を飛びこえてしまうのである。

この「雑感的序説」で再び Humpty Dumpty や卵の問題に立ち入ることは、よもやあるまいと思われるので、1篇だけ Humpty Dumpty と関連する詩篇を紹介して今回の結びとしたい。カナダの闇秀 Jay Macpherson (1931—) の作である。

Reader, in your hand you hold  
A silver case, a heart of gold.  
I have no door, however small,  
Unless you break my tender wall,  
And there's no skill in healing then  
Shall ever make me whole again.  
Show pity, reader, for my plight:

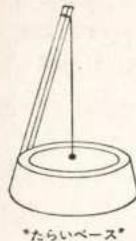
Pass by, or else consume me quite.<sup>14)</sup>

題して "An Egg". ほとんど riddle に近い形で読者に呼びかける形式をとっているが、「Humpty Dumpty の

(p. 65 へつづく)

13) 'world egg' という人類学の定着した用語がいつまで経っても英和辞典に取り入れられないのは不思議である。Funk & Wagnall の *Dictionary of Folklore* では一応 "world egg"=the cosmic egg from which the universe was born, often from which mankind emerged, or from which the creator of the universe and mankind emerged: a concept of the ancient cosmogonies.... と解説されている。ジョイス研究で有名な J. Campbell の *The Hero with a Thousand Faces* (1956) や、手近なところでは山口昌男「失われた世界の復権」(『未開と文明』平凡社、1969) などにも興味深い言及がある。

14) A.J.M. Smith, ed., *The Book of Canadian Poetry* (Toronto, 1957) 所載。



# アメリカ旅行見聞録

KUNIHIRO, Tetsuya  
國 廣 哲 彌

1970年の2月25日午後5時、私は生まれて始めての海外旅行のために日本航空のジェット機で羽田を飛び立った。2月27日、28日の両日 Washington, D.C. で開かれる「日米言語行動の比較研究計画」の予備会議に出席するためである。この会議そのものについては本誌でも座談会がおこなわれたし、私自身他のところで触れているので<sup>1)</sup>、その他の部分について語ることにしたい。

同行の方々は団長の前田陽一教授(東大)を始め、服部四郎博士(東大名誉教授)、中根千枝教授(東大)、國弘正雄講師(お茶の水大)、日本学術振興会の長谷川正徳課長という海外旅行のベテランぞろいで、私はただ黙ってついていればよく、気は大変楽であった。3月10日帰国予定で期間は丁度2週間であり、かなり忙しい旅行であったが、Princeton 大学でお会いした Marchwardt 教授によると「本を書くには丁度よい長さだ」そうで、同大学の Chinese Linguistics Project の Executive Secretary である Kierman 氏も半分真顔で本を書いたら是非1部送ってくれと言っていた。出発の日たまたま本屋で見付け、機上で読んだ安岡章太郎の『アメリカ夏象冬記』(中公新書)はまさに2週間のアメリカ旅行に基づくものであった。しかし私にはとても1冊の本を書くほどの文才はないので、この小文でお茶をにごす次第である。何かも私も私にとっては始めての経験であり、印象は強烈かつ新鮮であるけれども、何から何まで書いては退屈される向きもあるらうと考えて、できるだけ特殊な経験と思われるものに筆をしぶることにしたい。

## San Francisco

約9時間の飛行を終えて機が San Francisco 空港に近くころ、機内に聞き憶えのある曲が流れ始めた。John Philips の作品 "San Francisco" である。日航もなかなか味なことをやるもので、雰囲気満点である。この曲名の日本語訳は普通「花のサンフランシスコ」となっているが、「花の」を加えないと日本語の歌の題名らしくならないところにすでに日英両語の表現構造の差異、もっ

と大げさに言えば文化人類学的な差異がうかがわれるものである。

機を一步踏み出したらそこはすでに空港の建物の内部であり、重油暖房をしているらしく、かすかに重油においがする。どこかの部屋の片隅でアメリカ特有の柔らかい「コロコロ」という電話のベルの音がしたとき、ああ遂にアメリカに来たという感慨と共に、いささか身の引き緊まるのを感じた。China Town のすぐ隣にある Beverly Plaza というホテルに一旦落ち着くとすぐ、服部先生とふたりで街に出た。日本の5月ごろの暖かさで、寒さぎらいの私はのびのびとした。私達は Greyhound Bus で Stanford 大学に向かった。普通の乗用車よりも早い速度で丁度1時間南に向かって走ったところで大学の正門近くに到着した。丁度通りかかった学生に正門まで案内してもらった。大学のキャンパスの広さというものを日本なみに考えていたのがわれわれの失敗の元だった。正門には着いたものの、あたりは亜熱帯的な林が見渡す限り続いているばかりで、建物らしきものは何ひとつ見当たらない。道路には入っ子ひとりおらず、自動車がビュンビュン行き交うばかりである。むくつけきおのこではヒッチハイクの望みもなく、腹を決めてテクテク歩き出した。ここらは San Francisco よりも大分暖かく、日本の6月くらいの暖かさで、オーバーを片手にフーフー言いながら2キロ近く歩いたところでやっと大学本部の建物にたどり着いた。聞くと、目指す Center for Advanced Study in Behavioral Sciences はさらに今まで歩いたぐらい歩かなければならぬと言うことでふたりはうんざりしたが、乗りかかった船だからと言うことで目的を完遂することにした。昼を少し回っていたので学生食堂に行った。カフェテリア式である。食事の内容も大体満足なものであった。手当たり次第に取った食べ物は cottage cheese、どぎつい紫色の berry のはいったバイなどであったが、どれも生まれて始めて食べるものがばかりである。大学食堂では後に New York の Columbia 大学、ハワイの East-West Center のものを見たが、どれも清潔なカフェテリア式であった。Stanford のキャンパスは、目も覚めるばかりに鮮かな緑の草地や芝生、スペインの僧院を思わせる cloister 造りの建物、池

1)『語研ニュースレター』No. 27, 『英語青年』1970年6月号。

あり丘ありで、アメリカでも最も美しい部類にはいると言ふ。一方一個所に落書き用に作られたとおぼしき塀がある、ご時勢にたがわず ‘Education is the Destruction of Innocence!’, ‘The quality of mercy is not strained. Shakespeare.’ (慈悲はしいられるべきものではない [Merchant of Venice]), ‘Ignorance was bliss.’ という文字が見えた。オートバイに乗る女子学生、はだしの男女学生も目についた。目的の Center に行く道がよく分からなくて、ふたりで立ち止まって地図を見ていたら、丁度自転車で通りかかった女子学生がつと寄って来てにこやかに ‘May I help?’ と言う。道を教えたあと「ここから歩いて行くのじゃなかなか大変です」 ‘But it's a nice day!’ と言ったかと思うとさっと行ってしまった。私はこの爽やかな好意に感嘆久しくすると同時に言葉のおしまいに付けた ‘But it's a nice day.’ という、日本では余計な言葉であり、まず発せられることのない表現に非常にアメリカ的なものを感じた。あとで Center の Tax 教授にこのわれわれの赤毛布ぶりを話したところ、やはりおしまいに ‘It was a beautiful day!’ が付いたので増えこれはアメリカ英語の表現のひとつの型なのではないかと思い始めている。

Center for Advanced Study in Behavioral Sciences は有名なところであるからご存知の方も多いと思うが、行動科学に関する諸分野で指導的な役割を演じ、生産的であると期待される優れた学者を招いて、1年間まったく何の義務もなく時を過ごさせてくれる施設である。他の学者と討論に明け暮れるのもよし、ひとりで黙考するもよし、本を書くのもよし、自分の過去の業績を再検討し、挙句は過去の仮説の廃棄に終わるのもよし、というまったく自由放任の研究所で、学者のひとつの理想郷である。美しいゴルフ場のそばの丘の上に位置し、家族は適当な街の中に住ませてもらえる。気候は申し分なく、実際すこし北にある Palo Alto という街を通過したとき、「当市は政府の調査によると全米で最も気候のよいところである」という立札を見かけた。私たちは折から招かれて来ていた Harvard 大学の Dwight Bolinger [bólindʒə] 教授と人種学者の Tax 教授に会うことができた。Bolinger 教授は小柄で物静かな人で、「私は日本人の学者では安倍勇氏しか知りません」と言っていた。William S-Y. Wang 教授に会えることも期待して行ったが不在であった。Tax 教授はわれわれを車でバス停留所まで送って下さった。

訪米第1日の夜は皆なで一緒に食事をしながら会議の下相談をしようということで、一同日本人街の日本料理屋におもむいた。料理を取ってみて驚いたことに、どれもアメリカ式に量が途方もなく豊富であった。ブリの照

焼は優にわらじの大きさがあったし、私の注文した握りしはどんなに頑張ってもひと口では食べ切れない大きさだった。日本の一部のすし屋の、歯の間にはさまってしまうような小さいしと好対照をなす。

## Washington, D. C.

第2日目の夜われわれ一行は Washington の Hotel Dupont Plaza に着いた。暖かい San Francisco と打って変わってここは寒風吹きすさぶ最冬だった。再び一緒に食事をしようということでわれわれは外に出たが、十分に下着を着ていなかった私は震えあがってしまった。Washington に4年住んでおられた國弘正雄さんの案内でわれわれは Duke Zeibert's というかなり立派なレストランに繰りこんだ。私は Boiled Beef in Pot を注文したが、量は多かったが味はそう感心しなかった。旅行中合わせて4つの会社 (JAL, UA, TWA, EA) のジェット機に乗り、dinner では何時もビフテキを注文したが、やはり一番おいしかったのは JAL つまり日航のものであった。もっともアメリカ人がどういう評価を下すかは分からない。Washington の第1夜は、体にまだ日本時間のサイクルが残っていて、朝の4時ごろすっかり目が覚めてしまった。いわゆる「体内時計」の働きである。しかたがないので夜が明けるまで日本に長い手紙を書いた。アメリカに着いて以来、暇さえあれば部屋備え付けのテレビを見て來たが、2日ばかりで日本のテレビ・コマーシャルの大半はアメリカの焼き直しであるらしいという印象を得た。アメリカに来てひとつ悩まされたことは、ホテルの床が全部じゅうたんであるためか、体に静電気が起こって、金物に触れるたびに「チカッ！」と電撃を受けることであった。アメリカ生活の先輩國弘さんが、金物に触れる前に、ドアの鍵を手に持って何か金物をサッとこするとよいと教えて下さった。その時気を付けて見ると鍵の先に小さい火花が散る。あれでは「チカッ！」と来るはずである。ひどい時は握手した途端に「バシッ！」と放電して双方気まずい思いをすることがあるという。

会議の第1日である27日(金)になった。朝の9時前に私はひとりで街に出、カフェテリアを探して朝食をとった。グレープフルート・ジュース、クリームパイ、サラダ、パン、コーヒーで \$1.35。黒人のウェーラーが新聞をもって来て「読むか?」と言う。余分なお金を取られてはかなないので “No” と答えたが、どうも無料だったらしい。食後近くの郵便局に今朝書いた手紙を航空便で出しに行った。Weekday だというのに通りには人影がほとんど見当たらず、大きな郵便局の中もガランとして

いた。東京に比べてまことにひっそりとした首都である。会議のある The Brookings Institute はホテルから歩いて5分くらいのところにあった。会議には折から Washington に滞在中であったハワイの East-West Center の Kleinjans 副学長と Brownell 氏も姿を見せられた。昼食は日本大使館の招きによって一同中華料理店に案内された。一等書記官の方が前田先生の教え子であるということであれわれのお相手をして下さった。この店の近くに國弘さんはかつて下宿しておられて、その店は当時の根城であったよし。なじみの給仕たちと懐しそうに挨拶を交しておられた。夜は会議のオブザーバーのひとりであった国務省の Tennyn 氏の宅のパーティーに招かれた。この席でアメリカ側のメンバーである Samuel Martin 教授、Eleanor Jorden 教授と親しく話すことができた。Martin 教授は、Chomsky は最後の Bloomfieldian であるなどと言っていた。Tennyn 氏のお子さんのピアノの先生も招かれていたが、この人が弟子のひとりであるらしいメキシコの少年を連れて来ていた。この少年と話す回り合わせになった私は、スペイン語の教科書で憶えた例文の中からとっさに思い出すままに

“Hablo la lengua Española.”

とやった。この文の意味が《私はスペイン語を話します》であったからたまらない。少年は途端にスペイン語でペラベラとやり出した。私はあわてて “Un poco. 《一寸だけ》 Un poco.” とさえぎって英語に切り換えてしまった。あとで思い出せる限りのスペイン語を口にしてみたが、私の独習のスペイン語発音の acceptability を試すにはいい機会だった。

翌28日（土）の2日目の会議は、午前中で終った。会場からホテルへの帰路、オブザーバーのひとり Richard Thompson 氏と話しているうちに、彼の専門が中国語で、PhD論文では中国語音と日本語の漢字音の対応規則を扱ったということが分かった。中国語か日本語か片方を知っている人が知らない方の言語を学ぼうとするときの漢字音の学習を助けるのが目的だと言う。私が日本語の歴史的仮名遣を考慮に入れたかと聞いたところ、そういうもののあることをまったく知らなかったということだったので、歴史的仮名遣の方が一層よく中国語音に対応していることを説明した。例えば現代日本語では「湯」も「東」も共に [to:] で、現代仮名遣も同様に「とう」であり、区別がない。ところが現代の北京官話では、「湯」[tʰəŋ] (2声)、「東」[tɔŋ] (1声) である。この母音の相違を歴史的仮名遣の「湯(たう)」、「東(とう)」は明瞭に示しているわけである。中国語の語末音 [-ŋ] が日本語で「う」となっているのは、日本語に /-ŋ/ がないために音の響きが最も近い「う」[ɯ]/u/ を当てたのだと説明され

る。中国語の語末音には [-n] もあり、日本人学習者はよく [-ŋ] か [-n] かに迷うことがあるが、仮名遣を思い出して「单」のように「たん」であれば [-n]、「当」のように「たう」であれば [-ŋ] だという推測をつけることができる。

28日の午後は服部先生のお奨めに従って、ひとりで観光バスに乗って Mount Vernon の見物に出かけた。これは郊外にある George Washington の住んでいた邸宅である。多少小高いところにあるが、決して名前の示すように山ではない。バスの中で、これもやはり会議で Washington にやって来たという Chicago のお医者さんと口をきくようになり孤独をまぬがれることができた。

Washington の第3夜を過ごした翌3月1日(日)は朝食をホテルの食堂でとると服部先生とふたりでホテルを引き払い(checked out)，まず Union Station に行った。われわれ一行は昨夜で解散して、私たちふたりは更に旅を続け、多忙な残りの方々はすぐ日本に帰られることになっていた。Washington に着いてから Princeton 大学の中国語と日本語の準教授 (associate professor) である橋本萬太郎さんから連絡があり、Princeton に是非寄ってくれとのことであったので、私たちは New York に飛行機で行く予定であったのを変更して、鉄道で Princeton の近くの Trenton, N.J. まで行くことにしたのである。Princeton は Washington から行けば New York の一寸手前に当たる。Union Station は鉄道の起点であり、われわれは Washington—New York 間を走る “Metroliners” という特急電車に乗ることになっていた。午後1時の発車には2時間余り時間があったので駅に荷物をあずけ、Washington Monument を見に行こうということになり、バスに乗った。これは白い大理石できた、巨大なオベリスクのかっこうをした高さ 555 フィートの塔であり、中にエレベーターがあって天辺まで昇れるようになっている。服部先生はこれに大分熱心がおありのようにお見受けした。お話しによると、以前にアメリカに滞在中に遂に昇ってみることができず、昨日も行ってみたけれども時間切れで昇りそこなったとのことであった。しかし3度目の正直で、われわれは今度は遂に昇ることができた。意外に時間がかかる、駅に着いたときは10分くらいしか余裕がなかった。Metroliners というのは、日本の新幹線に刺激されて作られた全米一の高速列車であり、計算してみると時速約 145 キロメートルで Washington—New York 間を 3 時間で走るが、乗った感じでは日本の電車特急並みで、かなりひどくゆれた。乗りこんだ座席の相客は教養のありそうな 50 歳くらいの黒人のおばさんであった。外国旅行の収穫を豊かにするひとつのこつはその国の庶民とできるだけ 1 対 1 で話しこむこ

とだと心得えていたので、この機会を逃がさず、“Are you going to New York?”などと聞いて話のきっかけを作った。ふたことみこと交わしたばかりのところで、“Are you a professor?”と聞かれて驚いた。どうして分かるのかと言うと、何と答えてよいか分からぬといいう返事だった。Washingtonに最近娘が引っ越し、今娘を訪ねての帰りだといいう話を聞いて、最近 Washingtonの黒人人口が急増し、6割に達しているということを問い合わせた。今は市長も黒人だそうである。アフリカ新興国の国連代表にしても、おかしくない風貌だものだから、“Are you in any profession?”と聞いてみた。“Yes, I'm a school nurse.”という答を聞いて、「はて、看護婦は知的職業なのだろうか」と一瞬いぶかかったが、よく考えてみるとアメリカのnurseは大学院卒業の資格のいる立派な職業で、日本の看護婦とはまったく違うのである。あとに続いた会話の内容はこの人が知的職業人であることを十分に証明した。いわく、来るときの列車の中でPerkinsonの何とかいう本を読んだが、大変面白いのであなたも是非読みなさいと。私が英語を専門に勉強しているというと、前にMenckenの*American Language*を読んだことがあるのだが、この中に英語のtaboo wordsは皆 Anglo-Saxon系の語であると書いてあったが、何故そうなのか不思議だという。話はsex educationにまで発展したが、おかげで退屈しないで済んだ。はっと気が付いたときは下車駅 Trenton, N.J. 到着の2,3分前だった。折から居眠り中の服部先生を呼び起し、膝の上に広げていたカメラやら交換レンズを大急ぎでしまいこんだときは列車はすでに駅に止まりかけていた。レンズ・カバーはどうしても1枚たりない。座席の下などをのぞいてみたがどうも見当たらぬので、どさくさにバッグの底にでも落ちこんだのだろうと思って探すのをあきらめた。黒人のおばさんが何を探しているのかと言う。レンズ・カバーだと言って指で大きさを作って見せた。ともかく列車はさっきから止まっている。別の挨拶もそこそこに降車口に素っ飛んだけはホームの駅員がまさに出発の合図をしようとするところだった。服部先生はまだである。ホームに飛び出しざま“One more!”と怒鳴った。通じたと見て列車は出発をおくらせ、服部先生は無事に降りられた。ほつとした私の耳元で「よくいらっしゃいました」という橋本萬太郎さんの声。その瞬間まで私は橋本さん夫妻がすぐ後に立っておられたのにまったく気が付かなかった。「やあ」と言っていると、動き出した列車の最後部あたりで誰かがわめいているのが聞こえ、われわれのそばを通過しざま、橋本さんにリレーのバトン・タッチのようにして何かを渡して行った。見るとそれは私が見失ったレンズ・カバーではな

いか。私は一瞬にして万事を了解した。私がお別れをした直後黒人のおばさんはレンズ・カバーなるものを一所懸命に探してくれたのだ。幸いにしてすぐ見つかった。折から通りかかった列車の車掌にわけを話してそれを渡した。車掌は腕を出すことのできる窓のある最後部へ素っ飛んだというわけである。私は黒人のおばさんの好意に感じ入ったのであるが、残念ながら住所も名前も聞いて来なかつたのでお礼の言いようがないのである。

### Princeton 大学

キャンパス内の橋本夫妻のアパートでひと休みしたのち、車でキャンバスを案内してもらう。私はその高貴な美しさに一驚した。さまざまな色合いの淡緑色の flag-stone を積んで造られた建物が主体をなしており、ひどくお金がかかっているという印象を受けた。夜は橋本さんに Princeton Inn でご馳走になったが、fellowとして Princeton に滞在中の Chang(張)教授夫妻も同席された。共に California 大学(Berkeley)の教授で、御主人は中国語学者、アメリカ人である奥さんはサンスクリット学者だとのことである。宿泊には今度新しくできた大学の Guest House《迎賓館》を提供していただいたが、われわれが最初の泊り客だとのことであった。翌日の朝食は‘Continental breakfast’しか出せないが、と言うことであったが、どんなものか分からぬが、とにかく何事も経験だから食べてみようということになった。朝になってみると、これは「最も簡単な朝食」であることが分かった。オレンジ・ジュース、コーヒー、紅茶両方の準備、ロールパン、バター、ジャム。それだけだった。のちに Honolulu のレストランで朝食をとったときにもメニューにこの‘Continental breakfast’<sup>2)</sup>を見出だした。午前中は建物の内部を案内してもらう。中央図書館の東洋部門には予想外によく中国・日本関係のものが揃っていた。雑誌『方言』は全巻揃っており、服部先生自身もお持ちでない先生の初期の論文抜刷も全部揃えて製本されていた。中国語関係の研究室では現在進行中の、中国語資料をコンピューターに憶えこませる仕事を見せてもらった。国際音声記号の IBM タイプボールを試作したものも見せてもらった。特別にあつらえたために、1個に \$2,500 かかったという。もと学長の公邸であったという教官食堂でわれわれのために昼食会を開いていた。会食者の中には Marckwardt 教授(英語学、言語学), Atkins 教授(アルタイ語学), Jansen 教授(日本史、先年『坂本龍馬』を著わした)などの顔が見えた。

2) 英和辞典でこれを載せているのは講談社の『ニューワールド英和辞典』だけのようである。

誰かが Marckwardt 教授に “Do you know Professor Kunihiro?” と聞いたら、 “Yes, yes, I met him in Tokyo. How are you?” と言ひながらニコニコして握手される。しかし実は私は教授とは面識がないので、國弘正雄さんとの間違いだろうと思い、 “I don't think we have met before.” と、今から考えると大変不粋なことを言ってしまった。Marckwardt さんは聞こえないふりをして返事をしなかった。Marckwardt さんの言葉はあるいは社交的なもので、私はそれを理解しなかったのではないかと恐れている。どうも私は非社交的な朴念仁で、前にも同じ失敗をしたことを思い出す。今年の1月に東北大学に言語学の集中講義を行ったとき、やはり昼食会を開いていただき、その席で始めて桑原輝男助教授にお目にかかる。桑原さんは「やあしばらくでした」と言われた。私は笑いながらではあったが「今日始めてお会いすると思うんですけど…」とやったのである。Marckwardt さんは、紛争中の東京教育大学の太田朗教授および梶田優助教授の安否を気遣ってしきりに尋ねられた。Marckwardt さんのお宅は前夜火事になって半分焼けたということだったが、ケロリとして笑い飛ばしておられた。

午後は橋本さんの車で、Princeton と New York の中間にある Bell Telephone Laboratory に、東大言語学科出身の研究員である梅田規子さんを訪ねた。同所のコーカーという若い研究員の発明になる音声合成機械を使って仕事中だったようで、そこに案内されその機械を見学した。これは合成された英語の短文を発話すると同時にブラウン管に口の断面図がうつるようになっている。かつ片隅に短文全体のフォルマントの図がうつっていて、発話に際しては、その瞬間に発話されている部分が特に強く光り、音声と口の恰好とフォルマントの3つが同時に分かるようになっている。進歩したものである。英文の “The Sun and the North Wind” が記憶させてあり、押しボタンの指示により、どの部分でも即座に発話して見せた。私などの耳には多少聞き取り難い感じではあったが、アメリカ人にはよく分かるそうである。このような機械を使っての ‘analysis by synthesis’ によって音声学が一段と進歩することが期待される。午後6時研究所前からバスで New York に向かい、丁度1時間で着いた。

### New York

いよいよ音に聞こえた New York だ。ずっと人影の少ないとこらばかり旅して来た私は、ここまで来て始めて東京的な意味での都会的雰囲気に接した感じで、何かホッとした気持になったことは否定できない。日頃は東

京の人ごみをひどくきらっているのであるが、ダウンタウンのほぼ中心部 (7th Avenue at 51st Street) にある Abbey Victoria という余り柄のよくないホテルに落着くと、すぐ夕食をとりに外に出た。私たちは食事はできるだけ cafeteria で安くあげることにしていた。大道芸人というのであろうか、歩道の暗がりでひとりの黒人が声をはり上げて歌を歌っていた。伴奏の楽器が何と洗濯だらいを地面に伏せて底の中心から紐を伸ばして、脇に立てたゲバ棒みたいな棒の先に結び付けて作ったベースである。さすがに New York ともなれば創意に満ちた黒人もいるものだと感心したが、歌に合わせてポンポンとはじくその “たらいベース” が本物におとらない音階を響かせていたから大したものである。裏通りめいたところも歩いたが、感じは丁度新宿といったところであった。

3月3日(火)、例のごとく cafeteria で朝食をとったあと、歩いて国連本部に向かった。国連大使である鶴岡氏は服部先生の一高時代の同級生なのである。本部のすぐ近くに日本の国連事務部があり、まずそこを訪ねたのであるが、たまたま乗ったエレベーターで私たちは出勤途次の鶴岡大使と乗り合わせたのである。ところが服部先生は、大使の風貌が学生時代以来余りに変わっていたために全然気付かれなかった。あとで出てこられた大使がさっきのエレベーターの中の紳士であったことが分かって大笑いという一幕があった。事務部の若い人の案内で私たちは一般の見学コースとは違ったコースで特別に国連内部を見せてもらった。折から開催中の小委員会の会場の椅子に坐り、イヤフォーンから流れてくる同時通訳の何カ国語かを試聴することもできた。

事務部の自動車で私たちは Columbia 大学に届けてもらった。丁度昼だったので大学食堂に行った。これはまた大変豪華な大学食堂であった。ステンドグラスの窓に深紅のどっしりしたカーテン、頭上にはシャンデリアという工合で、料理もおいしかった。日本語講師の白戸一郎さんを研究室に訪ねる。何の予告もなしに行ったものだから大変驚かれた。すぐに Austerlitz 教授(言語学)に連絡が行き、飛んで来られた。おふたり共かつて東大言語で服部先生の講義に列せられたことがあるのである。その当時丁度私は学生で、おふたりをよく知っている。Austerlitz さんは相變らずユーモアたっぷりで、「ワタシヒゲハヤシティマス。モウ、オジーサンニナリマシタ」とおどけていた。白戸さんの車で Empire State Building まで連れて行ってもらい、上まで昇ってみた。合憎と曇天で視界は悪く、下の Visibility 表示板には「5マイル」と出ていた。Rockefeller Center の RCA ビルにも昇った後、地下鉄で再び Columbia 大学に行き、近くの「月

「宮酒家」(Moon Palace)といふ中華料理店へ行き、Austerlitz さん、白戸夫妻に夕食をご馳走になる。食後アルタイ語学者の Menges 教授を研究室に訪ねた。Einstein に似た風貌の大変 hospitable なお方であった。お忙しそうであったので短時間で辞した。

私のたっての希望で再び Rockefeller Center に戻り、その Radio City Music Hall へ行った。ここで切符を買うときに一寸したトラブルが起った。窓口でお金(\$2.50)を払うと、カウンターのまん中のすきまから小さい切符がヒヨイとのぞく仕組みになっているのであるが、服部先生はうっかりそれを取らずに行かれたらしい。続いてお金を払った私がその服部先生の分の切符を取ったということになったらしい。入場しようと思って切符を受け取らなかったことに気付かれた服部先生をともなって私は窓口に戻り、「金を払ったのにこの人は切符を受け取っていない」と抗議した。窓口の中年の女性は「そんな筈はない。その証拠にここには余分な切符が残っていないじゃないか」と言い張る。切符の出てくる仕組みからして、客が受け取るのを忘れてそこには残らないので、この窓口係の言は全く強弁と言うほかはない。そのうち事の次第を見ていたらしい場内ボーイがやって来て“OK. OK.”と言しながら入場口へ連れていった。「どうぞ入場して下さい。あとで切符が見付かったら郵便で送って下さい」と言う。双方の顔を立てる巧みな裁きだと感心はしたが、不愉快であったことは変わりない。今度の旅行中不愉快な目に会ったのはこの時のほかに一度だけで、ひそかに心配していたよりは少なかったと言える。ほかの一度というのは New York のホテルに着いた時のことである。荷物を部屋に運んでくれたボーイによそのホテルの時と同じようにチップ25セントを渡したところ、手の平を差し出したまま「一体これは何だ」というような顔をしてじっと眺めていて、一向に引っこめようとしない。腕力の強そうな巨漢と狭い部屋の中で1対1という状況である。一寸気味が悪くなつて、結局もう25セント与えてお引き取りを願った次第である。あとで聞くと服部先生も同じ目に会われたという。ホノルルのホテルでもチップが少ないと言われたのだけれども、この時は様子が少し違っていた。ボーイは17, 8歳くらいの感じの二世らしき少年だった。何時もは肩にかけたままのショールダーバッグを、この時はトランクと一緒に運搬車にのせた。それでチップも2個分くれというのである。それをニヤッと笑って間の悪そうな表情で言うのである。日本のだなと感じた。

さて場内ではオーケストラの演奏最中であった。東京にいても何かと多忙で最近オーケストラを聴く機会のなかつた私は久し振りのなま演奏に生き返った心地がし

た。トランペットのソロ、曲芸があり、お目当てのライジングスも見ることができた。同時上映映画もあり、ここはつまり日劇の本家のようなものである。

3月4日(水)。午前中、Washington で会うことのできなかつた William Labov 教授を Columbia 大学に訪ねる。大変忙しいらしく、やつと10分余り話すことができたが、とにかくコネクションができたことは幸せであった。帰国後追っかけるようにして論文抜刷を送つてもらつた。著書なども普通便で送ると手紙にあったが、丁度郵便ストに引っかかつたらしく、今のところ届いていない。Labov 教授は New York などの都市の社会層と言語の関係を優れた方法で分析し、言語の構造や言語変化のメカニズムに鋭い洞察を示し、この方面ではアメリカで最も属目されている若手学者のひとりである。Princeton 大学で Moulton 教授の教えを受けた人であるという。Labov 教授の言語調査法の特色は、社会層の適切な分類と、言語の4つないし5つの文体の相違を組み合わせる点にある。更に調査項目として何を選ぶかについても興味深い着眼がなされている。

午後、Boston に行くために La Guardia [la gwárdia] 空港に向かう。その途中、マンハッタンではすでに姿を消している“Elevated”《高架電車》の姿を見る事ができた。車体は上半クリーム色、下半淡青色で割とさっぱりしていた。われわれを空港に送り届けたリムジンはメキシコ青年が運転していたが、大変なおんぼろ車であった。ダッシュボードの物入れの蓋も煙草の灰入れも全部こわれてバックリ口をあけたままであり、警笛を鳴らす装置もこわれていて、裸線をどこかにこすり付けてやつと鳴らしていた。E. T. Hall の *The Silent Language* が教える通り、このメキシコ人は大変のんびりしていて、間に合わせると約束した3時発の飛行機には遂に間に合わなかつた。幸いにして New York—Boston 間は“Air-Shuttle”といつてしじゅう出ているので、次の3時30分発に乗ることができた。このメキシコ人は時間のことなどケロリと忘れた顔をして、私が降りる時は“Have a nice trip.”と言ってニコリとした。文化の違いである。帰国後の前田陽一先生のお話の中に、これと全く対照的な日本文化の実例が出て來た。3月中旬に東京で開かれた「日米文化教育会議」の本会議に出席した人たちが大阪の Expo '70 に案内された。一行を運ぶ自動車がなかなか来ない。係の日本人が際々出て来て「すみません、もう少しお待ち下さい」とか「すみません、長い間お待たせして」と英語でお詫びを言う。これがいちいち“Excuse me, ...”で始まる。やつと自動車が来たという知らせも“Excuse me, ...”で始まつたので、アメリカ人たちは、自動車が来たのに何故あやまらなければならぬ

のかと大変不思議がったという。

私たちの乗った air-shuttle はターボプロップ機で、35分で Boston 空港に着く。機内で改札に来たスチュアーデスが切符帳を見て「遠くからおいでになりましたね」と微笑みかける。このような一寸した言葉に旅情がとても慰められる。

### Cambridge, Mass.

Boston と Cambridge の間を流れる Charles River に面したところに私たちの泊る 'Fenway Cambridge Motor Hotel' があった。名前の中の 'Motor Hotel' は略して言えば 'Motel' ということになる。しかしこのホテルは名前から想像されるような、時にいかがわしい目的に利用される簡易宿泊所では決してなかった。これは文字通り自動車旅行者のためのホテルで、簡易どころか今度の旅行中泊ったホテルの中では最も上等であった。室内のテーブルは大理石でできており、室温は自分で自由に調節できるサーモスタットで適温に維持されるようになっていた。ダブルベッドが2台ある大きな部屋にひとりで泊まり、1泊 \$17.50 であった。食堂では学者の一行きらしい人たちを見た。部屋に案内されるエレベーターの中でボイイが "What brought you to the United States, sir?" «どういうご用事で、合衆国にいらっしゃいましたか» と聞いたので、このような英語表現が今も口語で用いられることを確認した。部屋に落着くとすぐ久野暉さんと連絡がとれ、程なくホテルに現われた。久野さんは東大言語の出身で、現在 Harvard 大学教授(言語学)である。久野さんの車で Harvard 大学の Faculty Club に案内され、夕食をご馳走になる。食事の前に地下の喫茶部みたいなところでまず喉をうるおしたが、ここの壁に18世紀のロンドンの地図が大きく貼ってあった。まさに New England ならではの感がある。Boston の空港に降りて以来何となく最早アメリカを去ってイギリス領土に来たという感じがしてならず、街角などに "U.S. MAIL" と書いた、赤と藍に塗り分けられた郵便ポストを見かけるたびに「ああここはまだアメリカだった」と思うほどであった。食事の際、当地に来たら海産物が新鮮だろうから、是非試食すべきだと思い、オードーブルに何とか half clam という生の貝をとってみた。日本では見たこともないような大きな身の二枚貝が6つ氷の上に載って来た。これにレモンの汁をかけて食べる所以である。大変おいしかったが、私はこれだけでおなかが一杯になってしまって、後から来たステーキは遂に残してしまった。久野さんは私よりは若く、東大の学生時代はやせていたのだが、今はすんぐり太って堂々としたひげを生やし、

すっかり教授らしい風格が出ていた。食後、Harvard-Yenching Institute に留学中の長谷川欣佑さん(東大助教授)のアパートに寄って一緒に久野さんのうちに行く。Cambridge在住の東大言語出身の伊豆山孰子さんもやって来て、夜中まで話がはずんだ。

3月5日(木)

午前中はホテルで休養。午後は MIT で Chomsky 教授の授業を参観する。ふたりの学生の研究発表に Chomsky が時々コメントを加えるというものであった。内容は前週から続いているものでよく分からなかったが、ひとつはアラビア語の形態論、ひとつは英語のアクセントについての generative phonology であった。Halle 教授も途中から姿を見せた。あとから Halle に聞いたところによると Kiparsky も同席していたらしい。私は長谷川さんと一番うしろで聴いていた。学生はどこも同じと見て、ひとりの女子学生は授業の間中せっせとノートに落書きを続け、時間の終りには立派な、複雑極まる幾何模様を仕上げていた。授業の前に Chomsky の研究室を訪ねてみて驚いた。その建物は古いブラック建てで、廃用になった倉庫といった感じである。それでも入口のところに秘書嬢はいたので案内を乞うてみたが、今教授は講義の準備中だというので会うのは遠慮した。長谷川欣佑さんに聞いてみても、研究室の内部は大変狭いとのことである。しかしながら、一方において言えることは研究室の状態と学問的業績は反比例とまでは行かなくても、少なくとも全く無関係であるということである。あとで Halle 教授に、MIT は better office を作ってくれるべきですね、と言うと、「いや、better office よりも better salary がほしい」と言って笑っていた。見学のために建物の中を歩いてみた。天井や壁には、大小のパイプが沢山走っており、灰色のベンキが塗ってあったりして、さながら軍艦の内部のようだと思いつながら歩いていたら、向うから本当に水兵の制服を着た人がやって来たのには驚いた。陸軍の軍服も見かけた。MIT は軍との関係が深いそうで、委託学生なのであろう。月旅行計画の学術的部分はほとんど MIT が引き受けているということである。長谷川さんの案内でバスでホテルに帰る。6時半に久野さん夫妻が車で迎えに来て、Boston の "Maitre Jacque" というフランス料理店に連れて行かれ。入口には招待主の Roman Jakobson 教授が待っておられた。2年半前に国際言語学セミナーの折に東京でお会いしただけなのであるが、よく憶えておられ、「確か東京で会いましたね」と言われた。席には Jakobson 夫人とこの日1日別行動をとられた脇部先生がすでに来ておられた。Halle 教授も少しおくれて来られた。Jakobson 教授は上気嫌で大いに語られたが、正直なところ教

授の英語はなかなか聞き取りにくかった。われわれひとりひとりの家族の構成をたずねては、例えば “Toast to six Kunos!” 《6人の久野さんのために乾杯!》と言われる。そこで私は “How many Jakobsons should we drink a toast to?” 《何人のヤーコブソンさんのためにわれわれは乾杯すべきでしょうか?》と尋ねたところ、 “Two. Because I'm a binarist. A binary oppositionist!” 《ふたり! わたしは2項論者、2項対立論者だから》ということで一同大笑いであった。

### 3月6日(金)

前夜伊豆山夫妻のお宅に泊まられた服部先生と長谷川さんのアパートで落ち合う。すぐに長谷川夫人の運転による自動車で Boston 空港に向かう。飛行機は途中 Denver に降り、Grand Canyon の上空をサービスで一周したのち Los Angeles に向かった。

### Los Angeles

Los Angeles の宿 ‘May Fair Hotel’ は1泊 \$10 で安かったが、その割にはよいホテルだった。New York のホテルでは貴重品は帳場に預けてくれと言い、またそうしないと物騒な雰囲気があったが、ここでは様子はガラリと違った。カメラ類を預けようすると、入れるところがないと言う。何でそんな心配をするのかと言いたげな様子も見えた。私たちは日本人街を見るためにすぐ外に出た。俗に “Little Tokyo” と呼ばれているところである。200 メートルぐらいの長さにわたって道の両側に日本人の店が並んでいて、東京で言えば蒲田あたりの場末の街といった感じである。しかしすき焼・丼物・うどん・寿司を始め大抵の日本的な物はありそうであった。店には客はほとんどおらず、ときどき店の人らしいおじいさん・おばあさんの姿が見えた。何だか何十年ぶりかに郷里に帰って来て、幼いころ親しんで来た人たちの懐しい姿を窓越しにそっと眺めているという感じがした。街の人と言葉を交してみたいといふので、丁度切っていたフィルムを買いにカメラ店にはいった。40歳くらいの男の主人がいた。「ごめん下さい」と日本語で切り出してみたら「いらっしゃい」という言葉が返って来た。よく通じるらしいのでかなりこみ入った話を始めた。コダックのカラーフィルムは ASA 80 なのに私のカメラには ASA の目盛りには 80 がない。その近くの目盛にした場合絞りはどの程度調節すればよいかというのであった。言葉はちゃんと通じた。しかし主人の日本語には僅かになまりがあり、聞いてみると、英語の方が楽であり、日本語は両親(一世)から習ったという。両親は時々故郷の広島に帰り、今も帰っているところである。こちらで

もうけて日本で暮すと安くかかるから、などと言っていた。別のお土産店にはいったらおばあさんもお嫁さんも実際にまつとうな標準語を話した。おばあさんの息子さんと思われる店の主人も立派な日本語を喋ったが、使用人に使う英語も立派なものであった。お嫁さんが中学生くらいの娘さんに話すときはやはり日本語を使っていたが二世であるその娘さんの日本語はたどたどしかった。日本の初夏のようなロスの街を歩くのは気持がよかった。スペイン語の看板が目につき、スペイン語の映画館があり、街に流れる音楽はラテン物であった。最近はメキシコ人が市の中心部に進出し、ロスの繁華街ブロードウエイもさびれて来たという。

### 3月7日(土)

午前中タクシーで University of California at Los Angeles(UCLA) を訪れる。南国的な陽の光を受けて、底抜けに明るいキャンパスである。写真をとっていたらまたまた画面にはいった女子学生が私のそばを通り過ぎるときニッコリと笑って行った。その笑顔こそカメラに収めたいと思ったが、我に返った時はすでに遠くに歩き去っていた。一昨年の国際言語学セミナーに講師として来日していただいた、ユーゴースラビア、Novi Sad 大学の Ivić 夫妻が visiting professors としてここに来ておられるというので、研究室を訪ねたが留守であった。

昼間見るロスの街は明るく、色彩豊かで、ゆったりとスペースがあり、適度に都会的で、私はこんなところに住んでみたいと思った。見た限りでは、住宅の前面は例外なく芝生になっているが、これが大変美しい。私はアメリカの東部と西部を同時に見て來たことになり、心はひとりでに比較に傾く。私が前以て抱いていたイメージからすると、東部は予想外に重厚で色彩に乏しかった。もっともこれは季節が冬であるためかも知れない。逆に西部に予想外に明るく、私の抱くアメリカ的イメージに近かった。つまり日本文化からの距離は東部より西部の方が大きいと感じられるのである。ヨーロッパから東部に移住した人々はヨーロッパ文化を背負って來た。その人たちが西へ西へと移動して行くにつれて段々とヨーロッパ的なものをふるい落し、独自の文化を作り上げるに至ったのではないかと考えられるのである。

### Hawaii

Hawaii に着いたのは 土曜の午後であったために月曜日の朝を待って、East-West Center に E. Kleinjans 副学長を訪ねた。今度の日米合同研究について協力をお願いするためであった。同席された John Brownell さん (*Japan's Second Language* (1967) という著書がある)

をまじえていろいろと興味ある話題が展開した。個性と民族性の問題はそのひとつである。言語学と文化人類学の提携の必要性も一同大いに強調した。東西文化の接点とも言うべきハワイの状況、日米語対照研究に興味を持つ学者がかなり集まっている点などを考えて、ハワイは今後われわれが研究を進めるには最適の場所であろうと考えた。研究上の便宜も計っていただけることになり、この会談の締めくくりとして、今回のアメリカ旅行は大きな収穫があったと思う。

会談のあと少し時間があったので、そこの美しい二世の秘書嬢とおしゃべりを楽しむことができた。申し訳ないけど日本語が全然できないと言う。まだアメリカ本土に行ったことがないと言うので、私の今度の旅行談をひとくさりやった。アメリカ女性事務員の案内によって大学内を見て回ったが、ハワイまで来て始めて日本の大学並みに学生がキャンパスに溢れるのを見た。今ハワイ大学では少数精鋭主義が提案され論議されているそうである。東大言語を出てここで日本語を教えておられる庄司香久子さんが土産物を買う案内をして下さった。今 Fiji 語を研究しておられるそうである。短い旅行ではあったが、各地でいろいろの方々のお世話をした。その御好意を忘ることはできない。

## 帰 国

ハワイ大学の見学を終え、昼前タクシーで Honolulu 空港に向う。運転手は威勢のいいアメリカ女性であった。ジャンパーにスラックスにサンダル、運動帽に色眼鏡といういでたちである。気を付けて見るとタクシーの女性運転手はほかにもあった。

日航機でいよいよ帰国の途につく。今日は向い風が強いので途中給油のために Wake 島に臨時着陸するという。着席してみると隣は若く美しい白人女性であった。窓側の彼女との間には空席がはさまってはいたが、何かおつに澄ましている感じで、私の主義の話しこみ戦術が開始できない。しばらくして私の前を通って手洗いに立ったが、依然として表情を崩さない。アメリカ女性らしくない人もいるものだ、と思ってお近づきになるのを断念した。スチュアーデスがキャンディーを配りに来た。彼女の手が届きにくいので私が取ってあげたところ、一寸ニコリとして "Thank you" と言った。この好機を逃がさじと、"Are you going back to Japan?" と聞いてみると予期に反して快い反応があり、私の話しこみ戦術は開始された。彼女はイギリス女性で、Newcastle 大学で文化人類学を専攻し、卒業してすぐアメリカに渡って

1年半を過ごし、今度は日本文化を観察したいと思って始めて日本に行くのだという。彼女の取つきにくさの原因はイギリス人であったためだと理解したのである。もっともここでも、Kleinjans 博士が問題とされた、個性を民族性と見誤る危険性に十分留意しなければならないが、彼女の行動型は今まで多くの人がイギリス人について観察して来たところによく合っていると思うのである。日本で職を得るには英語の教師が最も早道だということを聞いて、Berlitz School にやとわれて赴任するところだという。話し相手として正に打ってつけである。話しているうちに、一寸した冗談にも女学生のように快活に笑う気立てのよい人だということが分かった。私の専門を知つてからは、日本人に英語を教えるにはどういうところに気を付けたらよいかとか、日本語の方言はどうのようになっているかとか、柔順な日本の女子学生と同じような態度で聞いて来た。あなたは関西地方で働くのだから、多分関西方言を憶えるだろう。関西方言は男性的な東京方言に比べて女性的な方言であるから、女性であるあなたにはふさわしいと言うと、喜んでいた。おしまいにはそこでは窓のそが見えにくいだろうから私の隣にいらっしゃいということになり、私は彼女の写真をとった。あとで写真を送り届けるために彼女の名前を聞いた。First name は Katharine という。アメリカではある社長の秘書として働いたが、その社長はアメリカ人であるにもかかわらず、イギリス英語の [ə] という音はあなたにはどんな感じを与えるかと聞くと、おかしくて笑い出したくなる感じだ、あなたがた外国人は、アメリカでもイギリス式の発音を使う方がいいという。イギリス英語の 'o' の発音には [öu] と [əu] の発音があるが、古い方の [öu] はどんな感じを与えるかと聞くと、やはり一寸気取った感じだと答えた。Newcastle 出身だと聞いたとき、'carry coals to Newcastle' 《余計なことをする》というイディオムをつぶやいたところ、一寸びっくりして、どうしてその言い方を知っているのかという。前にこのイディオムをアメリカ人に用いたら全然通じなかったことがあるものだから、イギリスでは今もこの言い方を使っているかと尋ねたら、使っているとのことであった。日本に来るのにどうして日航機を選んだのかと聞いたら、友だちに聞いてみたら、日航機が1番サービスがいいそうだからという。確かにそうだろうと思う。殊に食事は日航が1番おいしいと思う。3月10日午後6時、羽田に着いたら雨で大変寒かった。超ミニの彼女はさぞふるえ上がったことだろう。

(東京大学助教授)

# APPLIED LINGUISTICS AND THE TEACHING OF ENGLISH

山家 保編, ELEC  
343pp., ¥2,500

OGAWA, Yoshio  
小川芳男

壯観である。英米の第一線級の英語学者と英語教授法学者が一堂に会して最近の言語学の発達と、それをいかに英語の教授法に適用するかを述べているのである。論文の多くは *ELEC PUBLICATIONS* から選びだしたものであり評者も出席して直接聞いた講演なども含まれている。論文の延べ数が23でその上に簡単ながら "Conclusions and Recommendations" がついていて計24である。また執筆者の数は計9名である。之等一流の英語学者や英語教授法学者の名前を知っておくだけでも無駄ではあるまい。一応 abc 順に surnames だけ並べてみると次のようになる。1. Fries, 2. Haden, 3. Haugen, 4. Hill, 5. Hornby, 6. Marckwardt, 7. O'Connor, 8. Scott, 9. Twaddell. 中島文雄氏が序文の中で scientific views of language and language learning を強調しているが、本書の出版によって從来 ELEC 及び ELEC 関係者という比較的狭い読者に独占されていた傾向のある貴重な論文（中島氏の言葉を借りれば glittering jewels in the literature of applied linguistics）が広く公開されたことは何よりである。これに匹敵するものは中島氏も序文で述べておられるように Allen の *The Readings in Applied English Linguistics* であろうが、評者の感想では本書の方が遥かにすぐれている。その理由の1つはあらゆる論文が applied linguistics の原理を述べながらも日本の英語教育の改善を指向していることである。その意味では 23 の論文が1つのまとまりをみせているなお巻末に山家保氏の簡にして要を得た "summaries and annotations" がついているのは一般読者に対して親切で賛成である。

外国语または第二言語としての英語の学習法の本が殆んど外国人によって独占されているのは理解し難い気がしていた。本書においては外国の学者ではあるが、日本の英語教育に視点をおいて発言または執筆されているのはわが意を得たりといふべきで大変愉快である。教授法を臨床医学に例えている評者としては、一般論よりもこのような指向性をもった論文の方が現場の教師を直接益する点が多いと思う。

さて本書の内容であるが、Structural Linguistics 「構造言語学」を中心とした The Oral Approach に中心があるのは当然であるが、本書に寄稿しているような学者の直接の言葉を聞くと一般に理解されて（またはして）いるものとは必ずしも一致しないことに気づく。例えば Charles C. Fries の "On the Oral Approach" の中で "So far as I know there is no magic method to make the learning of a foreign language simple and easy" (p. 202) とか 'I have already said that the 'oral approach' does not exclude the use of reading or writing" (p. 204) のような発言は読者の中には意外と感じられる人であろう。しかしこのような考えは教授法学者に共通した考え方とみるべきで例えば Haugen は "New Paths in American Language Teaching" の中で "Teachers and pupils alike would be happy if there were some method of learning foreign languages painlessly and easy" (p. 133) と subjunctive mood で書きだしたり Twaddell は "Language Study and Language Learning" の中で "We know that conditions are different in Japan and in the United States, and that each different foreign language has its own special problems. ... With your own experience and knowledge of your special problems, you can decide better than I, what is useful to you in these ideas." (p. 101) と教授法の具体的な内容は各国によって異なることを述べている。従って日本における英語教育や教授法の内容は言語学を背景に日本の実情を考慮して日本人が決定すべきものなのである。実際構造言語学がわれわれに教えてくれた教訓の1つは learner's language と target language の contrastive study であり、それによって differences と共に difficulties を発見してそれに重点をおいて指導することであった。このことは Haugen の次の言葉で一層明瞭になる。 "Some have thought that ELEC is committed to particular method or approach in teaching English. Some have thought that ELEC is limited to the methods proposed by C. C. Fries. This is not true." (p. 150) 要するに ELEC の唱導する method は ELEC Method で同じ原理に立っていても具体的には日本獨得のものであるということであろう。現在の ELEC は Fries 博士をはじめ本書に寄稿しているような学者の学説を日本的に digest して日本の英語教育の改善に努力しているということであり、またそれが ELEC の当然あるべき姿と評者は信じている。

執筆者中唯一人の英国人であり、且つわが国に於いて長く英語の教鞭をとった経験のある A.S. Hornby は "The Teaching and Learning of English" の中で "I have

often used the term 'A Direct-Oral Method,' I might also use the term 'Association Method.' But I always say 'A Direct-Oral Method' not 'The Direct-Oral Method.' There can be no *one* Direct-Oral Method.' と述べている。最近フランスあたりでは Multi-Media Method などという言葉が用いられるようであるが、There is no royal road to learning. の謠のよう、かりに英語の学習が learning でなくて skill の習得であるにしても英語学習に miraculous method はないと知るべきであろう。

A. S. Hornby 氏は Direct-Oral Method の Direct は直接 Object を提示して identify なり fuse させることだと述べ、Oral の方は文字通り Oral practice に重点をおくからだと説明している。近代外国语教育の著しい特徴は音声の重視であることとはいうまでもないことで、本書でも英語の学習の初步は、音声の習得にあるという点では各執筆者が一致している。Haugen は "Goals and Methods in Foreign Language Teaching" の中で "A language is a set of habits which enable the vocal organs to produce noises for the purpose of human communication" (p. 157) と述べ、Hill は "Recent Linguistics and the Teaching of English" の中で "Language is made up of sounds" (p. 164) と言って音声の重要性を述べている。

わが国では、イギリス英語かアメリカ英語かということがしばしば問題になるが、われわれが取り扱う英語は good English または common English (standard English ではない) と称すべきものであろう。英米語の差を誇張するのは無知かまたは snobbish な態度のあらわれである。本書のような専門家になると、英米語の差は殆んどないと主張している。すくなくとも more similarities than differences という態度で一致している。例えば、Markwardt は "American and British English" の中で英米語の差を語いや社会制度の相違などから述べた後に(その何れをとってみても卒業論文の課題になる!)次のように述べている。"This brings us back to the question which was posed at the outset of this discussion —what type of English is to be taught as a foreign or second language in various countries throughout the world. Although this discussion has dealt with the differences between American and British English rather than the similarities, the point that the similarities outweigh the differences, both in number and proportion has constantly been emphasized." (p. 45) と言い、発音や単語についてもその差は極めて局限されたものであることを強調している。また文法については "Inflections

and syntax are generally uniform throughout the entire English-speaking world." (pp. 45, 46) と述べている。Fries 博士もわが国でよく問題になる Have you...? と Do you have...? なども Do you have...? が決してアメリカ英語にのみみられる独占的特徴でないことを歴史的に説明している。"On Varieties of English" の中でも Fries は "There is no single pronunciation nor any set of pronunciation features that will mark off American English from British English." (p. 26) と断言している。

日本の英学生の共通欠点の1つは stress に関して言えば adjective+noun combination だと評者は常々信じているが、Hornby が "Stress Patterns in Noun Collocations" の中でそのことにふれているのはさすがである。Hornby 氏はその書きだしで Palmer 博士によって研究された *Second Interim Report on English Collocations* のことを述べているが、若い読者には耳なれない言葉かも知れない。世界的に話題になった研究業績の1つで 'shoe, polish や 'sleeping 'children など、教師として必ず心得ていなければならないことが多数でている。Haden も、stress の重要性を "Phonetics, Phonemics and Transcription" の中でいろいろな例をあげて説明している。中には次のようなよく引用される例がある。"The White house happens to be a white house but the White house is not necessarily a white house." (p. 56)

しかしこの stress の pattern は極めて流動的で慎重を要することは Hornby の次の言葉でも分る。即ち、Daniel Jones はその発音辞典に 'ice cream を載せているが、これは比較的年輩の人の発音で今日若い人は 'ice-cream という人が多い。とにかくこのような stress の pattern によって意味が違うということは困難であるが大切である。このように困難であるが、大切なことは英語学習の初期に指導すべきである。一般常識として困難なことは後廻しにするという考え方は英語の音声の指導に当っては正しくない。Haden も "It serves no useful purpose to put off difficulties 'until later.'" (p. 58) と言っている。また Haden が "Phonetics, Phonemics and Transcription" の中で日英語の発音を比較しているのは興味があり示唆に富んでいる。

本書の中のどの1つの論文をとっても興味と示唆に富んでいて英語教師は内容に対する賛成反対のいかんに拘らず一読(再読、三読)すべきであろう。その中で来日当時もそうであったが今再読してみても感銘深いのは Twaddell の諸論文である。本書では "Recent Trends and Problems of Foreign Language Teaching in the U.S.A." と "Language Study and Language Learning" と "Preface to the First-Year Seminar Script 1958" の

3編が載っている。その中で例えば“Some of you probably know from your past experience that it is possible to develop from puzzle-solving to an ability to read a foreign language rapidly and accurately. But how? Only through reading many hundreds of pages—that is *practicing*—until the basic habits of sentence-structure had become unconscious.”(p. 114)と述べているのはHornbyが“Reading, especially rapid reading, extensive reading, is of great value in any language course. It is by extensive reading that we enlarge our knowledge of vocabulary already acquired.”(p. 280)と述べているのと、同工異曲で日本の英語教育、特に高等学校の英語教育にとって傾聴すべき言葉である。また、Twaddellは英語教師のthree functionsとして“a model for imitation, a guide for correction, a manager for practice”(p. 109)をあげているのも妥当である。また“This principle of partially learning, partially forgetting and then relearning is one of the accepted facts of linguistic life”(p. 92)は言語学習の本質についている。更に最も具体的で研究に価するのは彼の次の suggestionであろう。“At first we try to follow the 7-syllable rule. No students in the first months of work, should be called upon to carry more than 7 unfamiliar syllables in his memory for reproduction.”(p. 90)

最後にTwaddellの次の言葉は中学の英語教師に捧げたいものである。“In all our professional thinking and working, we remember that the teacher of a beginning foreign language course bears a heavy responsibility. It is his task to guide his pupils in the formation of right habits in the foreign language. They must be the right habits, and they must be firmly established in the ears and mouths and eyes and hands of pupils by practice, correction and confirmation.”(p. 120)

最後にHillが“Recent Developments and Problems

in the Teaching of English”や“Recent Linguistics and the Teaching of English”で新しい英語学を紹介しそのなかで変形文法にも言及して“I have dwelt at this great length on transformational analysis because it is extremely important in language theory and because it seems to me that its implications for teaching are great yet fraught with danger.”(p. 187)と述べているのは首肯できる。また同じくHillの述べた次の表現は1つの教授法を金科玉条として固執し、地域差や個人差を考慮に入れず自分自身は改善の工夫、努力を怠っている教師の肝に銘すべきものであろう。

“As with other new tools, I am afraid that their users are sometimes carried away with their enthusiasm. An even more serious danger lies in too close adherence to the form of transformational diagram used for purely analytical purposes by Chomsky and his followers.”(p. 186)

紙数に限りがなければ2,3の論文の1つ1つについて紹介と批評を書きたい誘惑にかられるが、すでに大要の紹介は山家保氏の手によって巻末に出ているので読者はそれを頼りに本書を通読されたい。本書は日本の英語教師にとってmustの書であることを評者は断言してはばかりない。

(前東京外国語大学長)

#### (p. 53 よりつづく)

唄の影は濃厚である(特にll. 5—6)。詩人にとって、この‘egg’とは、自分の心であり、自分の宇宙であり自分の詩にほかならない。「黙って通りすぎることができないのでしたら、あますことなく私を食べつくして下さい」と嘆願する卵=詩人の声は、はるかにどこかでHumptyの墜落と呼応し、ふしげにわたくしたちの心をうつ。

(東京大学教授)

## ELEC 新刊図書

### APPLIED LINGUISTICS AND THE TEACHING OF ENGLISH

山家保編 A5判上製 ￥2,500

C.C. Fries, A.A. Hill, A.H. Marckwardt, A.S. Hornby, E.F. Haden, W.E. Twaddell, E. Haugen, C.T. Scott, P.O'Connor等の米英一流言語学者の珠玉の論文を収めている。英語教育関係者の必読書。大学・学校図書館必備。

## 「変形文法」

E. バック著、井上和子訳注  
大修館書店、xxxi+418pp.  
1969、¥1,800

KAJITA, Masaru  
梶田 優

1. Emmon Bach, *An Introduction to Transformational Grammars*. Holt, Rinehart and Winston (1964) の邦訳である。原著は、変形理論の含む「諸概念・方法・問題点を段階的にわかりやすく説明」することを目的に書かれたもので、読者としては数学や論理学の背景はないが「記述言語学の方法・術語には精通している」人を予想している。

本書では原著の邦訳にそれとほぼ同分量の訳者詳註が付けられている。この詳註は「これまでの言語学の用語や考え方を、専門外の人々にも理解してもらうために基本事項を説明」し、また、原著の説明と「変形文法のその後の発展とを関係づけ近頃の考え方を紹介する」(xxiii-xxiv ページ)ためのものである。

その他に、日本語版に寄せた原著者の序文(とその邦訳)、演習問題の解答、参考文献補遺なども付け加えられている。

2. 原著は、生成文法の表面的・技術的な面だけでなく、その根底にある発想法・思考法を身につけさせることを主要な目標として書かれている。これは大事なことである。学問のどの分野でも同じことであろうが、特に生成文法のように若い学問においては、今までの研究成果を知ることよりも、この分野の基本的な考え方を身につけることが重要である。研究成果の学習は、それ自体のためというよりは、むしろ、基本的な考え方を身につけるための手段として意味があるということをはっきり認識しておく必要がある。

もちろん、どの分野にしろ、その思考法を能動的に理解するのは、それほど容易なことではない。生成文法の場合も、言語理論に関する本や個々の言語の研究などをいろいろ読み併せ、自分でも実際の資料について分析・記述を試み、また、他の研究者と意見の交換をするなど、さまざまな過程を経て、次第に考え方方が身についてくるのである。Bach の本は、そのような過程における 1 つの材料として能動的に用いれば、かなり役に立ちうる本である。特に、原著は、教室で先生と一緒に読むのに

適した本である。(説明が簡略でしばしば難解である、例が複雑すぎる、本文の説明と練習問題の絡み合せが不十分である等々の「欠点」も指摘されているが、教室で、適当な例や説明を補いながら使えば、それらの「欠点」は、活発な討論を誘発し却って長所ともなりうるであろう。)

Bach が説明の手段として用いたのは、Chomsky, *Syntactic Structures*(1957) その他に示されている文法の枠組みであるが、その後の諸研究によって、枠組みの部分的修正が必要であることがわかり、ひとまず Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*(1965) に示されたような形でまとめられた。したがって、改良された枠組みを用いて生成文法の考え方を説明した適当な入門書があればその方が望ましいわけであるが、これは、必ずしもそうでなくても構わない。*Syntactic Structures* から *Aspects* への進展は、重要なものではあるが、それによって生成文法の基本的な考え方方が変わったというわけではない。*Syntactic Structures* の枠組みも、生成文法の思考法を身につけさせるための手段としては、十分役に立つものである。*Syntactic Structures* の枠組みをよく理解させれば、そのあとの進展を理解させることは、筆者の経験では、比較的簡単である。そして、そのような手順で説明した方がよいと思われるふしすらある。*Aspects* の枠組みへの動きの説明をつうじて、思考法の理解を徹底させる可能性があるからである。ただ、2つの枠組みを同時に提示するのは、はじめての人の場合、いたずらに混乱させるだけであるから具合いが悪い。まず、どちらかの枠組みを熟知させた上で、もう一方との比較をし、それをつうじて、両者の間の差異を生み出した思考法そのものを体得させるのがよい。(本書では、本文と註釈によって同時に 2 つの枠組みが提示されており、註釈がマイナスの作用をする恐れがあるので、はじめての人は、その点に留意して読む必要があろう。)

*Aspects* の枠組みではなく初期の変形理論に立脚しているということが、原著の、変形文法の 1969 年における入門書としての価値を必ずしも損うものでないことは上に述べたとおりであるが、一方、原著が構造主義的記述言語学の知識を前提にしているという事実は、変形文法の入門書としての原著の価値を著しく損うものである。初期の変形理論と *Aspects* の理論との相違が本質的なものではないに比べて、構造主義的記述言語学と生成変形理論の間の亀裂は、変形文法の入門書において扱うにはあまりに大きすぎるからである。われわれは構造主義的記述言語学から多くのことを学んだし現在も学びつつあるが、これを変形文法への入門のための条件にすることは不適当である。伝統文法にせよ構造主義の文法にせよ

よ、本格的に言語を研究しようとする者ならば必ず熟知していかなければならないものであることは言うまでもない。しかし、それらは、新しい座標に正しく位置づけられ適当な段階において導入され眞の意味で活用されねばならない。それらは、学生が、各種の資料を広く用いて自分の研究ができるようになった段階で、あるいは、言語学史・科学史のパースペクティヴに置いて現在の言語理論を考える準備ができた段階で導入してもよいものであって、入門期に導入する必然性は極めて稀薄である。本書には構造主義的記述言語学の諸概念・用語などについての秀れた註釈がつけられているが、はじめての読者は、上述のことをふまえてこの註釈を活用するのがよい

3. 言うまでもないことであるが、学術書を翻訳で読む者は、それが翻訳であることから来るひずみがそこにあるかもしれないということに心を配る必要がある。もちろん、学術書の翻訳に当たっては、訳者は、読みやすさや自然さを多少犠牲にしても、正確さを第一にすることを期すであろう。できる限り過不足なく正確に原意を再現すべく努めることは、文学作品の翻訳などの場合以上であろう。しかし、それにもかかわらず、当該言語間の構造上の相違やその他の原因で、ある種のひずみが出来ることは殆ど防ぎ得ないようである。もしそうであれば、どのような種類のひずみがあり得るか、その例をいくつか見ておくことは無駄ではないであろう。

3.1. 数の区別について日英両語間に違いがあることは誰しも承知しているところである。しかし、この違いが、厳密さを要求する学術書にとっては不都合な曖昧さをもたらすことがある。たとえば、「英語には、同一の *S* という節点に支配されている 2 つの名詞句の間に同一性条件が満たされている時、再帰代名詞を導入する有名な規則がある。」(訳書 xviii ページ) という訳文の「同一の *S* という節点」という部分は、単複両様に取れる。つまり、(1) 問題の 2 つの名詞句 A と B が、同一の 1 つの *S* (たとえば *S<sub>a</sub>*) に支配されていさえすれば、その他の *S* (*S<sub>b</sub>, S<sub>c</sub>, ...*) の中に A または B の一方のみを支配し他は支配しないというものがあっても差支えない、とも取れるし、また、(2) A と B の両方が全ての同一の *S* (*S<sub>a</sub>, S<sub>b</sub>, S<sub>c</sub>, ...*) に支配されていなければならず、どちらか一方のみを支配する *S* があってはならない、という意味にも取れる。しかし、原文は “There is a well known rule of English which creates reflexive pronouns under conditions of identity holding between two noun phrases which are dominated by all the same *S-nodes*。” (訳書 x ページ、斜字体筆者) となっており、原意が(2)の意味

でしかありえないことは明らかである。このような場合、原文ではその必要のない読み取りを、読者がしなければならないのである。

3.2. 日英両語は著しく語順が違うというのも、これもまた、誰しも承知していることであるが、この違いのために、原文では線的距離が遠く離れている 2 つの語が訳文ではすぐ近くに現われるということ (またはその逆のこと) が起り、それが解釈に影響を及ぼすことがある。たとえば、「ある言語の(生成)文法は、基本要素からなるどの列がその言語で許容されるかを、形式面から明確に示す論述の集合である。(この論述をもう少し適切に修正したものを次の 2, 3 章で展開し、そこでこれに加えて文法が許容した 1 つ 1 つの列の構造を示さなければならないという条件をつけることにする。)」(18 ページ) という訳文には「論述」という語が 2 度出て来るが、この訳文を最初読んだ時、筆者はその 2 つの「論述」が同じものをさすように受け取ったため、文意が理解できず、2, 3 度読み直して、それが筆者の誤読であることがわかった。原文の方は “A (*gerative*) grammar of a language is a theory or set of statements which tells us in a formal and explicit way which strings of the basic elements of the language are permitted. (A somewhat more adequate version of this statement will be developed in the next few chapters, where we shall in addition require that the grammar tell us about the structure of each permitted string.)” (原書 13 ページ) となっており、筆者のような誤読の可能性は皆無である。この場合、前項で述べた数に関する日英語の違いが決定的な要因になっており、また原文のゴシック字体 (*generative*) が訳文では普通の字体になっているため第 1 の文が「生成」文法の定義を与える “statement” であることが解かりにくくなっていることもあるだろう。しかしその他に、原文では 2 つの “statement” が遠い位置に現われているのに対し訳文の方では 2 つの「論述」がすぐ近くに現われていることも筆者の誤読の一因になっていると思う。

3.3. 冠詞が日本語にないということも、ひずみを起しやすい。たとえば「この論文の主要部分では上に挙げた公理にさらに制限をつけ加えることと、つけ加えられた制限に従う文法、および同じくこれらの制限に従う言語の間の関係の研究とを取り扱っている。」(171 ページ) という訳文の「関係」という語を筆者は、一方に文法があり他方に言語があり、問題になっているのはその両者 (文法と言語と) の間の「関係」というふうに読んでしま

った。しかし、その先きを読むと、3種類の制限がつけ加えられ、問題の「関係」は、そのうち1種類の制限を受ける文法（およびそれによって生成される言語）と別種類の制限を受ける文法（およびそれによって生成される言語）との間の包含「関係」であるらしいことが解かった。原文では、問題の部分は “the relations between the grammars and languages obeying these further restrictions”（原著は159ページ）となっており、冠詞 the は grammars の前だけにあって languages の前にはない。したがって、grammars and languages をひとまとめにしてその全体に the が係っており、筆者のような誤読は原文からは起りにくく、これは冠詞の違いによるひずみの1例であろう。

3.4. 「要素が有限の集合によって作られたあらゆる長さの列の集合は可算である。」（162ページ）この訳文は何度読み直しても意味が解からなかった。「列」にかかる修飾語句の骨組みが「…集合によって作られた…列」であるので、筆者は「集合が並んで出来た列」のような意味に取ってしまったのである。原意は “The set of all sequences of any length constructed out of a finite set of elements is denumerable.”（原書151ページ）で、きわめて明快である。「要素が並んで出来た列」であって「集合の列」ではない。筆者のこの誤読は英語の名詞句の次のような性質から来るのではないかと思う。冠詞+名詞+of (+冠詞)+名詞のような内部構造を持つ名詞句において1番目の名詞の位置に group, number, set 等等の名詞が来た場合、この名詞句全体の意味上の中心は1番目の名詞であることもあり（たとえば The group of the writers was relatively small）、また、2番目の名詞であることもあり得る（たとえば John is known to a group of writers）。後者の場合、意味上の中心になる方の名詞が文法的には（少なくとも表面の形において）前置詞句の中にあり「主要語」の位置にはないのであるが、日本語ではこのような場合、「作家の一群(に知られている)」と言うより、「一群の作家（に知られている）」というふうに、意味上の中心になる名詞を文法的にも主要語の位置に置くのが普通で、「作家の一群」というと意味的にも「群」が中心であるように解釈されるであろう。しかるに、上記の訳文では、意味上の中心の「要素」ではなく「集合」の方を主要語の位置に置いたので、ひずみが出来たのである。これは、意味上の主要語と文法上の主要語の対応関係に関する日英語の相違が生み出したひずみの1例であると言えよう。

“...the number of independent arguments for the cycle is impressive.”（訳書xiページ）が「…巡回を擁

護する独立した議論は印象的である」（xviiiページ）となっているのは（上の例とはちょうど逆のケースだが）、これもやはり名詞句の主要語に関するずれの1例ではないかと思う。（ただし、この場合は、文脈から考えて、原意がやや不明瞭である。）

3.5. 等位接続詞に関係のあるひずみもありうる。このことは下記の例からも窺えるであろう。

「この仮説を強くするのを助ける形式的研究とその数学的結果を示すことは非常に興味深い」（xxiiページ） “formal studies helping to sharpen the hypothesis and to show its mathematical consequences are of great interest.”（訳書xivページ）

「この章では一般言語理論についての議論を、抽象的な文法体系の研究に關係づけることからを主として考えるのだ、ということを強調しておかねばならない。」（156ページ） “It should be emphasized that the considerations of this chapter relate primarily to discussions of general linguistic theory and to the abstract study of grammatical systems.”（原書145ページ）

3.6. 原文が複雑で長い時、訳文の読みやすさ・自然さを犠牲にしないために、2つ以上の文に切ることがある。その際、等位接続詞の結合領域が切断され、そのためにはひずみが生じことがある。たとえば「制限 3. あらゆる規則は  $xAy \rightarrow xwy$  の形式で。A, x, y は制限 2 を満たすが、w が空でない。また w は单一の終端記号 a であるか、单一の終端記号と单一の非終端記号をしたもの、すなわち  $aB$  であるかのどちらかである。」（171ページ）は、“RESTRICTION 3. Every rule is of the form  $xAy \rightarrow xwy$  with A, x, y as in Restriction 2, but w is not null and is either a single terminal symbol, a, or a single terminal symbol plus a single nonterminal symbol, i.e.  $aB$ 。”（原書160ページ）を2つの文に切ったものである。この原文は2つの部分から出来ている。1つは、A, x, y に関する制限を述べた前半の部分で、もう1つは w に関する制限を述べた後半の部分である。この2つの部分が but によって結びつけられている。But という逆接の接続詞を用いたのは、前半が Restriction 2 で述べたのと同じ内容であるのに対し、一方、後半の w に関する部分は Restriction 2 と異なるからである。しかし、その w の制限も not null という部分は、実は、Restriction 2 と同じで、異なるのは and 以下の部分だけである。したがって、訳文のように not null と and の間に文の切れ目を置くと、Restriction 2 と同じである not null の部分だけが前半と結びつけられるが、その関

係はもはや逆接ではない。こうして、逆接の接続詞との間に矛盾が起こり、つじつまの合わない文になる。

3.7. 「巡回の仮説には、それを支持する最も堅固な証拠が与えられた。」(xvii ページ)といふ訳文はどのように解釈されるのが普通であろうか。筆者はこれを一読した時、(1)「巡回の仮説を支持する種々の証拠のうち、最も堅固なものが与えられた」のような意味に解釈し、(2)「巡回の仮説に与えられた証拠は、その他の仮説に与えられた証拠と比べて、最も堅固である」のような意味には取らなかった。原文は “The firmest evidence has been offered for the hypothesis of the cycle.” (訳書 x ページ) である。訳文では「それ (=巡回の仮説) を支持する最も堅固な証拠」とあるから、for the hypothesis of the cycle を the firmest evidence を限定する形容詞相当語句と解したことになり、その解釈からは、上記(2)の意味は出て来えない。しかし、原文の方は(2)のように解釈できるし、その方が (文強勢の置き方にもよるが) 自然な読み方であろう。と言うのは、文脈から考えて(2)の解釈の方がよいと思われるからである。つまり、問題の文は、3つの仮説 (そのうちの1つが巡回の仮説)について各々の証拠を論じている部分に出て來るのであるが、その少し後 (訳書 xii—xiii ページ) で、巡回の仮説以外の2つの仮説については殆ど確かな証拠はないという意味のことが述べてあり (巡回の仮説のための幾つかの証拠が比較されているというよりは、) 3つの仮説の確からしさが比較されているものと考えられる。また巡回の仮説そのものについても結論としては “it must be admitted that the question of the ordering of transformations is once more quite open” (訳書 xii ページ) と言っているので、上記(1)のような解釈とは矛盾するであろう。

問題の箇所について原文と訳文の間に上記のとおりのずれがあるとすれば、この例は、翻訳のひずみのタイプという観点からいって、興味深い。原文 “The firmest evidence has been offered for the hypothesis of the cycle” を表面の形のとおりに受け取れば、for the hypothesis of the cycle を the firmest evidence に係かる形容詞相当語句とは解釈できない。しかし、原文を「もとの形」に直して考えてみると、だいたい Someone has [offered] [the firmest evidence] [for the hypothesis of the cycle] のようになるから、この形ならば、Someone has [offered] [the firmest evidence] [for the hypothesis of the cycle] と「同音異義」の構造である。この「同音異義」が問題のひずみを惹き起したのかもしれない。もしそうだとすれば、この例は、表面の形の同音異義ばかりではなく、「もとの形」の「同音異義」もひずみを惹き起し得ること、解釈が表面の形から直接行われるのではなく「もとの形」経由で行われるらしいことなどを示していることになり、興味深い。

3.8. 翻訳のひずみは、もっと単純な原因でも起こり得る。たとえば、字体の区別を無視すれば、当然、その分だけ情報が失われる。術語の定義あるいは初出を示すゴシック体を無視すると、定義・初出という情報が失われることは言うまでもないが、その他にも意外な不都合をもたらすことがある。その1つの例は既に 3.2 節で述べたとおりである。また、記号・引用例などを示す斜字体がひずみを起こすこともある。たとえば、 “the author has found the same six-year-old informant unerring in her judgments of such examples of ungrammatical sentences as *Read you a book on modern music?*, *The child seems sleeping*, and other sentences about colorless ideas, green horses, and oranges” (原書 185 ページ) が「著者は上記の6歳の報告者が、 *Read you a book on modern music?* *The child seems sleeping.* とか、 *colorless ideas, green horses, and oranges* などの文法にかなわぬ文についての判断を間違いなくすることを知った。」(196 ページ) となると大きなひずみが生じる。原文の other sentences about colorless ideas, green horses, and oranges というのは、言うまでもなく、つぎの2つの例文 *Colorless green ideas sleep furiously.* (*Chomsky, Syntactic Structures*, 15 ページ) I have never heard a green horse smoke a dozen oranges. (M. Joos, “Semology: A Linguistic Theory of Meaning”, *SiL* 13.57)のことである。しかし、訳文では “colorless ideas, green horses, and oranges” がそれ自身1つの例文であるかのように解釈される可能性がある。そう解釈すべきでないことは、原文では sentences about (についての文) となっていること、 colorless ... oranges が斜字体になっていないことなどから、明らかである。なお、上記の *Colorless green ideas...* I have never heard a green horse ... などの文は、 (*The child seems sleeping* などとは違って) 意味は奇妙だが文法にはかなった文の例として引かれるのが普通であって、訳文の「…などの文法にかなわぬ文」の中にこれらを含めてはならない。

補助記号の「」などもひずみの原因になりうる。たとえば、

多くの違った言語の研究に基づいて、「研究後に考えられた」言語構造に関する一般論を作ることができないという理由はない。(188 ページ)

という訳文の「研究後に考えられた」に何故「 」がついているのか、注意深い読者は訝しく思うであろう。原文は a general theory of linguistic structure which is "postconceived" (原書 177 ページ) とあり、少し前に preconceived という語が出て来る。つまり、preconceived と対照させるために、Webster にも出でていない postconceived なる語を仮に作って用いたので、それが臨時語 (nonce-word) であることを示すために引用符号をつけたのである。訳文の「研究後に考えられた」は臨時語ではないから、「 」が宙に浮いた。

公式などに用いられる記号を取り違えた場合にも重大なひずみが起りうる。たとえば、訳書 82 ページの公式が、

構造記述: X—Y—Z

構造変化:  $X_1-X_2-X_3 \rightarrow X_1-R-S-X_3$

となっているが、原書 (75 ページ) では R と S の間の記号は—ではなく+である。このようなひずみは、入門書を必要とするような読者に、変形規則の構造変化というものは項の数を増やす場合もありうるという誤解を持たせる恐れがある。

3.9. 原文の一部が訳文において脱落していることもあります。たとえば「派生句構造表示において 1 つの項目がもとの句構造表示に取って代わる。」(83 ページ) では、"In the derived P marker one item takes the place

of several in the original P marker" (原書 75 ページ) の several in の部分が脱落したため原意が著しくゆがめられている。同様の例をもう少し付記すると、訳書 xiii ページ 15 行目の only if の only (訳書 xx ページ下から 3 行目参照)、訳書 xiv ページ 13—4 行目の in weak generative capacity (訳書 xxi ページ下から 7 行目参照)、原書 153 ページ 12 行目の merely (訳書 164 ページ 15 行目)、原書 158 ページ本文下から 8 行目の further (訳書 170 ページ本文 7 行目)、原書 185 ページ 1 行目の naive (訳書 196 ページ本文下から 8 行目) など、いずれも、その脱落が原意を損ねている。

4. 以上、変形文法の入門書としての原著の長短および翻訳のひずみのタイプという 2 つの問題に焦点をしぼって、気付いたことを述べたが、最後に訳者詳註について一言つけ加えておく。原著とほぼ同分量にも及ぶ訳者詳註の中に、構造主義的記述言語学の諸概念・用語の解説、*Syntactic Structures* から *Aspects* への理論の推移の説明などが含まれていることは上述のとおりであるが、その他に、*Aspects* 以後に行なわれた英語に関する具体的諸研究の紹介、日本語の幾つかの問題に関する訳註者自身の考え方などが含まれている。そこには、訳註者の該博な知識と透徹した分析力を反映した豊かな内容が盛り込まれている。体系的な記述ではなく、本文の註釈という形を取っているので、読者自身が組織立てながら読む必要はあるが、ともかく読み方・使い方によっては、大きな学益をもたらし得る詳註である。(東京教育大学助教授)

(p. 37 よりつづく)

っていくからこれは何のことかわからないわけです。

服部 まだその人はわからないというからいいけれども、わかったと思う西洋人が多いわけですね。(笑) そういうのが日本文学をどんどん翻訳している。そこに危険があると思うんだな。わかったと思ってへんちくりんに誤解しながらわかっているつもりになっていることがあるといけないから、それこそこういうチームワークで、日本の学者の論文の非常に正確な翻訳を、しかも自然な英語でやっていただけたらどうだろうと思います。

中根 だけど全部 sentence, 対 sentence と訳していく、construction の違いというのがまたバッとはっきり出るのではないか。

服部 おそらく sentence 対 sentence で訳するだけではすまなくて、3つぐらい sentence をまとめて訳さなければならぬとか、いろいろなことが起こるのでない

かと思いますね。

中根 私最初にロンドンで論文書いたときに、インドの未開民族の論文を書いていたんですが、私は初め、未開民族の全体構成を述べて、それからそれが幾つかの block に分かれてそれから村があって、家があって、人間があると、こういう日本人の順序ですね。そうしたらどうして家人間から書き始めないかというんです。ですから順序がやはり違いますね。初めに出していく順序がね。

服部 手紙のあて名を書く順序の違いと同じですね。

中根 あれと同じなんですね。

國廣 そういうような discourse の分析というのも必要になってきますね。

中島 どうもいろいろおもしろい、また有益なお話をありがとうございました。

(速記: 上山采子)

# 展望通信



## ◆ELEC 夏期研修会（中・高英語科教員対象）

本年の ELEC 夏期研修会（通学制）はつきの通り実施される予定である。

- (1) 中学校教員対象 7月27日(月)～8月8日(土)
- (2) 高等学校教員対象 8月17日(月)～8月29日(土)

参加希望者は15円切手同封のうえ、千代田区神田神保町3の8 ELEC 英語研修所「夏期研修会」係宛に要項および願書を請求されたい。

## ◆ELEC 夏期講習会（社会人・学生等対象）

ELEC では今年度から、一般社会人・学生等を対象に ELEC 夏期講習会 (Summer Session) を開催する。

- (1) 前期 7月27日(月)～8月7日(金)
- (2) 後期 8月17日(月)～8月28日(金)

受講希望者は15円切手同封のうえ、千代田区神田神保町3の8 ELEC 英語研修所「夏期講習会」係宛に要項および願書を請求されたい。

## ◆海外留学英語能力テスト (TOEFL 模擬テスト)

ELEC では海外留学志望者のために英語能力テスト (TOEFL 模擬テスト) をつきの通り実施する。

- 第1回テスト 9月26日(土)  
第2回テスト 11月28日(土)  
第3回テスト 2月27日(土)

受験希望者は15円切手を同封のうえ、千代田区神田神保町3の8 ELEC 英語研修所「海外留学英語能力テスト」係宛に、要項および願書を請求されたい。

## ◆ELEC 奨学研修員コース

ELEC 奨学金（学費・書籍費の全額および滞在費の一部補助）による ELEC 奨学研修員コースは、中学校・高等学校英語科教員対象に9月から11月までの3か月間 ELEC 英語研修所で実施される予定である。

参加希望者は15円切手同封のうえ、ELEC 英語研修所「奨学研修員コース」係宛に要項および願書を請求されたい。

## ◆ELEC 賞研究論文・実践記録の募集

ELEC では、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目的

で、「研究論文」または「実践記録」を広く一般に募集している。

原稿の締切は毎年9月末日で、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接貢献するところ大と認められたもの1件に対し、ELEC 賞が11月初旬に授与されることになっている。

## ◆ELEC 人事往来

ELEC 関係春の被叙勲者はつきの通りである。

評議員	足立 正氏	勲一等	旭日大綬章
評議員	石坂 泰三氏	勲一等	旭日大綬章
評議員	松田竹千代氏	勲一等	旭日大綬章
評議員	灘尾 弘吉氏	勲一等	旭日大綬章
評議員	木内 信胤氏	勲一等	瑞宝章
評議員	北沢敬二郎氏	勲一等	瑞宝章
評議員	水野 成夫氏	勲一等	瑞宝章
理事	辻 直四郎氏	勲二等	旭日重光章

## ◆Mr. Wilbur Isaacs のリサイタル

昨年行なわれ好評であった Mr. Wilbur Isaacs (ELEC 英語研修所専任講師) のリサイタルが本年もつきの通り開催される。

日時：5月30日(土) 午後4時～6時

場所：ELEC 会館 7階ホール

歌手：Wilbur Isaacs バスバリトン

伴奏：園部順夫

### プログラム

#### I

Invocation et Hymne au Soleil (from "Les Indes Galantes") .....	Rameau
Care Selve (from "Atalanta") .....	Handel
Si Tra i Ceppi (from "Berenice") .....	Handel
An Evening Hymn .....	Purcell

#### II

Vier Ernste Gesänge (Four Serious Songs).....	Brahms
1. One thing befalleth the beasts and the sons of men	
2. So I returned and considered all the oppres-	
sions	
3. O Death, how bitter thou art!	
4. Though I speak with the tongues of men	

#### III

Au Cimetière	
Nell	
Les Béréeaux	
Fleur Jetée	
Infidélité .....	Hahn
Danse Macabre.....	Saint-Saëns

Sweet and Low .....	Barnby
Shenandoah.....	American Folk Song
Beautiful Dreamer.....	Foster
Danny Boy .....	Traditional Irish
Lil' David, Play on yo' Harp .....	Negro Spiritual
Deep River .....	Negro Spiritual
Bound for the Promised Land...Early American Song	

#### ◆ELEC 録音スタジオの拡充

ELEC では、学校、出版社等からの録音依頼の増加に伴ない、このほど録音スタジオの設備を一新して一流放送局並の録音ができるようになった。録音に関する問い合わせは ELEC 出版部「録音係」宛へ。

#### ◆ELEC 月例研究会（於 ELEC 会館）

第41回月例研究会 6月27日（土）2:30～4:30

講演 「最近のイスラエルと聖書」

講師 清水 譲氏（国際基督教大学教授）

なお、7月、8月の月例研究会は夏期のために休み、次回は9月から始まる。

#### ◆ELEC 英語研修所秋学期開講

一般成人および教員を対象とする ELEC 英語研修所の秋学期は、つぎの通り開講される。

◇受付 7月1日（木）～9月9日（木）

◇開講 9月9日（木）

◇グループの種類

昼間部（週5日と週3日（月水金））

夜間部（週5日、週3日（月水金）、週2日（火木））

◇研修所要覧は郵便切手100円を同封のうえ、千代田区神田神保町3の8「ELEC 英語研修所」宛請求されたい。

#### ◆研究会に対する講師の派遣

ELEC では、英語科教員で組織されている全国各地の英語教育研究団体等の要請に応じ、講師を派遣し、英語教育に関する研究活動に対して援助助言を行なうことになっている。講師派遣の希望のある方は ELEC 研究開発部宛申込みをされたい。

#### ◆ELEC 英語教育研究大会

第6回 ELEC 英語教育研究大会は11月7日（土）ELEC 会館において開催される予定である。

#### ◆VTR の実験

ELEC では英語教育における Videotape Recorder の利用についてつぎの学校に研究協力を依頼している。

横浜市立中川中学校

徳島市立徳島中学校

兵庫県立三原高等学校

東海大学付属高等学校

## 編集後記

◇1961年4月に *ELEC Bulletin* の創刊号が発行されてからもう10年になる。その間、発行所は大修館書店に始まり学習研究社を経て、ELEC になり、名前も前号から「英語展望」に改められた。内容面においては、国際的視野と感覚の養成に力点をおいた編集を行なうことになった。しかし、前号においては、それを充分發揮し得なかつたが、今回は「国際展望」において試みたつもりである。

◇この「国際展望」では、(1)国際的視野において考えることの必要性、(2)外国人に接して、思考・感覚・習慣などのずれから生じたエピソード、(3)外国語を学ぶことのむずかしさ、(4)日本における外国語教育の盲点、等々に関する記事を扱いたいと思う。

◇日本における外国語教育の盲点をついたものに座談会の「言語行動の比較研究」がある。これの内容はワシントンで開かれた「日米言語行動の比較研究計画」の予備会議の内容をテーマにしているが、この中には英語教育関係者は見のがしてはならない重要なポイントがいくつか含まれている。これらは将来の研究課題を投げかけているわけで、こうした分野での研究が多くの方々によつてなされることを期待したい。

◇連載の新英文法講座「Objective Complement の種類」「Mother Goose の世界」は今後も続けてご執筆いただく予定になっている。また、前号 John B. Carroll と Leger Brosnahan の Lecture の録音テープの頒布をしたところ、意外に多くの方々から注文があったので、将来この雑誌に関連する録音テープも発行する予定にしている。

◇この雑誌は、創刊号においても述べたように「読者がつくり、読者が育てる」ものであると信じている。雑誌についての叱正および投稿を歓迎するものである。

(Q.Q.)

〈前号（No. 29）誤植訂正〉

p. 56 右欄 L. 5 重右→座右

〃 〃 下から L. 3 詩→誌

## 英語展望

## 第30号

定価 200円（送料45円）

昭和45年7月1日 発行

中島文雄

◎編集人 竹内俊一（ELEC理事長）

発行人 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12

電話 (269) 1111 (大代表)

印刷所 ELEC (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911～8916

振替 東京 11798

# ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC